
生まれ変わって恐暴竜？

フランク・ホリガン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生まれ変わつて恐暴竜？

【Zコード】

Z9674V

【作者名】

フランク・ホリガン

【あらすじ】

とあるマヌケな神さまのミスで、青年がしょうもない死に方をしてしまいました

申し訳なく思つた神さまは、青年を、青年が望む世界に転生をせることを約束しました

青年は大好きなモンスター・ハンターを選び、神さまはそれを承諾して、青年を狩りの世界へと転生させました

青年は期待感を膨らませ、いざハンター生活を開始する決意をしました
なのに……

は……ハンターではなくて、モンスター！？

しかも何故に恐暴竜イビルジヨーー！？

ユクモ村でハンターちゃんとの混浴の野望は…？
体デカくて入れない！

ポッケ村でキリン装備ハンターちゃんとの触れ合いは…？

当然無理！

触れ合ひついでいるか、命を賭けた殺し合いになるわ！

第一話・転生

ふと田が覚めると、俺は真っ白の部屋にいた
どいまでも続く真っ白な空間に俺は困惑したが、結局夢だろ?と結論づけてもう一寝入りすることにした

『夢やあらへん』

『さ田境の庄の庄の庄の庄の庄』

へえへえ、それはたこそつな夢ですね……って、誰の声?

俺はその場から飛び起き、声がした方を見ると、白装束のつまっこ
幼女が、杖を持って佇んでいた

『…お前今ウチのことバカにしたやろ?
ウチこいつ見ててな、神さまの一員なんやで?』

この歳で自分を神さまだと勘違いしているのか…
そうだね、神さまはきっとどこかこいるよ

『お前信じてないやろ…。
まあええ、お前なんぞに信用されようがわれまいが、ウチにはまだいつ
でもええしな。

さて、本題や。

実をいふとな、自分をつき死んだんや。』

なんだこのクソガキは…自分が今まで会ったなかで、最高に生意氣だ
…つて今コイツなんて言った?

俺が死んだ?

『せや、自分がマヌケ面で寝てるほりで、タンスの角に頭ぶつけ
お陀仏。』

ハハハハ、この幼子は何を言つてるんだい?

俺は「ほんにもペインペインしてゐるじゃないか

とか思つてゐると、神さまは俺に大きな鏡を向けて來た

その鏡に映つた自分の体を見て、俺は心臓が飛び出るくらい驚いた

鏡に映つていたのは俺の人間の体でなく、黄緑色の火の玉みたいな
物体だった

俺「ギヤアアアア！」

なんじやこりやーーーー？

俺は絶叫して慌てふためき、その場をグルグルと走り回る（浮かび
回る？）

試しにもう一度鏡を見てみたが、変わらず黄緑色の火の玉であった

俺「マジで俺死んじゃったの？
この若さで死ぬなんて、未練ありまくりだよ？」

まだワンピースの結末見てないし、FF全部クリアしてないよー。』

『ちつさい未練やなあ。

それもこれも、全部ウチが悪いんやけどな。
許したつて?』

神さまとやらはこきなり俺に謝つてきたが、俺は分けが分からず困惑

れつかの生意気な態度と変わつて、神さまはスゴく申し訳なせそつに謝罪していくが、話しが分からぬので事情を説明してもひつ

く糸があんねや。

『ウチら神さまの世界には、運命の糸つじゅつ…まあ、命を繋いど
てすつ転んで一本切れたんやわ…。』

俺「その一本が…俺の糸だつたわけ?」

神さまはたいそう申し訳なせそつにこへつと頷いた

こんな有り得ない話しさは信用出来なかつたが、鏡で見た自分の姿と、さつき床にぶつかつた痛みが、夢ではないことを証明していた

自分が死んだという実感を持てない俺だつたが、胸に穴が空いたようなひどい喪失感を覚えた

神さまはそんな俺を見かねてか、ある解決案を持ち出してきた

『自分死んだのはウチの責任やからな…。

詫びとして、自分が大好きな世界に転生せたるわー。

『ん中から選んでなー!』

絶望に沈んでいた俺に、神さまは精いっぱいの笑顔を向け、どこからか風呂敷を取り出した

神さまは風呂敷の中身である、漫画やゲームソフトを雑にぶちまけた

あれ? どれもこれも見覚えあるぞ?

北斗 拳にゆる に剣心、キン肉 ン、GTAにFallout 3
だと?

全部俺の部屋にあったもんじゃねえか!

『おう、自分に合ったもんウチが選び抜いてきたわ。
参考になる現物あつた方が、転生もしやすくてな!』

分かった…勝手に持ち出してきたことは不問にしよう…

だけど、選び抜いた作品全部物騒な世界観じやねえかああ!

北斗 拳…ラ ウとサウ ーに瞬殺されるわ!

るひ に剣心…一太刀で斬られるのがオチだ!

キン肉 ン…悪 将軍に地獄の断頭台されるが、ネプ ューンマン
のクロ ボンバーくらづわ!

GTA…車パクって刑務所行きか!?

つてか、こんなの現実世界でもやるつとすれば出来るわ！
絶対やらないけど…

Fallout3..まだクリアしていないから分からんけど、変わらず物騒だ！

俺「他にもあつたじやないか！」

穏やかな世界観のヤツとか、何より美少女がいるよつた作品が！」

『ん？ ウチの趣味や。』

俺の願望は神さまに一蹴され、俺はガツクリとうなだれた

ふと、風呂敷の端に隠れていた未確認のゲームソフトがあつた

モンスターハンターポータブル

人間であるハンターが、自分よりも大きく強力なモンスターを狩る
という、俺が最もはまつたゲームの一つだった

友人のすすめで俺は2ndからやり始め、その後の3rdまでかなりやり込んだ

これも他と同じように物騒といえば物騒だが、俺には大きな魅力があつた

一部女性ハンターの装備が、とてもセクシーなのだ

2ndから2ndGまではキリン装備に興奮し、なんと3rdには混浴風呂があるではないか！

こんなにもおいしい世界を忘れていたとは…

俺は迷わずモンハンのソフトを引っ張り出し、神さまに見せつけた

『お、モンハンやん。ウチもちよつとやりしてもうつたんやけど、けっここうおもろかったで！

ヨシシヤ、これならウチもやりがいがあるかもんやー。』

ヒヤッホー！

モンハンの世界に行けるなら、現実世界の未練なんて砂の小粒ほどだ！

待ってるよキリン娘ちゃん！

ポッケ村からユクモ村に連れて行つて、混浴風呂に入つてやるぜ！

『なんやよつ分からんけど、えらい意氣込みやな！

…せや、詫びの品追加するわ。

自分があつひ行って苦労せんよう、身体能力その他もろもろ強くしたる！

ただチート臭いほびじやなくて、程よく最強やから注意したつてな？

ほな、眩しいから目瞑つてちよつだいな。

次回覚めたら…転生や。

俺は言われた通りに目をつむると、全身が光に包まれてボカボカしていくのを感じた

そして、徐々に意識は薄れていった

『一仕事完了やな！』

……しちつた！

何に転生さすか決めてなかつたわ、どうじょり！？

まあええか、なんに転生したかて腕っぷしは強いさかい。

……さ、ナルガ倒しでも行つてこよ。』

第一話・スバルタ親父の息子

海にプカプカと浮かんでいるよつな、心地よい感覚を抱いてウトウトしていると、甘い感覚が一気に叩き落とされる

全身にだるさを感じながら目を開けるが、光が少しもなく、目には闇しか映らなかつた

状況を確認すべく立とつとしたが、脳天が硬い壁のよつなものにぶつかり、とてつもない痛みを感じた

しかしそのおかげで、壁のよつなものに亀裂が入り、そこから明るい光が差し込んできた

「（一体何だつてんだ？声の調子もおかしいし……。）

この時俺は気づいてなかつた

俺の喉から発せられたその声が、今まで使い慣れていた声ではないことを…

俺は亀裂が入った壁を蹴り破り、そこから頭を突き出した

周囲は白い岩石で覆われた、大きな洞窟だった

しばらく呆けて洞窟を見つめていたが、頭上から妙な音がしたので見上げてみると……

グルルルル……

凶悪な顔立ちで黒緑の体色をした、恐竜みたいなデカいモンスターが、唾液を垂れ流して俺を見つめていた

「（ギヤアアアアアー！！

出たあああ！

いきなりモンスター出たあー！）」

俺はその場から一気に飛び出すと、光の差し込む洞窟出口に一目散

に駆け出した

俺は足下の尖った石にかまわず、懸命に逃げたが、ちっこい俺はあえなく捕まつて元の場所に戻されてしまった

(よ、よく見たらイビルジヨーじゃねえかよ…。恐いよつ、俺の転生人生いきなりお終いかよお！？)

俺は目の前の恐ろしいモンスターに恐怖し、ガタガタと震え上がっていた

イビルジヨーは俺を保存食としてとつてているのか、いたぶつて反応を楽しんでいるのか、満足げに眺めている

どちらにしても、殺る時はひとおもいに仕留めて欲しかった

しばらくその状態が続き、イビルジヨーが俺でなく、俺を含めたその周りを眺めていることに気付いた

恐怖でイビルジョーからなかなか目を離せなかつたが、徐々に自分の周りへと視線を向けた

そこには、ゴツい形状の卵が、数個乱雑してあつた

俺をエサにする気だ そう思った時にはすでに遅く、卵にひびが入り始めた

『ギヤー、ギヤー、ギヤー……！』

卵から次々とイビルジョーベイビーが誕生していく、金切り声のような産声をあげていった

イビルジョーの凶悪な面構えはしつかり受け継いでおり、お世辞にも可愛いとは決して言えない

俺は邪悪な赤子から後ずさりしていくが、背後の親玉を思い出し、反射的に振り返る

イビルジヨーは子どもたちを満足げに眺めた後、わきにいる生け捕りにした草食獣を踏み殺す

そしてその肉を喰い干切ると、何故かその肉を俺とベイビーたちの間に放り投げてきた

たつたいま殺したばかりの獣の肉は、新鮮な血が滴り落ちていた

しかしその時の俺には、何故かその生肉が、とても美味そうに見えたのだった

そして、抑えきれない食欲に俺は負け、がむしゃらに肉にかぶりついた

噛めば噛むほど血が滲み出るが、それすらも美味に感じ、あつと

いつ間に食べ終えてしまった

肉を食べ終えた俺に、イビルジョーは即座に新たな肉を放り投げてきた

俺の腹は肉ひとかけらで満足していなく、その投げられた肉をも食べようとしたが、頭が覚醒したベイビーたちが先にその肉にかぶりつく

目の前の食料を奪われた俺は、今まで抱いたことが内ほどの怒りを感じた

怒りに突き動かされ、肉を喰いつベイビーに強力な体当たりを浴びせた

一匹が吹き飛ばされ、生まれたてのヤワつな体に大きな衝撃をくうつたために、首を折つて絶命した

食事を邪魔された他の二体が怒るが、ほとんど残つていらない肉を見て、さらに俺は激怒した

俺に襲いかかってきた一頭のベイビーの喉を、皿にも止まらぬ速さで喰い千切る

俺は遺された僅かな肉を一口で喰い、あるいはとか今殺したばかりのベイビーまでを喰り喰い始めた

三頭目を喰い荒らし始めた頃にみづから俺の食欲はおさまっていき、そして自分が口こじしているモノを見て驚愕した

俺「（ウゲツ！何を喰つてんだ俺は！？
イビルジョーの子ども！？）」

喰い荒らされて臓器がバラバラになつたベイビーを見て、俺は吐き気を催していたが、もつと恐ろしいことに気付いてしまった

俺が喰つたのは子ども、子どもには親がいる…
コイツらの親はイビルジョー、そしてそのイビルジョーは今俺の背後にいる

俺はバツと振り返ると、イビルジョーがとても嬉しそうに撕き、さつき以上の肉を喰い干切ると、今度はくわえたまま俺に近づけてきた

やはり肉は美味そうに見えてしまい、その肉に食いついてしまったが、今回は恐怖心が残っていた

肉を食べ終えた俺を、イビルジョーはいろいろな角度から眺めだした時折顔を近づけるが、匂いだけを嗅いで何もしない

イビルジョーの不思議な行動のおかげで恐怖心は和らいできたが、イビルジョーが何故自分を襲わないのか不安を覚えた

『（じつやひ異常は無いらしい。』

さて、よくぞ生存競争を生き延びたな！

肉を独占するだけだけでなく、兄弟を謀殺しにくるとは……かつてない快挙だ！

俺は誇張しきりで、息子よー。』

このイビルジョー親父は生存競争をさせていたのか？

子どもが死んだつてのに喜ぶなんて、頭イかれてるのか？

ん？ 息子？
ナンダツテ？

俺が目をぱちくりさせていると、『水飲みに行くぞ』とか言って俺をくわえて拉致つていぐ

イビルジョー親父は河原に辿り着くと、俺を容赦なく落として、水をがぶ飲みし始めた

俺も喉が渴いていたので、ケツの痛みを我慢して水面を覗く

そして驚愕した

水面に映し出されるのは、人間の顔などではなく、黒緑色の鋭い牙がならぶ凶悪な顔

そしてそれは、先ほど自分が殺したイビルジョーベイビーの顔立ちと酷似していた

まさかと思い水面から離れ、恐る恐る覗き込むが変わらずイビルジョーの顔が映る

試しに右を向いたり、首を傾げたりしてみたが、水面のイビルジョーはそれに合わせて動いている

混乱する頭を無理やり鎮めると、俺はその場に座つて情報を整理する

俺死んだから、神さまが転生させてくれた

転生先はモンハンの世界

いきなりイビルジョー出現、俺が子どもを殺してしまった

そのイビルジョーが俺を息子と呼んだ

…………え？俺ってハンターじゃなくて、モンスターに転生しちゃつたの？

俺は水面の自分の顔、横のイビルジョー親父の顔を交互に見つめた

俺の淡い希望はどんどん崩れていき、酷な現実を頭が理解していく

「（あのHセ神！！
とんでもないモンスターに転生させやがつて…！
どうしてくれんじやあ…！）」

俺は悔しきにものす！」一勢いで地団駄を踏みまくる

そうしていると、背後からカサカサと何かが近づいてくる音が聞こえ、振り返ろうとしたら鋭利な何かで尻をひつかれた

「（痛つてえーーー！）

俺のケツを痛めつけたのは、ビートのビートだーーー？」

振り返つて田に飛び込んで来たのは、甲虫オルタロスだった

なんだオルタロスか　　と油断してると、また爪でひつかかれた

「（虫のくせに生意氣だな）の野郎！！
あれ…結構素早いな。」

ゲームでは一撃で粉々になるザーダが、実際に戦つてみると、チョロチョロと複雑な動きをしてくる

俺はオルタロスの動きに惑わされてクルクル回り、田を回して川に転んでしまった

『（虫相手になに遊んでるんだ…歩けるならついて来い。）』

イビルジヨー親父はオルタロスをあつさり踏み殺し、洞窟がある方
向へと進んでいった

イビルジヨー親父の歩幅は俺と比べ物にならなく、走ってイビルジ
ヨー親父の後を付いていった

今俺は目覚めた洞窟に戻り、イビルジヨー親父と向き合つて家族会
議みたいなものが始まろうとしていた

家族会議じゃねえええ！！

そんな悠長な「」としてられつかー！－転生先がモンスターってどうこ
う嫌がらせー？

しかもよりによつて恐暴竜イビルジヨー！？冗談じゃない！

ユケモ村の混浴風呂で美女と入る夢は！？

卷之二

キリン装備のハンターちやんと戯れ合うというのは！？

モンスターの俺がハンターに会つたら、戯れ合つていうより、殺し合いになるわ！！

どうして俺なんか生んだんだクソ親父！！
俺の人生台無しじゃねえか！！

とは威圧感たっぷりのイビルジパー親父に言ふのはさもなく、俺は心の奥で愚痴をこぼしている

『（ ビビりかと思っていたが、あんなに暴力的だつたとはな！ チビの頃の俺とそっくりだ！ ）』

この親父は親を誉めてるのだろうが、ちつとも嬉しくはない
モンスターといえど、自分の兄弟を殺して喰つたのだから、罪悪感
が物凄いある

今気付いたのだが、俺は何故イビルジョーの言葉を理解出来るのだ
ろつか？

自分では普通に日本語喋つてゐつもりだが、相手は俺の言葉を理解
し、俺も親父の言葉が理解出来てゐる

転生する時にエセ神がいろいろ強化してくれたらしくから、たぶん
そのおかげなのかな？

『オイ、俺の話しさ最後までしっかり聞きやがれ！』

親父は生まれたての俺を、容赦なくひっぱたいた

たぶん加減してくれたのだろうが、物凄く痛かつた

そこからは、イビルジョー 親父の自然界における哲学やいなひでんの講釈が始まった

…イビルジョーってこんなに賢かったの？

親父はまず最初に、俺を含む息子たちの選別といやうの説明をしてくれた

選別は、生まれた子どもの中から一番強い子どもを見つけ出し、それを育てるところのやうなこと

そしてそれは、より強い個体を見つけ、種の繁栄のための儀式だと
いう

中には、親の目に止まるような子が出来なかつた時には、選別を生き抜いたとしても見捨てる場合もあると、教えてくれた

生まれた子どもを見捨てるなんて、酷い習性だと思うが、結果として凶悪なイビルジョーの数が制限されると思えば、しぶしぶ納得出来た

それから、俺も親父に対しても質問を交えながら会話を進める

それによると、飛竜種や獸竜種といった大型のモンスターは、頻繁に見かけるものではなく、普段は人里離れた場所に棲んでいるらしい

古龍種に至つては、伝説のような存在であり、極稀にその痕跡を見つけられるくらいで、ほぼ人の目には触れない

自分が転生したイビルジョーという種は、個体数も少なく同じ場所に止まらないため、古龍ほどではないがとても珍しい存在なのだと
いう

ゲームの感覚では、大型のモンスターを狩りまくっていたが、あれだけのモンスターが実際にいたら人間はお終いだ

そしてハンター自体も、やたらめつたらいるわけではなく、多くもなく少なくもないという程度だ

それと余談だが、この親父は稀に見るバカだ

だって、生まれて間もない子どもが、まだ存在も知らない飛竜とかハンターの話をするんだぜ？

それに何の疑問も持たないで、むしろ質問されて嬉しそうに答える

この脳筋バカの息子で俺は大丈夫なのだろうか？

俺は一抹の不安を覚えた

『（ とまあ、そんなことだな。』

後のことはやの都度教えてやるからよ。

わい、明日から俺がお前をビシバシ鍛え上げてやるから、今日のことをもう寝ておけ。

俺は狩りに行くから、できとうな場所で寝てろ。』

親父は言いたことを書いて、ひとつ洞窟から出て行った

俺は途方にくれたあと、付近の枯れ草んかき集めてベッドを作り、そこに横になる

ハア……キリンちゃんの夢があ……混浴風呂があ……

俺は叶わなくなつた夢を嘆き悲しんでいたが、肉を食べた満腹感と様々な疲労感により、徐々に眠りへといざなわれていた

第一話・スバルタ親父の息子（後書き）

お次からイビルジョー親父のスバルタ教育が始まります（笑）

第三話・教育といつも暴力を受ける日々

おはようございます監修さん

イビルジヨーに転生してしまった薄幸の俺です

今回はイビルジヨー親父による、愛のムチと自然界に出るための特訓を実況中継したいと思つ

はい、俺はイビルジヨー親父の言ひ付けで毎朝早起きしています

起きてますることは……寝覚めの最悪な親父を起こすこと

簡単なことなのだが、命を落とす危険のある恐ろしい行動だ

「（親父……朝だよ、起きとおくれよ。）

『グガアアゴオオ……。』

う…つるせえ

いびきかいて寝てるよこの親父…
このせかましいいびきで、何回眠りを妨げられたことか…！

今日こそ寝込みを襲つて、ボコボコに……など未熟な俺に出来るはずもなく、俺は今日も優しく親父を起こすのだった

「（親父……早く起きひよ。お口様が登つちひよ。みひちひよ。）

『…………ひせえ…………朝ひぱいつからいつむせえんだボケーーー。』

「ギャンッー。」

寝起きの親父の尻尾をまとめてひりこ、俺の小さな体は軽々と吹っ飛んでいく

今日は割とラッキーな方だ

いつもならかじられたり、叩きつけられたり……最悪の場合には、
ブレスを吐かれる時もある

『（もう少し穏やかに起きしゃがれバカ息子）』

親父よ…お前はもう少し穏やかに起きしゃがれ

かすかに残る眠気を親父に吹き飛ばされた後は、近くの河川に出向いて水分補給と顔洗いに行くのだが、ここでも親父の暴力性が発揮される

まず親父が水浴びをするのを待ち、次に俺の番だが……

『（えうした、早くしる。』

見張つてやるから安心しる。）』

いやいや、俺が一番危惧するのはお前だよ親父！！

リオレウスと対峙するより、アンタに背中を見せる方が恐ろしいわ
！！

とは言えず、俺は警戒しながら川で水浴びをする

警戒をしてると親父はそこらを徘徊して遊んでる……警戒を解き童心に帰つて水浴びに興じていると…

『（隙だらけだ息子よー。）』

親父は音もなく忍び寄り、俺を川に放り投げるのだ

川の流れは速くないが、親父は俺を深い場所へ的確に投げ込む

小さい体をばたつかせて岸に戻つても油断は出来ない

氣を抜いていると、親父はまた俺を川に沈めるからだ

幸い今田のとうひは親父の追撃をかわせた

そして水浴びの次は楽しみの食事なのだが、まだチビの俺は親父に頼らなければ肉にありつけない

俺はいつも草むらに隠れ、親父の狩りを見つめている

親父の狩りはまさに圧巻だ

対象となる草食獣アプトノスを見つければ、その口吻に似合わない速さで近寄り、驚くアプトノスを一噛みで仕留め、可能ならその場のアプトノスを全部仕留めてみせるのだ

親父が仕留めた獲物には俺の分もあるが、親父は俺に構わず肉に食いつく

俺は親父の仕留めた肉を食べにいくのだが、注意しなければならないことがある

それは親父がただでは食わせてくれないことだ

肉を食べようとすれば吹っ飛ばしたり、噛み付いてこよつとする

俺は親父の攻撃をかいくぐって肉をとるが、モタモタ出来ないために微量の肉しかとれない

腹を満たすためには何度も突撃しなければならないが、これによつて素早い身のこなしと、肉を瞬時に喰い千切る頸の筋肉が鍛えられる

そして食事を終えた俺を、親父は洞窟を進んでいつて島の一番高いところにまで連れて行く

最近気付いたが、俺と親父がいるこの場所は『孤島』だということに気付いた

崖の上に来たら、一日で最も辛く痛い特訓が始まるのだ

親父は容赦なく俺を崖から蹴落とし、俺は堅い岩と尖った岩肌を転げ落ちていく

島の下にまで落ちれば俺の体はズタズタだが、すぐさま体を起こして再び島の最上部に移動する

途中にいるジャギーの群れをかわし、時には抗戦し、自力で親父のいる最上部に辿り着くのだ

もちろん親父が俺にねぎらいの言葉をかけるはずなく、言ひことといえば『早く行け』だ

俺は再び崖から飛び降りていい、傷を増やしていく

それを1日何回も行うのだ

過酷な特訓を終えた後は川で体を洗い、薬草を採取して傷を癒やす

すでに全身にはおびただしい傷跡が残るが、特訓を繰り返すことに
俺の体は頑丈になり、特訓でつく傷も少しづつ少なくなっていく

特訓が終われば腹が減つてくるが、今度は親父には頼れない

親父はジャギイを捕獲すると、俺と対決させる

親父がいるジャギイがビビって使えないため、親父は洞窟の奥で
様子を見ている

まだジャギイの群れに突っ込んで勝てるほど強くないが、ジャギイ
一匹程度なら俺でも倒せる

「（ジャギイ一匹なんか、チョロいもんだぜー。）

しかし親父がそんなことを許すはずもなく、今日はジャギイを一匹投入してきた

さつきまでビビッていたジャギイは、仲間が増えたことで勢いづく

俺はかまわずジャギイの一匹に向かっていくが、別のジャギイがさせまいと俺に体当たりをする

ジャギイの体当たり自体は痛くないが、崖で出来た傷が物凄く痛い

ジャギイの素早い身のこなしに翻弄される俺は、徐々に追い詰められていくが、痛めつけられたことでフツフツと煮えたぎる感情が高まっていく

ジャギイが鈍くなつた俺に噛み付いた時、それは爆発した

俺の筋肉が大きく隆起し、俺に噛み付いていたジャギイの牙をへし

折った

牙を折られて苦しむジャギイの喉笛に食いつき、骨董と食つかぬ

残ったジャギイは逃げようとするが、出て来た親父にビビつ、引き返して俺に立ち向かってくれる

「（よくもやりやがったな、これでもへりぺーーー。）』

俺は大きく息を吸い込み、内に溜まる怒りをブレスに変えた

親父のブレスに比べればまだまだ未熟だが、ジャギイ一匹を即死させんには十分すぎる威力があつた

俺は倒した一体のジャギイを美味しくいただき、親父から今日初めてのお褒めの言葉をいただく

ここまでくると親父は極端に優しくなり、俺も残りの過酷な特訓が苦ではなくなる

特訓を全て終える頃には夕方となつて、孤島は夕焼け空に変わる

特訓が終わると、親父は親を連れて孤島の探検に連れて行ってくれる
親父と並んでいれば、自分より大きいモンスターも逃げていくのだ

ドスジャギーやアオアシラは一田散に逃げ、ロアルドロスなんかは雌たちを置いて逃げ去つていく

俺はそんな光景が愉快で楽しく、何より厳しかった親父と並んで歩いているのが好きだった

人間の時だった俺には、飲んだくれで何もしない親父と、不倫を続けるお袋しかいなかつた

親の愛情もありがたみも知らない俺だったが、俺は初めて親という存在を好きになれた

イビルジョー 親父は厳しくもあるが、優しい親父であった

理不尽で暴力的な親父だが、一緒に特訓して、食事して…一緒に寝るこの親父が好きだし、親父も俺に精いっぱいの愛情を施してくれた

探検が終わつた後は寝る支度をし、親父のわきで添い寝する

親の温もりを感じられる今が至福の時であり、その温もりに包まれながら俺はその日を終えるのだ

第三話・教育といつ名の暴力を受ける日々（後書き）

なんか最後、イビルジョー親父スバルタでも何でもなくなりましたね（笑）

さて、次回は主人公の二年後であり旅立ちの時です

何故一年後かつて？

一年では短すぎるし、三年では長すぎる！――

誰もそんなこと聞いてませんね……

第四話・巣立ちの時

今日も穏やかな一日を迎える孤島

朝日が登り草食獣たちが餌を探しに歩き回り、それを狙う肉食獣も目を光らせている

いつもの自然界の風景だ

そんな孤島の河川の一つに、緑色を基調とした極彩色の翼が降り立つ

妙な形のユニークなクチバシと鮮やかな羽を持つ、彩鳥クルペッコだ

このクルペッコは、最近この孤島にたどり着いた流れ者で、穏やかな環境の孤島を気に入つて棲み着いたのだ

クルペッコは川岸を移動し、餌となる魚を探していた

いつも魚を捕る時に邪魔をするジャギイたちもいなく、水流の音しか聴こえない河川に、クルペッコは満足していた

しかし、この彩鳥はまだ分かつていなかった

この孤島において生命の気配が消え去ったという意味を……

邪魔な肉食獣が消えた時、獲物の魚も一匹ずつ去っていき、クルペッコは少し苛立つた

その時、背後で河原の石を力強く踏みしめる音が聞こえ、クルペッコは訝しげに振り返った

そこには、自分より一回りも一回りも大きな体躯の一田で格上と分かる凶悪な竜が、今までに自分を襲おうとしていた

驚いたクルペッコは後ずさりして転ぶが、そのおかげで竜の恐ろしい一撃から、即死することを回避した

ただ完全に回避出来たわけではなく、飛行のための片翼が噛み抉られた

彩鳥「ギャーギャー……！」

竜は苦しみに悶えるクルペッコのもう片翼を食こちぎり、その大木ほどもある尻尾でクルペッコを殴りつけた

クルペッコは二転三転して吹き飛ぶが、竜は息つく隙も与えず、飛びかかって体を押さえつけた

そして、竜はその禍々しい口を大きく開き、彩鳥を残酷に噛み殺した

俺はイビルジョーに転生して、初めて大型モンスターを仕留めた
正確には中型程度のモンスターなのだが、…

イビルジョー親父にスバルタ教育を施された俺は、この一年の間に
逞しい成長ぶりを見せた

体の表面を覆う鱗と皮は、並大抵のことでは傷つけることなど出来
なく、その鋭く尖った牙と強靭な顎は、飛竜の堅牢な甲殻でさえも
噛み砕くにまで鍛えられた

さらに親父との特訓で気配を察する能力を強くし、人間の賢さもが
強力な武器となつた

『（息子よ、手際よい狩りだつたぞ！）』

クルペッコを仕留めた俺のところに、イビルジョー親父が嬉しそう
にやってきた

俺の体はまだまだ親父にかなわないが、今では親父の半分くらいの

大きさだ

一年でこれだけの成長は驚きだが、イビルジョーが一日に食べる量を考えれば、この驚異的な成長にも頷ける

「（親父に教えてもらつたとおり、翼をやつてやつたら簡単だつたぜ！
一撃で仕留められなかつたのが残念だけビ。）」

親父に教えてもらつたのは対飛竜戦法で、飛ぶための翼をまず徹底的に狙うことだ

翼を破壊出来なくとも、転ばせて翼を踏みつけることもある

『（だがなかなか気配を消すのがうまかつたじゃないか。
もつとも、図体のデカい彼らにはひと無理があるがな！－！）』

親父は大きな声で笑う

『（ほら、早速仕留めた獲物を喰えよ。
勝者の特権だ！）』

「（ロイシは巣に持つて帰つて喰うよ。
それより…親父に話したいことがあるんだ）」

イビルジュー親父は俺の真剣そつた口調に気付き、笑いを引っ込んだ

『（ああ……一旦巣に戻ろ、それで話しうるべく。）』

親父と俺は、クルペッシュを引きずつて巣の洞窟へと向かつていった

洞窟に着くと、クルペッシュを頭の上に置いて、親父と向き合つた

いつもならふざけた会話を始めるが、今日はそんな雰囲気ではなかった

『（で……話しつてのはなんなんだ？）』

話しをなかなか切り出さない俺の代わりに、親父が話しをふりだした

「（前々から思つてたことなんだけど……俺が大きくなるにつれ、ずいぶん食べる量が増えたろ？）

だけど、隔離されたこの孤島でそんなに捕食しまくってたら、生態系がいかれちまつ。）」

これは親父も分かりきつてることだ

イビルジョーという獣龍種は、高い体温を保つために頻繁に捕食しなければならないといつ

幼子だった俺ならともかく、今では親父と同じかそれに近い量を捕食している

このまま親父と一緒に捕食を続けば、この島は生物の墓場と化す
だひだひ

親父は俺が何を言いたいのか分かっているのだひだひ、低く唸っていた

「（俺も親父のおかげで、誰にも頬張らずに生きてこなしちたよ。
…だから。）

『（ここを出るってのか？）』

俺は親父が言ったことに、少し間をおいてから頷いた

本音を言えば俺は親父の元から離れたくはなかつたし、親父も心からそれを望んでいないだろう

だけど、俺がここに残ることで親父に迷惑をかけたくない
親父は俺のこと迷惑だなんて思っていないだろ？が、俺のせいでも
親父が死ぬのは絶対に嫌だった

『（……それは、本気で決心したことなのか？）』

俺は親父の目をじっかり見つめ、ゆっくりと頷いてみせた

『（……分かった、ジーヘでも好きな所に行くとい。）』

親父は予想外に、俺を引き止めることがなく、後押しする発言をしてくれた

驚きながら見つめる俺と、親父は明るく笑つてみせる

『（思えば…お前が）この俺に願い事をして来たのは、今日が初めてだつたな。』

俺がお前にしてやつたことは何も無いが、せめて最初の願いは聞き入れてやる。』

今俺は猛烈に感動している

今まで行行動から親父の愛情を感じとつていたが、今日言葉で親父からの愛情を受け止められた

「（お…親父イ…俺は親父から…いろんなこと教えてもらつたよ…。
厳しくて…おつかなかつたけど…俺は親父のそばもに生まれて良かったよ…。）」

俺は感動のあまり、涙や鼻水、唾液を垂れ流していた

他から見れば汚いかもしれないが、俺たちにとっては神聖な体液だ

『（泣く）じやねえよ。

ほり、クルペッ』でも諦つて落ち着けや。』

「（親父イ…それ俺が捕つた獲物だつてえ…。）」

泣きじやへぬ俺につけられ、親父の田にも涙がたまっていたが、涙が
じまれないよ、…

息子の独り立ちを祝すべく、上を向いて雄叫びをあげた

孤島を旅立つのは翌日明け方、満潮の海が干潮になる時間帯だ

満潮から干潮になる引き潮を狙つて、孤島から泳いでこきやすくなるためだ

俺と親父は孤島の砂浜に来ていて、大陸のある水平線の彼方を見つめていた

「うやつて親子肩を並べるのも、今日が最後だ

『（引き潮に任せて、潮の流れに乗つていけば《水没林》に辿り着けるはずだ。』

どうだ…忘れものとかは無いか？』

俺の首には、仲の良かつたメラルーに作つてもらつた頑丈な小袋があつた

その中に、初めて狩つた彩鳥の羽、非常食の生肉…それから親父の大牙と鉤爪が入つていた

「（大丈夫だよ親父。

忘れ物は無いよ。

袋が破れなければいいけど…。）

そんなことを言つてはいるが、突然その袋からひょっこり顔を出す者がいた

「大丈夫だニヤ！」

旦那さんの頑丈な皮を縫つて、頑丈性と耐水性は抜群なニヤー！」

この袋から頭を出すメラルーこそが、この袋を作った本人であり、俺たち親子と家族ぐるみの生活をしていたメラルーだ
名前を《モモ》という

「（ありがたいけど……モモまで一緒に来なくても。）」

実はこのメラルーも、仲間たちから離れて俺と一緒に行くといつのだ

「オイラは旦那さんに惚れたのニヤー！
どいまでもついてくニヤー！」

『うひょひ…と親父に顔を向けたが、親父は笑うだけだった
俺は困り果てていたが、多分断つたとしても無理やり着いてくるだ
るうとい、諦めて連れて行くことにした

『（息子よ、そろそろ時間だ。）』

砂浜に打ち寄せる波は徐々に引いていき、干潮の時間帯となっていた

「（じやあ親父…俺行くよ。」

一年しかいらっしゃなかつたけど…俺、親父と一緒にいれて良かつたよ。

「

『（分かっているわ！
早いとこ行つてしまえ！）』

親父は氣恥ずかしさを隠すため、荒っぽい口調になつていた

俺は親父の視線を背に受けながら海に浸かっていく

朝早くの海水はとても冷たかったが、半分浸かつた頃、俺の胸に熱いものがこみ上ってきた

俺はバツと振り返ると、勢い良く頭を下げた

「（親父！未熟な俺をここまで育てていただき……ありがとうございました！）」

それから俺はがむしゃらに海を進んでいき、背後から大きな雄叫びが聞こえてきた

第四話・巣立ちの時（後書き）

……やつと旅立つていったか

今まで育てた中で最高に強く、楽しいやつだったな……

息子の姿がどんどん小さくなつていき、ついにはその姿が見えなくなつてしまつた

……息子の旅立ちは喜ばしいことだが、物悲しいな……

……ん？

息子が泳いでいったあの方角……大嵐か？

まあ、頑丈な息子なら嵐くらゝは大丈夫だな……

しかしあの嵐……今まで以上に大きい…
まるで…古龍に引きつられてるみたいだな
なんていつたつけな?

…そうだ『嵐龍アマツマガツチ』だったな

まあ、古龍がこんな所に来るはずないし、ただの大嵐だらうな

今日あたり洞窟にこもってれば、なんともないだろ?…

第五話・なんていつたいじじせんじー?え、見知らぬ地方?（前書き）

転生した主人公はあっちの場所に行ってしまいます（笑）

第五話・なんていつたいいじるはめー?え、見知らぬ地方?

「ここには……一年の歳月を経て、イビルジヨー親父の元から巣立
ちした転生者で、」

「うう……まだ気分が悪い

孤島を出た俺たちは引き潮にのり、そのまま潮の流れにのることが
出来ていた

しかし、そこに有り得ない規模の大嵐が俺の進行を妨害し、潮の流
れもメチャメチャにしてくれたのだ

大波と強風に揉みくちゃにされ、俺は水面から頭を出して呼吸する
のがやっとだつたが、そのうち溺れてしまった

そこで気付いたら、見知らぬ砂浜に打ち上げられていたのだ

砂浜の向かい側には木々が生い茂るジャングルだったが、当初の予定の水没林ではないことは分かる

ただ今はそれ以上考えられなく、海を漂流したことによる、著しい体力の低下を回復することを始めた

幸い、小袋の中の相棒と生肉などは、耐水性素材のおかげで無事だつた

メラルーのモモも気分が悪いのか、砂浜に寝そべってダウンしている

俺は日光浴と食事で体温を上げていき、徐々に冷静さを取り戻していく

「（まあ）こじがどこののが確かめないとな。

モモ、移動出来るか？」

「まだ駄目なのーヤ…。」

仕方なくモモを背中に乗せ、俺は付近を徘徊して回る

いくら歩いても森の木々しかなく、しかも方向感覚が狂いそうだ

歩き回つて少しづたびれた所で、突如開けた場所に出た

小さな雲の泳ぐ空の下には、広大な縁の草原が広がつてあり、遠くの彼方には丘のようなものが見えた

「（すげえ…当たりじゃねえか！

環境も過ごしやすそうだし、食い物にも困らなそうだぞーー。」

「ーイヤー…旦那さんつるわーのーヤー…

…ニヤツ！？

なんて素晴らしい場所なのニヤーー！」

飛び起きたモモも、気分が悪いのも忘れて、雄大なこの地に目を奪われていた

過ごしやすい温暖な気候と豊かな土地、その豊かな土地に群れる草食種の多さといったら、イビルジョーである自分が少し欲を出しても平氣なくらいだった

俺とモモの心でここに棲みつく決心が固まりかけた時、モモが遙か上空の大きな物体に気付いた

「旦那さん、大変ニヤーー！
あれを見るニヤーー！」

モモが指差した先をたどつていつてみると、大空を力強く飛翔する赤い竜を見た

「（なんてこつた！
ありや飛竜リオレウスじやねえかよ…）

つてことは、この場所はやつの縄張りか…）」

上空を飛ぶリオレウスは一瞬こちらを見たが、まだ草原に足を踏み出していない俺を、無害として無視した

ただ一応俺を警戒しているらしく、旋回しながら俺の様子を窺っていた

しばらくリオレウスを見上げていたが、この場は俺が引くことにした

モモは反対したが、飛竜相手…しかもリオレウスには分が悪かつた

親父に対飛竜戦法は習つたが、それはあくまで同じ地上に立つ飛竜だけにしか使えない

リオレウスは大空の王と言つだけあって、飛行しながらの戦闘を得意とする

近接戦で負ける気はしないが、飛べない俺に、上空からの攻撃は大きな弱点となる

俺も弱点を補つて余りある戦闘力はあるが、不確実な戦いをするほどバカではない

そのことを話すと、騒いでいたモモもしぶしぶ理解してくれた

諦めた俺たちはジャングルに引き返していくが、俺はすぐさま異変に気が付いた

自分を取り囲む無数の気配と、自分に向けられた敵意

肉食獸だ

姿勢を低くして臨戦態勢を取る俺に合わせ、モモも自作の棍棒を手に

俺の視界を避け、森の木々に隠れる肉食獸を確認出来なかつたが、包囲を縮めたのを感じ取つた俺は、尻尾で森の木々ごとなぎ倒した

何体かはよけたが、数体は直撃して断末魔の声をあげた

素早く振り返つて襲撃者の姿を確認すると、俺とモモは見慣れない姿の襲撃者に驚いた

いつもの肉食獸であるジャギイには小さいながらも、エリマキがあつたが、この肉食獸は変わりにトサカのようなものがあった

色もジャギイの薄紫色の鱗ではなく、青い鱗だった

しばらく戸惑っていた俺だが、それは俺がよく知るモンスターであった

「（な…なんでランポスがここにいるの！？
ジャギイに変わられないんじゃなかつたのか！？）」

「いやー…？田那さんこのモンスターを知ってるのかー！？」

知ってるも何も、モンスタハンターではこのランポスがジャギイより先に登場し、2ndから始めた俺には印象に残るモンスターだった

ただ、今まで俺が戦ってきた相手は全部3rdのモンスターだった
し、転生した俺も3rdのモンスターだ

『ギャオツーギヤギヤツー』

ランポスは俺に悩み考へることをやめじと、一斉に飛びかかってきた群れの中には一際大きな、ドスランポスがいたが、結局は俺にかなうはずはなかつた

考えるのを止めた俺は、小さなランポスを瞬殺し、怯むドスランポスをモモが脳天をひっぱたいて仕留めた

俺とモモは、砂浜に戻つて仕留めたランポスを食べていた

モモは初めて見たモンスターの肉を、美味しそうに食べるが、俺は腑に落ちない様子で食べている

なんでランポスがここにいるんだ?

「ランポス含む、他の鳥竜種は3rdギアノス・ゲネボス・イーオス」
ランポス含む、他の鳥竜種は3rdに出てこない…

…モンスターの世界に転生したから、いてもおかしくないけど…

「…コイツらが3rdの地方に迷い込んだのか…
あるいは…」

「…」

突然モモが悲鳴をあげ、ジャングルの奥を指差していた

モモの示すジャングルの奥から、ゆっくりと大きな何かが近づいて来る

俺も一応警戒していると、その大きな何かはゆっくりと姿を現してきた

白いしま模様が入った赤い甲殻のそのモンスターは、俺に近づくと長く伸びた触覚でつつき、続いて大きな爪でつづいてきた

な……なぜコイツまで！？

有り得ない、有り得ない！

ダイミョウザザミが田の前こいるなんて、絶対に信じないぞーー！

立て続けに見る馴れないモンスターに、俺の頭はパンクしそうだ

ダイミョウザザミも初めて見る俺に興味を持っているらしく、執拗に触覚でつづきまわす

何もしなければ襲つてこなそこのでしばらく様子を見ると、やがて砂浜に赴いて食事をし始めた

しばらく呆然とダイ//コウザザ//を見つめている俺だが、ここ
で疑念は確信へと変わった

奴らが3rdに来たんじゃなくて、俺が2ndの地方に流れ着いた
んじゃねえか――！

そういうやつをさしき行つた草原……『森丘』だしよ――！

なんてことだ、折角ジンオウガとかウラガンキン対策してたのに意
味ねええ！！

しかも2ndつていつたら、ガノトトスとかグラビモス……最悪ラ
ージャンがいるだろうがあ――！

誰か助けてえ……

俺の計画が無惨に崩れていき、ダイ//コウザザ//さうなだれる俺を
不思議そうに見つめている

「曰那さん、なんだかよく分からぬけれど、何とかなる一や。」

やつぱりモモを連れて来て良かつた……一人だつたら心細くて死んじゅうよ…

「（そうだな… もともと独り立ちのために出たんだし、これくらいで動じちゃいけねえな。）」

「その通り一や！

曰那さんが使い物にならなかつたら、着いて来た意味がないの一や
（…）

「（お前今本音言つたろ？

わてはお前：俺に寄生して樂するつもつか？）」

俺が薄田で睨んでいると、モモは首が千切れそうな勢いで振り始めた

「一や一やッ… 言葉のあやだ一やッ…

オイラは曰那さんをそんな風に思つたりしない一や…」

「この野郎…油断出来ないな、やつぱりメラルーだ

とつあえずここにいても仕方ないので、ここ以外の場所に向かって
縄張りを探すことにした

モモを背中に乗せ、その場を立ち去る所とした時だった……

それまで大人しかったダイミョウザザミが、素早く俺の前に立ちふ
さがつてきた

「（え？ と…何か用？）」

俺が尋ねてみると、ダイミョウザザミはカチカチと爪を打ち鳴らし、
口から泡を吹き出した

やつぱりなるのね……

その後、俺とモモで新鮮な蟹料理を美味しいいただきました

第五話・なんていつたいいじはまくーー?え、見知らぬ地方?（後書き）

「うちの地方を選んだ理由は、モンスターが多様なこと

皆蟹と老山龍にやる皆攻防、風翔龍の街襲撃などの防衛戦に参戦出来るからです（笑）

多分、なかなか実現しないと思いますが…

（ジョンモーランは大砂漠だから無理）

第六話・寝床発見！しかしセイには…（前書き）

モンスター・ハンターの小説で、アイルーを見かけることはあっても、
アイツらなかなか見ないな…

と思ったので、アイツら登場です（笑）

第六話・寝床発見！しかしそこには…

イビルジョーー」とこの俺と、あくびいメラルーのモモは、当初の予定を外れ、モンスターハンター2ndの領域にやつて来てしまった

見知らぬフィールドに、初めて接触する凶暴なモンスターたち：

それらを主に俺の力で克服しながら、俺とモモは安住の地を探し求めていた

先日この密林でダイミョウザザミと接触し、これを撃退して以来、注意するようなモンスターには遭遇していない

ただ何も襲つてこないわけではなく、こっちを見れば直ぐに突撃するブルファンゴ、何よりも厄介なランゴスタがいた

俺が育つた孤島にはブナハブラという甲虫がいたが、このランゴスタはそれ以上に数が多くった

俺は素早くて小さく、飛行能力を持つこの甲虫は苦手であり、これに限ってはモモの毒けむり玉を利用させてもうつていい

「（密林は餌が豊富でいいけど、邪魔者も多だから嫌いだな…。どこか条件の良い場所無いものかねえ？）」

人間の賢さを持つ俺は、イビルジヨーの旺盛すぎる食欲で他の動物を死滅させまいと、色々な対策を考えていた

イビルジヨーの驚異的な食欲の要因は、すばり体温調節のためであり、高い体温を保つために補食が多い……と、どこかで見た気がする

それならばと、できるだけ体温が低下する寒い地方……では『雪山』や『沼地』を避けることにした

そうなると条件的に密林の熱帯雨林気候は、体温低下を抑えるし、食料も多かつた

ただし、この密林にはランゴスタやカンタロスら甲虫がわんさかおり、俺が個人的な理由で却下した

そうなると残るは《砂漠》《火山》《樹海》がある

ただし樹海はこの密林から正反対の方角にあり、間には人間の街があつて到達はほぼ不可能

最後に火山と砂漠が残り、俺の体温低下の欠点は回避出来るが、これらの中毛な地で食料を見つけるのは困難だった
おまけに砂漠の夜は、よく冷える……

そんな俺の悩み事など意に介さないよう、モモは俺の背中で寝をしている

俺が甲虫を我慢すれば、住処を密林に選んで解決なのだが、元々人間だつた俺には、あの巨大な虫を生理的に受け付けられない

宛もなく放浪しているひが、日が一つの間にか傾いていた
寝床の決まらない俺達は毎夜野宿していたが、いつも夜行性の虫た
ちに噛まれている

虫を回避出来ればと、あまり餌の豊富でない砂漠へと向かおつと諦
めていた時だった

不意に、ジャングルの向こうからいくつかの視線を感じた

ランポスかと思って耳を済ませたが、ランポス特有の唸りや足音は
無く…変わりに、子どもがはしゃぐような声が聞こえる

俺は慌てて他の気配を探つたが、自分を見る小さな気配しか感じら
れない

俺は改めて小さな気配を発する方向を見つめる

姿は見えないが、おそらくは人間の子どもだろ？…

俺が様子見をしていると、小さな気配はゆっくりと去っていく…
まるで、俺を誘うかのように

俺の直感が危険だと悟ったが、小さな者たちが自分を誘うわけを知
りたく、俺は好奇心のままに気配を追っていた

気配のした場所に行つてみると、採取でもしていたのだろうか…キ
ノコや小さなかぼちゃが、いくつか落ちていた

俺はさらに興味がわき、小さな気配をたどつて獣道を進んでいった

獣道を進んでいくヒヤングルから抜け、草原に出でていた

森丘に来てしまったのでは、と危惧したが、森丘ほど草原は広くなく、小高い山があるだけだった

獸道を進んでいるうちに氣配は消えてしまつたが、おそらくは目の前の山にでも登つたのだろうと、俺は何も考えずに山に入つていった

山の中腹には果物を生やす木、綺麗な清流があり、転生前の世界である日本の山に似ていた

俺がどこか懐かしい感傷にふけつていると、大きなほら穴があり、とりあえず入つてみた

ほら穴の中はかなり広く、周りにあるいくつかの穴から光が差し込み、ほら穴の中は明るかつた

さうしてほら穴の端には、俺でも歩ける広さに螺旋状の坂が出来ておらず、ビーチや砂山の頂上にそれでいてるらしい

…素晴らしい物件だな！

温暖で豊かな土地だし、何より虫がないぜ！

あれ？でもここんないい場所にモンスターがいないのはおかしいぞ？

…と俺が感づいた時には遅く、俺は無数の気配に囲まれていた

俺は慌てて臨戦態勢をとつて威嚇したが、無数の気配たちからは敵意が全く感じられなく、むしろ友好的に感じる

俺が威嚇を止めると、洞窟の暗がりから、気配の正体が姿を現してきた

最初はアイルーたちが姿を見せたが、後に現れた者たちは初めて見る存在だった

背の高さや体はアイルーら獣人種に似ていてチビだが、頭の部分が一番特徴的だった……

俺が目を丸くしていると、一匹のアイルーがおずおずとせりつて来て、何やら話しかけてきた

「驚かせて」めんなさい——ヤ。

ボクたちはアンタを襲う気は無い——ヤ。

だからアンタもボクたちを襲わないでほしいの——ヤ。」「

俺は分けが分からず首を傾げただけで、そのアイルーはビクッとしていた

「（ああ……うん。

別にアイルーを襲うことではないけど……。

といつか……俺の言葉分かる？）」

今までモモと向となく話せていたが、俺の言葉が通じているか不安だったので聞いてみた

「聞き取つづらこねば、何とか分かるニヤ。」

「（分かつたよ……なら聞くナビ、黙つして俺を！」）と説ひのりをしたんだい？」

俺はアイルーに対し、率直な意見を投げかけてみる

「アンタにボクたちを助けて欲しかったのニヤ。」

俺はますます分からなくなる

「ボクたちは前からここに住んでたのニヤけど、最近ここを狙つて、ツカいやツが増えて困つてたのニヤ！」

そこで強そうなアンタを見つけて、ボクたちを守つてくれるよう、お願いしようとしたのニヤ。

ちなみに、アンタがメラルーと仲良くしてたから、前から頼もつと様子を見てたニヤ。」

俺がアイルーの話を吟味していると、付け足しで報酬の話を出してきた

大型のモンスターから守ってくれれば、ここに住むのを許可するし、身の回りの世話をしてもいいやーー！
つまり俺は用心棒だな？

悪い条件ではなかったので、俺はあっさりとアイルーの提案を受け入れた

アイルーたちはニヤニヤッと喜び合い、隣の奇妙な者たちもほしゃいでいた

「（ヒヒ…アイルーたちは知ってるんだけど、そいつのかぼちやかぶつてるのは何者なんだい？）」

「ニヤ？アンタ奇面族を知らないのかニヤ？
ボクらと同じ獣人種の、チャチャブーだニヤー」

奇面族？

高 ブー？魔 ブウ…違つか

チャチャ……ブーだと！？

俺が口を開けてマヌケな顔で驚いていると、かぼちゃ頭の奇面族は
キーキー喚きだす

「奇面族を知らニヤいなんて、アンタはビリの田舎からやつて來た
ニヤ？」

「（いや……知つてたけど、初めて見たから驚いてただけかな？）」

ようやくチャチャブーのことを思い出せたが、あまりいい思い出はない

ゲームでは擬態していきなり飛び出し、地味に攻撃が強いから……

ただ、友好的なチャチャブーを実際に見てみると、案外可愛かったりする

「一ヤんだから知ら一ヤいけど、アンタを頼りにする一ヤー。」

「（おひ、俺に任せときなー。）」

俺はこのかわいそうなな獸人種の用心棒としてだが、この世界に来て初めて自分の住処を得ることが出来た

一人で暮らすよりも、このチビっこたちと暮らせるのはいいし、狩り場も近くて最高の場所だった

だが、ここの用心棒としてつとめるのがどんなに大変か、俺はまだ知らなかつた…

第六話・寝床発見！しかしそこには…（後書き）

はい、奇面族チャチャブーの登場です

設定としてアイルーたちが家事などを…チャチャブーたちが衛兵の役目で、集落を運営しています

第七話・撃破りの大連続狩獵（前書き）

タイトル通り、イビルジョーとその仲間による大連続狩獵です

といつても強いモンスターは出ません

第七話・撃破りの大連続狩獵

この世界で偶然見つけた豊かな土地

しかしそこにはアイルー族や奇面族のねぐらでもあった

獣人種たちは時たま来る猛獸に頭を悩ませており、俺はそれらの猛獸から獣人種を守る代わりに、この豊かな地に住処を構えさせてもらひことになった

俺はアイルーたちと対話し、襲つて来る猛獸の種類、数、それが何処からやつて来るのか教えてもらっている

話しによると、猛獸は不定期に色々な方角からやつて来て、最悪の場合には数種類の猛獸が鉢合わせになり、それが暴れて被害が拡大するとか…

今までではチャチャブーたちの奮闘で解決していたらしいが、最近は猛獸の種類も襲う頻度も多く困っていたらしい

ちなみに今、洞窟にあつた螺旋坂を登り、山頂に上がって風景を見ているが、どうりで猛獸の集中攻撃を浴びるはずだった…

俺がいるこの場所は盆地のようになつており、草原の中心に今こり小高い山がある

そしてこの盆地の四方八方が、特殊なフィールドとなつていた

東には自分がさまよつていた《密林》、南東に焦土の広がる《火山地帯》、西には大きな砂丘のある《砂漠》…そして北には山頂が白い雪に覆われた《雪山》があり、その方角からは綺麗な川が流れてきていて、湖が出来ていた

それらの中心にあるフィールドがここであり、過酷な環境で飢えたモンスターが、豊かな地であるここを狙うのは必然であった

幸いこの盆地はそこまで広くなく、小高い山のおかげで侵入者がいればすぐに分かる

「どうわけなのニヤ……デッカいやツ」くら返り討ひにしても、

次から次へと来る――ヤー！」

「（なるほどね……なら、ここに来るのが嫌になるくらい、ボコボコにすればいいんだな？）」

「そうこういと――ヤ。

――ヤ……早速侵入者が来たみたいなの――ヤ！」

アイルーが東の密林を指差して騒ぎ出した

見ると、青い体色のランポスを率いるドスランポスが、キヨロキヨロと周囲を見渡している

「ボクたちはここから監視するから、頼んだ――ヤ用心棒さん――」

俺は元気よく返事をし、モモを連れて東の密林に向けて移動を開始する

あと、何故かチャチャブーたちが俺の背に飛び乗り、キーキー戦いの雄叫びをあげた

「（オラオラ―――！

みんなの庭を荒らすヤツはぶつとばしてやるー）」

山から駆け下り、一直線に突撃してきた俺を見て、ランポスたちは慌てふためいた

一方のドスランポスはといふと、群れの長なだけあつて落ち着いている……と思つたら、俺に気づかないであらぬ方向を見ていた

バカかコイツは？

そう思いながら突撃

ドスランポスはやつとこちらに気付いたがすでに遅く、俺の尻尾で密林の彼方へぶつ飛ばされた

「キー！キヤキヤー！」

俺の背中から奇面族たちが飛び降り、残ったランポスたちをタコ殴りする

下つ端ランポスは俺が手を出すまでもなく、チャチャチャブーらにやられて逃げ帰つていった

「ニヤハハハ！」

このモモ様が来れば、ヤツリ「おひよこのひよこニヤー」

「（お前は何もしてないだろがーー。）」

そうモモにツツミを入れてみると、山の頂上から茶色の煙が上がつた

「茶色は……砂漠方面だから、西ニヤー

旦那さん、西に向かうニヤー」

アイルーたちが頂上から焚いた煙は、俺への合図であり、煙の色にて

よつて侵入者の方角を示している

茶色が『砂漠』、緑色が『密林』、赤色が『火山』、白色は『雪山』
『だ

奇面族もすぐさま俺の背によじ登り、俺は西の砂漠に駆けていく

足が速い俺はすぐに砂漠の入り口についたが、そこにモンスターの姿はなかつた

間違いかと思ったが、頂上からはしつかり茶色の煙が立ちのぼっている

「（ありや？ モンスターはどうしているんだ？）」

俺が辺りを見回していると、突然何かが地中から突き出てきて、俺の横顔をかすつた

襲撃者はすぐに砂中に戻ったが、一撃目を予測してその場から飛び退く

俺の予想は的中し、襲撃者は俺がいた場所を、鋭い角で突き上げ、ようやくその正体をさらけ出してきた

「（ウゲツ：また、ダイミョウザザミかよ！
しかも前より大きいし……）」

ダイミョウザザミは口から激しく泡を吹き、何故かお怒りの様子だ

盾蟹の怒りのわけを知らないが、こつちは負けるわけにはいかない

先手必勝とばかりに俺は突っ込んでいくが、盾蟹は俺の顔面に勢いよく泡を吹きかけてきた

視界を奪われた俺の攻撃は空振りし、盾蟹の堅い甲殻にぶつかってしまった

頭に痛烈な痛みを感じるが、逆に俺の石頭がぶつかった盾蟹も怯んでいる

奇面族とモモは怯む盾蟹を見逃さず、俺の背から飛び、盾蟹に張り付いていく

「アレを『トイツ』くくつけるのニヤー。
爆破はオイラがするニヤー。」

奇面族は盾蟹の体にタル爆弾をくくつけていく

ひととおり爆弾をつけた後、再び俺の背に戻り、モモが盾蟹に向けて小タル爆弾を投げた

小タル爆弾はダイミョウザザミの隣で炸裂し、それが引火していく
りつけられた爆弾が連鎖爆発していく

爆弾の威力は凄まじく、ダイミョウザザミの殻を吹き飛ばし、堅い
甲殻も焼け焦げていた

モモと奇面族は歓声をあげて騒ぎ出し、俺はダメージで倒れる盾蟹の背後にまわり、殻の一部の長い立派な角をへし折つてやった

「（へへっ、真紅の角ゲットだぜー、

これにこつたら、一度ここいらをうつつかないことにだなー。）

ダイミョウザザミは痛々しそうに動き出しつつ、一田散に逃げ出していく

俺は盾蟹から獲つた真紅の角……一角竜モノブロスの角を、誇らしげに眺めた

「田那さん、あの蟹からの戦利品が一ヤ？」

「（おうよ、なかなか貴重な素材なんだよコレ。

状態もいいし、何かの役にたつかもしれないなー。）

奇面族も交えて真紅の角を眺めてみると、山の頂上から煙が再び立ちのぼつた

次は白色…雪山からの襲撃らしい

俺は真紅の角を体に縛り付けてもらい、次なる襲撃者に向けて疾走していく

雪山から流れる川をさかのぼつていくと、草原から徐々に雪原へと変わっていく

その雪原に、息を荒げて暴れる襲撃者…ブルファンゴと首領のドスファンゴがいた

ダイミヨウザザミよりは格下である襲撃者を見て、俺と仲間たちは余裕綽々の態度でいたが、その甘い考えはすぐに打ち砕かれた

俺たちを威嚇するファンゴの背後…

正確には雪山の方角から、飛来してくる奇妙な物体が見えた

その物体が近づいてくるにつれ、だんだんと、その不気味な姿がきちんと確認出来るようになる

それは飛竜の特徴である二つの翼があるが、他の飛竜のよつた甲殻は無く、表面は白いぬめりのある皮だった

頭部には目が無く、鋭い牙の並ぶ氣味の悪い大きな口が目立つ

「――ヤ――ヤ――！」

あの気持ちの悪いモンスターはなんだ――ヤツ――？」

「（……フ……フルフルだあ――）」

実物で見るフルフルはとてもグロテスクで、獲物を探すように鼻をひくつかせる音は、俺とモモに悪寒を感じさせる

巨大な体躯の俺を見れば、大抵のモンスターは怖じ気づくが、退化して目の見えないフルフルは、俺に一切恐怖を感じていません

俺たちはしばらく固まっていたが、もう片方の襲撃者であるファンゴたちは、自分らを無視されたことに怒り出した

怒りに突進していくファンゴを見て、俺は我に帰つた

突進してきたファンゴをかわして蹴りとばし、続いた突撃してきたのを尻尾で吹き飛ばす

俺とファンゴの体格差は歴然であり、ブルファンゴたちは面白じように戻り討ちにあい、一匹ずつのびていく

残ったドスファンゴは仲間をやられたことで怒り、俺に向けて突撃してきた

なんなく返り討ちにしようとしたら、突如俺の体に衝撃が走り、動きが止まった

「グギヤツー！」

隙だらけの腹部に、弾丸のようなドスファンゴが当たり、俺は胃の

内容物を吐き出しちまつといひだつた

「（ゲホツ！ゲホツ！
い…一体何が！？）」

ドスファンゴから後ずさり、あの急に受けた衝撃をもえていぬと、
思い当たる節が一つあつた…

俺は気付いてもつ一体の襲撃者を見据えたが、すでに第一射はされ
ていた

「（ちよつ…待つ！
ギヤアアアー！…）」

フルフルの口内から放たれた、青白い光の球体は地面を伝つて、俺
に容赦なく直撃

電流が俺の体中を駆け巡り、またもや体の自由を奪われた

そしてそこへドスファンゴの突進…痛すぎるコンボだ

「だ、旦那さんじっかりする！ヤー！」

龍と雷の属性に弱い俺は、フルフルの電撃ブレスを浴び、意識がとびそな程のダメージを受けた

しかし、体が倒れそうになるのを防ぎ、俺はなんとか踏みとどまりた

「旦那さん！」

「無事だつたニーヤ！？」

「（ああ…電撃浴びたおかげで、頭が冴えるな。

）」
からは反撃！

モモ、こやし玉を投げつけてやれ…！」

モモは俺の真意を分からぬでいたが、とりあえずポーチの中の、イタズラ用こやし玉をフルフルにぶつけた

するといづだらうか……

今までのように匂いを嗅いだフルフルは、こやし玉の匂いに苦しみだし、くしゃみをし始めた

「ニーヤ…ニーヤんだかしらニーヤいけじ、上手くこつたのニーヤー。」

苦しみ悶えるフルフルに勝機を見いだし、モモと奇面族はフルフルに飛びかかっていく

「（）ねでもへりか（）ヤツ……」

「キャツキャツ……」

モモたちは一斉にこやし玉をフルフルにぶつけ、匂いまみれにして
いく

フルフルの真珠色の滑らかな皮は、こやし玉の茶色に汚染され、当
分は臭いがとれないくらい臭くなつた

こやし玉でボコボコにされたフルフルは、苦しそうな悲鳴をあげ、
逃げ去つていった

その際、フルフルの頭部から何かが落ち、モモはすかさずそれをビ
ンにおさめた

「（わはははは……）

昔の知識が役に立つとはな……

れてあとは……。）

俺は最後の襲撃者に視線を向けるが、すでにドスファンゴは逃げ支

度をしき、足をせりせと動かして雪山に逃げ帰つていへ

「田那わん、やつたのーやー！

氣味悪いヤツとムサイ猪に勝つたー やー

やつたー やー

奇面族たちも高らかに勝ち闘をあげ、打ち上げタル爆弾を花火のようにあげている

山の頂上を見ても煙は無く、ビルやアーチ以上の大襲撃者はもうこないようだ

「こつもいれへりこなら、オイラたちに負けはないー やー！

「（やうだな…ん？

モモ、そのビンに入ってるのはなんだ？）

モモの腰にぶら下がるビンには、透明感のある綺麗な液体が入っていた

「これかー やー？

わざわざあの龍から出たやつで、とつてみたんだけど…。

いらないから旦那さんにやるのー！ヤ！」

モモから半ば強引にビンを押し付けられたが、中身の液体は綺麗で
気に入ったので、ありがたくもらつておいた

それから俺たちは住処の洞窟に戻ると、アイルーたち獣人種の賞賛
を受けた

アイルーは笛やらなにやらを吹きまくり、奇面族は鉈を危なしげに
持つて、妙な踊りをする

騒いでいるうちにいつしか宴が始まり、洞窟の中は飲んだくれの獣
人たちで溢れてしまった

今回の働きで獣人種たちに信用され、家族同然の仲となつた俺は、
今日以降みんなから頼りにされる人氣者となり、一緒に戦つたモモ
は、メスのアイルーにモテるようになつた

俺の勇敢さは奇面族にも認められ、普通は会えないといつ奇面王キングチャチャブーにも会えたのだった！

余談だが…キングチャチャブーは本当に頭に焼き肉セットをのせていた

第七話・撃破りの大連続狩獵（後書き）

最後にガノトースを出したかったのですが、世界観がおかしくなつてしまひので中止

ギャグ要素の話しどすので、モンスターは一匹も死んでません

こんなはかない文章である小説をお読みいただき、ありがとうございます！

読者様からの感想も励みになります！

表現力に乏しい作品ではあります、これからもよろしくお願ひします！

第八話・恐暴竜のお使い

住処にやつてくる襲撃者を返り討ちにしてから、半月程が経つた
その間、幾度となくモンスターが襲撃してきたが、俺の奮闘により
すべてを追い払っていた

俺は出来る限りモンスターを酷い目に合わせ、殺しまではしないも
の、ボコボコにして満身創痍の状態で追い返す

外から戻ったアイルーの話によると、モンスターたちの間で、こ
の豊かな地は禁断の魔境として噂されているらしい

草食獣も水も、果実を実らせる木々がある楽園だが…そこに悪鬼羅
刹の如き巨竜が棲み着き、獣人種以外のモンスターを血祭りにあげ
ると…

「 巨竜は逃げる者も容赦なく喰い、いたぶりながら殺すニヤ。
見つかつたらお終い、逃げてもずっと追いかけてくるど二ろか…逃

げ帰った巣の同族を一匹残らず喰い荒らす「ヤ！」

……つてなのが、外界のヤツらが田那さんに持つ印象みたいだ「ヤ。」

「

一匹残らず喰い荒らす……

俺そんなことしてないよ？

少々強めに追い払ったりもして、いやしきぶつけて酷い田にあわせたけど……

俺一度もいたぶつたことないし、殺していないよ！？

巣まで追いかけて喰うつて……俺一度も食べたことないよ！？

だって、草食獣の方が断然美味いから！！

しかもなに？

悪鬼羅刹の如き田竜つて？

少しカツコイいって思つちやつたじゃないのさ

外界からの悪評に俺はへこたれるが、メスの美人アイルーたちが俺を励ましてくれる

奇面族はしょぼくれる俺を見て、大爆笑している
それにイラついた俺だが、ちょうどアイルーの村長が来たので、
お仕置きは次回に持ち越しだ

ヨチヨチ歩いてきた村長は、俺の隣に腰掛けると、にこやかに笑いかける

「噂なんて気にしちゃいかんニヤ 兄弟。

外界の暴れん坊から見たら、兄弟は確かに畏怖の対象かもしだニヤ
いが…。

ボクらは兄弟を頼りにしてるし、大事な仲間だと思ってるニヤ。」

「（兄弟…。）」

村長は俺を励ましてくれ、俺は感動のあまり涙やら涎を零す

下にいたアイルーは、俺の強酸性の唾液を慌ててかわしていく

俺はアイルーの村長から兄弟と呼ばれており、対等の付き合いをさせてもらっている

他のアイルーたちは俺を親分と呼び、モモは叔父貴と呼ばれている。..
なにやら「侠つぽいが...」この獣人種は仁義を重んじ、みんなが固い絆で結ばれている

奇面族のチャチャブーなどは基本自由人が多いが、首領のキングチャチャブーの影響でとても義理堅い一団だ

最初はアイルーたちと利害が一致しただけで住処を共にしたらしくが、今では集落の防衛を受け持ち、危険な外界に出て物資を調達していく

そんなチャチャブーたちの首領、奇面王は俺のことを気に入り、時たま俺と一緒に襲撃者を追い払うこともある

普通はみんなの前に出て来ない、所謂集落内の大物らしいのだが、それが嘘みたいにし�ょっちゅう会いにくる

この集落の大物は事実上、俺・村長・奇面王だが... 集落の運営を担う者がもう一人いる

「ねよ、ここにいたのかい村長さん。」

アイルーたちより少し背が高いくらいの翁が、杖をついてやつて来た
この優しそうな老人は竜人族であり、この村で日用品から武具まで
を造る鍛冶屋だ

「（やあ爺さん、今日も元気そうだなー）」

「あれま、お前さんもいたのじやな。
デカすぎて見えなかつたわい……ちゅうどいい、お前さんも聞きな
さい。」

俺と村長は顔を見合わせ、翁の持つて来た話しに耳を傾ける

老人は咳を一つすると、ゆつたりとした口調で話し出す

「奇面族の調査隊からの情報じやが…。

砂漠に住んでおつたアイルー族が、この場所に移住したいらしくて
の……調査隊の奇面族にお願いしてきたい。」

「やうなのか一や？

別に断る理由は一やいし、仲間は多いにこした」とは一やこの一や

「…」

「さすが村長さん…。
じやが、砂漠から移住するには道中の安全を確保せねばなるまい…。
そこでじや。」

翁は俺の方を向いてきた

「お前さんには砂漠に行つてもらひ、アイルーたちが安全に移住出来る
ようにしてもらひたいのじや。」

俺は少しだけ迷つたが、砂漠に行くのは初めてだし、どんな場所な
のか興味があつたので、快く承諾した

俺は洞窟内部を歩き回り、相棒のモモを探して回る

すると、洞窟の奥からマタタビをくわえてふらつこてこのモモを発見した

「――ヤ――ヤ～～…。

田那さん――ヤ～～、田那さんが回しての――ヤ～～。」

よほどハイになつてゐるつで、田を回して俺の方に歩み寄つてくる

俺は盛大にため息をいぼし、端で戯れている奇面族に視線を送る

俺の視線に気付いた奇面族は遊びを止め、何やら道具を持ち出してモモを取り囲む

「キキイーーー！」

奇面族は様々な道具を使ってモモをこじらばにして、水を浴びせかけたり、トウガラシを口に突っ込んだりした

これは「」の奇面族が考案した、アイルーをマタタビから醒ませる
荒っぽい治療だ

「（どうだ田が醒めたか？）」

「ウニヤ～……完つた全に目が醒めたのニヤ。」

モモは酷い顔つきであり、奇面族の治療がいかに凄惨だったかを物語っている

「とこりで……話しつてなんだニヤ？」

不機嫌そうに睨んでくるが、毎日親父にシバかれた俺にはちっとも恐くない

モモに砂漠の移民の話しをし、その護衛するからお前も来いと言つたが、モモはのらりくらり分けの分からぬことを囁つ

つまり、面倒くさいから行きたくない……だ

「（ほひほひ……そんなに俺と行きたくないか。
いいだろ？お前は留守番でもしてる。）」

モモはニヤリと笑う俺を見て、言ことひもなし不安にかられる

モモとは幼少期からずっと慣れ親しんだ仲だ

良い部分や悪い部分、頑張っていた姿も見ていた……もちろん、人前では決して言えないような出来事も

「（その代わり……俺の口は軽いから、うつかり昔話をしちまうかも
な。）

初めて俺と会った時、お前は俺にビビりて『ニヤニヤ……それはダメニヤー』…クククク、それから今日みたいにマタタビに酔った勢いで親父に絡んで『分かったニヤー！分かったから止めてニヤー』（）

俺がバカやうとした」とせ、全てモモの黒歴史であり、他にもいくつか弱味を握っている

今モモの周りにはアイルーの女の子が集まっているが、そんな時に俺が秘密を暴露したら、女の子たちはモモに愛想を尽かして離れるだろう

そして、モモはそれを絶対に回避しなければならなかつた

「い、行くのニヤ！」

旦那さんが行くなら、地獄の果てまでついていくのニヤ……」

「（ワハハハ！）

「そうかそうか、実は俺と行きたかったのか！
素直じゃないなお前は！（）」

（「の旦那さん… もう嫌ニヤ）

俺はモモの気が変わる前に、モモを背中に乗せて西の砂漠に疾走していった

地平線の彼方まで広がる砂の海、上空にはギラギラとした灼熱の太陽：

太陽から降り注ぐ熱と砂からの照り返しが、とてもない暑さをつくる砂漠に、イビルジョーこと俺は来ていた

以前、俺はイビルジョーの生態を考察し、捕食の数を出来るだけ減らそうとし、気温の高い火山や砂漠に棲む氣でいたが…撤回する

砂漠の気温は俺の体温を遥かに超え、暑さによる体力消耗で捕食の回数はむじろ増えている気がする

砂漠は夜になれば一気に冷え込むため、それが一層拍車をかけている

俺の背には、すでに暑さでくたばったモモがミイラ化し、移動している俺も限界に近かつた

意識朦朧とする中、俺の視界にキラリと光が反射した

俺の中に一つの希望が芽生え、俺は光が反射した方向に、気力を振り絞つて駆けていく

俺が走つていった先には、俺が期待していたとおり、水のあるオアシスがあった

俺は走つている勢いをそのままに、オアシスの水に飛び込んだ

失っていた水分を補給し、ついでに水際のアップクロスに噛みつき、
水中に引きずり込む

「（ふう……生き返ったぜー）」

水とアップケロスの肉を腹におさめた俺は、出発前の瑞々しさを取り戻す

ミイラ化していたモモも、がむしゃらに水を飲んでいて、いつしか水で腹が膨れたデブになっていた

「ふう……生き返ったぜー！ヤー！」

「（真似するんじゃねえ！）」

「ギー！ヤツー！」

モモに制裁を加えた俺は、水から上がり周囲の状況を確認する

このオアシスはあまり知名度が低いのか、数頭の草食獣以外いなく、その草食獣も俺を見て逃げていった

砂漠の暑さは俺の体についた水分を瞬時に氣化させたが、俺は自分の身に起きた変化に気付く

砂漠に入ったばかりの俺はすぐに暑さにやられたが、今はそこまで

暑さを感じない

極限にまで追い込まれた俺は、体力を回復させた後に、暑さに対する抵抗力が出来たのだ

温暖な気候でしか活動しなかつた俺だが、イビルジョーの俺は驚異的な早さで、砂漠の環境に適応してみせた

ふむふむ……過酷な環境に身を置いてこそ、俺の強さは増大していくのか……

以前神さまは、俺が自然界で困らないよう適度に最強と言つてたが、最初から強いわけではなく、修羅場を潜り抜けた時に得る経験が、おそらく俺は倍以上なのだろう

「（へへ…あの神さまに感謝しとかないとな。）」

「は…ハクショーンーーー！」

はあ……ウチの尊じるさま、ゼリのボンクワや……つたべ。

しもつたわ！－！

ウラガンキン！」とさへ、三死してもうた！－！

ああもうー今口は厄口やなー。」

「といひで田那さん、移民のアイルーたちの所には、いつ辿り着く
一ヤ？』

モモの問いかけに俺も気になり、寝そべっていた体を起こし、地図
を広げてみた

俺の天性の方向感覚でここまで来れたが、水浴びをしていたら方向
感覚がリセットされてしまった

仕方無く地図を広げてみたのだったが…

うん、意味不明だね

俺が地図の見方が分からぬわけではなく、この地図が摩訶不思議なのだ

この地図は拠点のアイルーが作ったもので、当然の“ごとく”アイル一用”であり、ぶっちゃけた話しただの落書きにしか見えない

ただそこは相棒のモモがフォローしてくれる

モモはメラルーなだけあって、この古代文字以上に難解な、アイルーの落書きを理解してくれた

「旦那さんが砂漠に入つて真つ直ぐに来たなら、今はこのオアシスニヤ。

そんで目的の場所は…ここを北に少し行つた場所、もうすぐ着くのニヤー。」

相棒：お前を連れて来て本当に良かったぜ…

…などと、感謝の言葉を言つと調子に乗るので、適当に相づちをうつてサッサと出立する

俺は砂漠の暑さはもう平氣だったが、体毛のある…そしてメラルーで黒毛なために、熱を吸収して早々にくたばった

そう何度もめんどうは見てられないでの、俺は比較的温度の低い岩場に入った

岩場に入つてすぐに生き返ったモモに呆れていたが、岩場にポツカリ空いた穴を見つけた

モモに確認を入れてみると、どうやらそこがアイルーたちの住処だつたらしい

「（ピッシャ！
早速話しきつけてこいー。）」

「はい、なのニヤー！」

俺は身体が大きすぎて入れないため、代わりにモモを住処に向かわ

せた

しばらく待つていると、楽しそうなモモを先頭に、十数人のアイルーが出てきた

アイルーの数はそこまで多くなく、これなら途中敵に襲われても、問題なく護衛出来る

アイルーたちは最初俺を見て怯えていたが、モモと親しく触れ合つ俺を見て、警戒を解いた

俺はモモとアイルーたちを背に乗せ、任務通りに移民たちを拠点に運ぶため、帰路につく

順調だった

簡単に終わる任務のはずだった…

その時俺には……いや、砂漠に足を踏み入れた時点でもしれない

この砂漠に棲みし悪魔、
寄つていたのだつた…

”砂漠の暴君”と謳われし最凶の竜が忍び

第八話・恐暴竜のお使い（後書き）

次回、この小説で初めてモンスター同士の激突が起ります

敵はヤツが出ますが、一次創作だとして、控えめに見てやって下さい

第九話・恐暴竜の奮戦、憤怒の暴君

アイルーたちを運ぶ俺は、背に乗るアイルーに暑さの影響を『えぬよつ、田陰の岩場を突き進んでいる

実のところをこうと、暑さにくたばるのはモモだけで、移民のアイルーは砂漠で暮らしていただけあり、少しの弱音も吐かない

岩場は遠回りになると思いきや、移民アイルーたちは拠点への近道を熟知しており、来たときよりも早く帰れるらしい

最後には結局砂漠を通るらしいが……

「いやだー！ やいやだー！」

砂漠はもうコリゴリーヤー

涼しい岩場の方がいいのニヤー。」

この話しさ聞いたモモは、まるで子供のように黙々こねる始末だ

少しの辛抱だ、とせとしかけても変わらず文句をたれる

「（ああやつかい！
ならお前はここで降りやがれ！

その代わり、お前が苦しもうが野垂れ死にしようが、俺は一切責任
をとらん…）」

ここまで言われても諦めないモモに、俺は具体例を挙げて脅しをか
ける

「（この砂漠にはゲネボスつていう鳥竜種がいてな…。
ヤツらの牙には麻痺性の毒があって、噛まれれば手足が麻痺して動
かなくなり、次第に呼吸をするのも困難になる…。

完全に動かなくなったら、ヤツらは鋭い牙で肉を食り、あつという
間に骨だけにしあまう。）」

「や、やですよ田那さん。

冗談に決まってるじやーヤーですか…ニヤハハ…。」

本当にこのメラルーは調子のいいヤツだ

これでも文句を言つてたら、本当に置き去りにするところだった

モモもそのこと気づいてるのか、気持ち悪いから、俺の「機嫌

とり始めた

市場を通る途中洞窟に入り、砂漠の地底湖なるものがあつたが、その気温が低かったので急いで後にした

地底湖を抜けた先は気温の安定した洞窟だったが……

「田那さん……壁の穴に、何かいるのニヤ。」

「（俺も見えた…）。

あれがさっき言った、麻痺牙を持つゲネボスだ。」

俺は背に乗るアイルーたちに注意を呼びかけ、俺自身もいつ飛びかかるてもいいよう、警戒しながら進む

洞窟を進むにつれ、穴から顔を出すゲネポスが増えていき、いつしか周りを取り囲むほどの数にまでなった

俺たちの緊張感は高まっていくが、不思議なことに、ゲネポスたちはこちらの様子を見るだけで、襲つてくる様子は全く無かった

「旦那さん、ゲネポスたちは一体何がしたいニヤ？」

「（全く分からぬ…）。

それにリーダー格の、ドスゲネポスが見当たらない。（）」

小型の鳥竜種には群れ一つにリーダー格がいる

ランポスだつたらドスランポス、ジャギイだつたらドスジャギイといつた大型の雄がいるはず…

しかしこのゲネポスたちには、群れの首領たるドスゲネポスが見あたらぬ、統率の取れていないう合衆だ

さらに気付いた事だが、ゲネポスが俺を見る眼は、何かに期待してるように見えた

俺の背に乗るアイルーたちを食べたいのではなく、何かから守つて
欲しい… そういう心情が感じられる

ゲネポスたちの心情が気になるが、鳥竜種とは「//」ニケーション
がとれなく、何よりも移民を運ぶといつ仕事があるため、心を鬼に
してその場を立ち去る

「ニヤハハハハ！」

ゲネポスとやらも大したことなこのニヤーベビツテ襲にもじニヤー
とは、弱つひこのニヤー！

さつあまドジクビクしていたモモが、洞窟を出た瞬間にまるで四分
の手柄のように騒べ

「イツのいのビーフもしない性格、いずれ叩き直さなければと思
う俺だ…

「（つたく……それよりも警戒しない。
新しい襲撃者どもだぞ。）」

「……ヤー・ヘビ・リ・ヤー・!?

旦那さん、早くやつしめたるの……ヤー・!..

もはや何も言つま...

諦めた俺が見据える砂原の先には、砂の海を裂きながら接近する、黒いヒレ…

砂中を泳ぎ回り、集団で獲物を追い詰めていく砂漠のハンター『ガレオス』だ

ガレオスはその特性を活かし砂中からの奇襲を得意とし、また砂に隠れているために姿を視認し辛く、砂漠を進む商隊が最も警戒するモンスターでもある

ガレオスの一匹が、泳いできた勢いをそのままに飛びかかってくる

そのガレオスは俺の大きく開かれた口に噛まれ、そのまま俺の胃袋へと流れた

「（砂でジャリジャリして最悪だ。
喰つには値しないな…。）」

ガレオスの食感に不快感を示す俺に対し、仲間を一撃でやられたガレオスは、俺の周りを游泳する

ガレオスの数は数体と、残念ながら俺を相手どるには心許ない

ガレオスは俺の隙を狙っているのだろうが、毎日親父の奇襲を受けた俺には、隙や油断などといった概念は存在しない

普通なら襲撃を諦めるところだが、ガレオスたちは何が何でも食事にありつきたいようで、執拗に付きまとってくる

「（いくらなんでもおかしそぎるぞ…。

ゲネポスの首領はいないし、ガレオスたちは食えていん…おまけにガレオスの首領もいないじゃないか。

もしかして、君たちが移民したい理由も何か関係するのか?」

モモが俺の言葉を通訳して聞かせると、移民アイルーたちはギクッとした

怪しいと踏んだモモが問い合わせると、移民アイルーは思い口を開く
「…最近までボクたちは暮らして満足していくて、特に不自由なかつたのニーヤ。」

「最近まで?
何があつたニーヤ?」

俺もモモも、移民アイルーの話を真剣に聞く

「ボクたちは砂漠のモンスターから素材を頂いて生計をたててたのニヤ。

小型じや儲からないから、中型から大型のモンスターニヤ。

それが…最近猛烈に強いデカい奴が現れて、他のモンスターを一匹残らず繩張りから追い出したのニーヤ。」

「それで…砂漠で暮らすのが無理になつたから、オイラたちの村にニヤ?」

移民アイルーは「クつと頷いて見せると、自分たちが住んでいた村を寂しそうに見つめた

「（ふうん……。

とこりで、その現れたモンスターってのはどんなヤツなんだ？」

「そうだニヤ……砂漠を物凄い勢いで駆け回って、とんでもなく力の強い竜ニヤ。

身体は用心棒さんくらい大きいのニヤ。

でも、同種の竜と少し変わつて……ニヤー？

突如砂漠の向こうで大地を揺るがす、大きなな雄叫びが轟いた

異変のあつた方向をすぐさま確認すると、巨大な”何か”が砂塵を巻き起こしながら、真っ直ぐに俺たちに向かってくる

俺は本能的に危険を感じし、その場から慌てて立ち退いた

以前、俺は地中から盾蟹の突き上げる角を避けたことがある

しかしこのモンスターが地中から飛び出した時、その時の倍以上の砂が巻き上がり、避けた俺の右頬を鋭利な角が掠めた

それもあまりの勢いで、傷口から出た血液は飛沫のように噴出した

反応があと少しでも遅れたのなら、俺の頭部は容易く貫かれていた
だろう

舞い上がる砂塵が晴れていき、徐々に襲撃者の全貌が明らかとなつ
ていく

棘の付いた襟飾はまるで強固な装甲、頭部から聳える一本のねじれ
た鋭利な角

一目で凶悪と分かるその風貌は、俺の脳裏にも鮮明に焼き付いている

飛竜種の中でも上位の強さをほこり、その恐ろしい角で繩張りを侵す、数多の不届き者を仕留めてきた

通称

”砂漠の暴君・ディアブロス”

「（なる程…）コイツが棲み着いたってんなら、納得だぜ…。
しかし、コイツは一体なんなんだ？
黒い亜種は知ってるけど…。」

朱色のディアブロスなんて、俺は知らないぞ？」

一般的なディアブロスの甲殻は砂漠と同色の土色のはずだ

雌の固体は繁殖期に警戒色として甲殻が黒くなり、これが亜種とされる……と、どこかで見た気がする

だが俺の田の前にいるコイツはなんだ？

甲殻は土色ではなく、砂漠では異質ともいえる朱色の甲殻に覆われている

自分の知らない亞種なのか、あるいは希少種…はたまた突然変異の全く別の竜か

そんな思案を巡らせる俺に隙が生まれてしまい、様子を窺っていたガレオスが飛びかかってきた

とつさに一匹をかわしたが、そのせいで背のアイルーが落ちそうになる

アイルーを気にして動けない俺に、ガレオスはこじぞとばかりに襲うガレオスの襲撃をかわす行動の中で微かに見えた光景に、俺はとつさに叫ぶ

「（耳を押さえろ！）」

そして、俺の叫びをも搔き消す大きな咆哮が響き渡った

その咆哮は広大な砂漠に響き渡り、俺も大気の振動を身体でビリビ

りと感じた

幸い俺の叫びはアイルーたちに届き、耳の保護を済ませて俺も耐えられた

しかし、前兆もなしにいきなり…それも聴覚の発達したガレオスたちには大ダメージとなり、ガレオスは残らず全滅した

邪魔者を片付けたティアブロスは、改めて俺を見据える

直感が俺に告げた

コイツは危険だ…

「（モモ…移民たちを連れて、ゆっくり背から降りろ。
そして、俺に構わず拠点へと向かえ。）」「

「旦那さん何を……わ、分かったのニヤ。」

俺と角竜のただならぬ雰囲気を肌で感じ、モモは素直に応じた

モモたちは角竜を刺激しないよつゝ、ゆつくじと背から降りていく

俺とアイルーたちの焦りとは裏腹に、角竜は俺だけを睨みながら見据えている

（狙いは最初から俺か。）

モモたちが十分に離れたのを確認した俺は、角竜の様子を窺うべくゆっくり回り込もうとすると、角竜も俺の動きに合わせる

俺と角竜は円を描きながら距離を詰めていく

接近するにつれ緊張感は高まり、角竜の威圧感も大きくなつていいく

この世界に転生して、一度目の飛竜との戦い

最初のフルフルは辛くも撃退したが、このディアブロスはそれを遙かに凌駕する飛竜だ

飛行能力が乏しい角竜と、翼自体が無い獣竜種は同じ土俵で戦えるが、はつきりいってこのディアブロスは俺よりも強い

恐暴竜と角竜といったら、恐暴竜の方が強いかも知れない

しかし、それは成長しきった成体同士の話であり、今の俺は僅か二年生きただけでまだ未熟な部分がある

対してこの角竜は、俺よりも長い年月を生きてきたことが感じられ、俺よりも実戦経験は遥かに多いはずだ

何より、この亞種とも希少種とも格付けし難い朱色の角竜の力は未知数だ

お互いで睨み合っていたが、角竜の唸り声と共に、熾烈な闘争が始まった

最初に動きを起こした角竜は、身体を反転させ遠心力を活かし尻尾を振る

俺も間髪入れず尻尾で応戦し、互いの尻尾が激突して大きな衝突音が鳴る

尻尾の面積は俺の方が大きかったが、角竜の尻尾は圧倒的な強度としなやかさで、威力はほぼ同等…むしろ角竜の方が若干上手だった

鈍感なはずの尻尾から伝わる痛みに苦悶するが、角竜は逆方向に反転し、容赦なく尻尾をぶつけてきた

直前で防御したが、身体の側面を襲つた衝撃に、俺は一、二歩後退りした

さらに角竜は追撃を加えるべく、一本の角を振りかざして突進していく

攻撃の面で出遅れた俺だったが、角竜の突進を紙一重でかわし、角竜の側面に強烈な体当たりを敢行する

横からの衝撃によりひけて転倒する角竜…

俺は親父に教わった対飛竜戦法、翼を鉤爪で押さえての攻撃をすべく、倒れる角竜に接近した

俺がその場を跳んで一気に距離を詰めると、角竜はすぐさま立ち上がりて迎撃、宙に浮いていた俺を角竜は頭突きでふつ飛ばす

崖からの転落で鍛えた俺だが、その時の痛みとは比べ物にならない激痛が、比較的柔らかい腹部を襲う

あまりの激痛に悶える俺に対し、角竜は容赦ない追撃をする

倒れる俺に向けて必殺の突進、俺はすんでのじりひで立ち回避でき、角竜は勢いを殺しきれず砂を滑っていく

俺が時間稼ぎをしたおかげでモモたちは見えなくなり、作戦はとりあえず成功した

このまま戦つても俺に勝ち目はない

後はこの角竜を撒き、安全に村へ帰還するだけだ

逃げ腰に見えるかもしないが、親父に教わった教訓の一つ…”勝てない戦いはするな、自然界では生き延びた者が勝者だ”この親父の言葉が、しっかりと俺の中で活きていた

角竜が突進の後でもたついている隙に、俺は逃走をはかるべく走った

背後で凄まじい雄叫びが聞こえたが、俺は構わず走りつづける

今までに無いくらい全力で走る俺は、内心かなり焦っていた

目の前で逃走した俺に角竜は怒つたらしく、凄まじい速さで俺を追いかけてきて、今では俺の真横を併走している

角竜は走りながら身体をぶつけてきて、俺もなんとか応戦するも、勢いは角竜の方が強い

進行上の岩場に入れば、いくらか地形を活かした戦いが出来るが、これではその前にお陀仏だ

焦る脳で対処法を考える俺に、賭けに等しい苦肉の策を思い付く

俺は今ある力をさらりと振り絞り、走る速さを加速していく

角竜もそれに合わせ加速、後は角竜の体当たりを待つ

俺の目に大きな岩が見えた時、俺はわざと角竜に疲労の色を見せ付ける

角竜はそれを見逃さず俺に体当たりをし、俺は力一杯それに対抗する

そして大きな岩に近づいた時、俺は抵抗を止めて左に逸れていく

力のやり場を失った角竜は俺の動きに流されていき、俺はそこで身

を捻り尻尾で角竜の動きを後押しし、眼前の岩に角竜を叩き付けた

頭部を激突させることは失敗したが、角竜自身の突進と俺の力が加わり、凄まじい威力になつたはずだ

俺は角竜に追撃をすることも、様子を見ることもせず、すぐさま戦場に入つていつて身を隠した

「グツ……グガアアアアー！……」

今まで味わつたことのない屈辱……

角竜は憤怒の暴君と化し、砂漠の砂を掘り起こし、その巨大を砂中にしづめていった……

はあ……かなり危なかつた、あのままいつてたらマジヤバか
つたな！

とつとの作戦が成功して良かつたぜ……。

なんとか追撃をかわした俺は、岩場に溜まつた水溜まりの元で、疲れを癒やしていた

腹……減つたな。

あの激戦でかなり体力を消耗したようで、腹の虫が騒いでいる

水溜まりには草食獣がいたのだが、俺が来たためにいつの間にか逃げてしまった

キヨロキヨロ周囲を見渡しても見つからないので、仕方なくこの場

を移動する

角竜があの後どうなったか知らないが、少なくとも死んではいない
だろう

となると、砂漠を進んで拠点に帰るのは危険なので、北の雪山方面
を迂回して帰ることにした
それでも少しばかり砂漠を通るが……

メシイ……メシ……草食獣はどうしている

北に向かうついでにエサたるモンスターを探すが、一匹も見つから
ない

いたのは大嫌いなランゴスタだけだった

前に食べたのは数時間前だが、イビルジョーの俺から言わせてもら
うと……人間にして丸一日何も食べないと一緒だ

何も獲られないまま岩場を抜け、悪魔の棲み着く砂漠に出でてしまった

空腹のまま角竜に遭遇したら、今度こそやられてしまつ

俺はしばし躊躇したが、口影のところで砂がモフモフしていたので、つい好奇心にかられて岩場を出た

もぞもぞと動く砂の所をほじくつてみると、甲殻種の《ヤオザミ》がいた

成長すれば盾蟹となる固体で、前に盾蟹を食べた時はなかなかうまかった

俺はヤオザミを捕獲し、殻ごと食べてみた

盾蟹の幼体なだけあつてなかなか美味だが、なにぶん小さいので、ちつとも腹の足しにならない

俺は他にもいか探してみたが、見つからなかつた

俺は諦めて北へと向かっていく

途中底の見えない谷間が現れ、高所恐怖症の俺はゾッとした
谷の下からは水の音が聞こえるため、どうやら川があるようだ
深さの程は知らないが……

ああもう…マズくてもいいから、ガレオスか何かじゃないかな？

俺の切なる願いが叶ったのか、俺の背後から何かが近づいてくる

ただし、それは俺が望んでいたものではなく、今最も望まないモン
スターだった

「ガアアアアアアアー！！！」

俺の目の前に現れたのは、命懸けで撃退したはずの朱色の角竜…

大変お怒りのご様子で、眼が殺人的なまでにぎらつき、口からは黒い息を激しく噴出している

俺の前には怒れる暴君、背後には闇の裂け谷…

行くも地獄、退くも地獄である

確實に追い詰められた俺だが、この状況は不思議にも、俺に冷静さを取り戻させた

窮鼠猫を噛む、背水の陣…今の俺にはこのことわざが当てはまるはずだ

怒り狂う角竜はさつきみたいに様子見などせず、真っ正面から突進する

「（ウリヤアアアアーー）」

俺は角竜の突進に真っ向から受け止め、全身の筋肉と脚の鉤爪を駆使し、角竜に負けない力を見せ付ける

角竜は一度後ろに下がり再び突進、今度は角で突き刺すつもりらしい

俺は瞬時に片方の角にかじりついたが、もう片方の角が俺の首に突き刺さる

首に激痛が走り、血がドクドクと溢れるが、俺は牙を噛む力を強くしていく

俺の噛む力と牙により、角竜の角が軋みヒビが入り、最後に力を入れて遂に角竜の角がへし折れた

だが角をへし折ったために角竜は自由となり、俺の頭部を突き上げ、身体を反転させて強固な尻尾で俺の頭を打ち抜いた

今まで味わったことのない衝撃が襲い、脳震とうを起こした俺はフラつく

倒れそうになるのを、辛うじて踏みとどまつてはいるが、もう戦える余力は無い

角竜は自慢の角を一本折られたのみで、身体はほぼ無傷：

角竜の角は真っ直ぐ俺の心臓を狙つており、次の突進をくらえれば確実に死ぬ…

角竜は容赦なく俺に突進してきたが、俺が谷の端に立つと、角竜は慌てて止まり、尻尾を地面に叩きつけて雄々しく吼える

俺が突進をかわせば角竜は谷底に落下する

”正々堂々、前に出て戦え”… そう角竜は言いたいのだろうが、俺にはそんな卑怯な考えはあるで無かつた…

俺は純粋にこの圧倒的な強さを持つ角竜を賞賛していた

かといって、このまま無残にもやられることはもうない

俺の帰りを待つモモや村長のためにも、生きて帰らなければならぬ

そして俺が唯一生き延びる可能性は、これしか無かった……

「（生きて逢えたら……また戦おうぜ。）

それまで……無敵でいてくれよな……あばよ。」

俺はニヤリと笑い、足場のない背後に後ずさった

最後に角竜と眼が合ひ、そこには怒りや憎悪の色など無く、俺への敬意があつた気がした

俺は角竜に認められた満足感に浸り、暗闇の底へと落としていった

……

「（天晴れなり……いずれ我が強敵として立ちはだかる」と、心より愉しみにしておるぞ。）」

この朱色の角竜こそが、後に生涯のライバルになると共に、唯一無二の親友となる竜であった……

恐暴竜と片角の暴君、この二体が様々な伝説を作ることなど……今は誰も知らない

第九話・恐暴竜の奮戦、憤怒の暴君（後書き）

はい……

漫画読んだことも無いのに、片角のマオウ出してしまいました…

きつかけはディアソルテ装備を眺めてて、朱色のディアブロスかつ
こいいかな？

…と思つたからです

漫画を読んだこと無いので登場人物までは出せません

朱色の角竜はしばらく出番無いと思いますが、そのうち小説の重要な役柄につくかもしません

補足

主人公は角竜にボロクソにやられたように思われるかもしれません
が、挙げましたとおり経験不足と年齢の差です

一番大きな要因は、怒りによる肉体の強化が出来なかつたこと

人間の心を持つ主人公には、野生同士の戦いでは怒りに徹しきれな

いの
で
す

第十話・少女と恐暴竜の邂逅

転生して溺れたのは一度目…

最初は島を出る時嵐に遭遇し、激しい波と風雨にもみくちゃにされ、呆氣なく溺れた

俺は”砂漠の暴君”と死闘を演じ、この世界に転生して初めて苦戦を強いられた

角竜の重い攻撃を何度も身に受け、鋭い角に肉をえぐられた
最後に角竜の片角をへし折つたが、その後の一撃をかわせず…結果は惨敗

角竜の猛攻でボロボロになつていた俺は、深い谷に落下することでお走りし、幸いに谷の川は深く、深い水が落下の衝撃を消してくれた

ただ、激流の中で何度も岩にぶつかり、その度に傷口から血を流した…普通なら死んでしまうような怪我だが、俺は死なかつた

それは恐暴竜の持つて産まれた耐久力と、親父に厳しく鍛えられた肉体と精神力があつたからだろう…

からくも生き延びた俺は、緩やかな浅瀬に流れ着いた

俺は意識を保ちながら立ち上がろうとするが、足を滑らして転倒した

角竜につけられた傷、激流の川で新たにできた傷、それから多量の血が流れしており、今の俺には満足に歩ける体力は残っていない

今すぐに何かを捕食し、安らかな睡眠とで体力を回復しなければ……俺は朦朧とする意識の中でそつ考え、川のそばにある針葉樹の森へと入つていった

針葉樹林に入つてすぐ、俺は獲物となる草食種のモンスターを見つけた

発見したモンスターは”ポポ”、反り返つた大きな牙を持ち毛皮に覆われているが、その肉はとても上手く、またポポの舌は珍味と言われている

俺はポポの群に忍び寄るが、獲物にありつきたいといつ強い気持ち
が滲み出でてしまい、離れた位置でポポに察知されてしまった

ポポは一斉に逃げていき、焦る俺は慌ててその後を追うが、怪我のために足を引きずっている

ポポの群から一匹が遅れ、俺はそのポポに狙いを定め、一気に詰め寄つて噛みついた

怪我で体力が低下しているとはい、俺の鋭い牙はポポを貫き、強靭な顎はポポの剛毛」と食いついた

仕留めたポポをぼぼ丸呑みにして、逃げるポポを追撃……大きなポポを一頭仕留め、その一頭を喰つた

ポポを二頭喰つてもまだ空腹感が残っていたが、すでに残りのポポはいなく、謳歌でそれ以外の草食種も一匹残らず逃げていた

ただ傷がある上に…今気付いたが、自分がいる地面は白く雪に覆われ、空からも雪が降つている

こんな状況で獲物を探せば、空腹と捕食のいたりつけがいつまで

も続く

俺は雪の積もらない大木の下に移動し、満身創痍の身体を横にする
ここまで傷ついた身体を動かしてきたのはほほ気合い、それを解いて気持ちを緩めた俺は、一気に押し寄せる疲労感と眠気に負け、すくに深い眠りに落ちていった……

『雪山・麓の村』

極寒の雪山の麓に位置する、小さな集落

近くにあるポッケ村に比べると知名度は無いが、寒さをモノともしない逞しい人間が住んでいた

村が麓にあってモンスターがあまり来ないと、ポッケ村のハンターが活躍してくれるため、モンスターによる被害は無い

村の人々は雪山で採れる特産品を街で売り、雪山では手に入らない物資を買い、他は自給自足でまかなっている

「ママ！」

「畑仕事が終わったら、雪山草採りに行つてもいい！？」

村の畠で、少女の明るく健気な声が響く

少女は毛皮の暖かそうな衣服に身を包み、となりで畑仕事をする母親らしき女性も同様の衣服だ

「構わないけど、行く時はちゃんと準備して、ギアノスたちに気をつけるのよ？」

母親は畠を耕す手を止め、我が子の頭を撫でるが、少女は不満そうに頬を膨らます

「もう十一歳になつたんだから、子ども扱いしないでよ！」

「はいはい、十一歳にもなつて一人で寝れないのはどういの子かな？」

母親が笑いながら言つと、少女は慌てて周りの畠を気にする

畑仕事をしていた農夫たちは母親の話を耳に入れており、皆少女を笑いながら見つめていた

「雪山草採りに行く！！」

顔を真っ赤にした少女は、煙の横のかごを引つたり、針葉樹林めがけ走り去つていった

「ねはねはねーーー！」

相変わらずマリナちゃんは元気いっぱいだな！」

畠から作物を引き抜いていた農夫が、少女の消えた針葉樹林を見て大笑いする

「畠仕事を手伝つたりしてくれますが、まだまだ子どもですからねえ。

ああやつて、元気に走り回っている方がいいんです。」

母親は慈愛に満ちた笑みを浮かべた

『針葉樹林』

全く…みんなしてマリナのこと子ども扱いして！

確かに…確かに夜は怖くて一人じゃ眠れないけど、一人でおトイレに行けるよ！

それこうやって一人で村の外に行けるし、外に出れない友達よりもずっと大人だもん！

この前なんか、追いかけてきたギアノスと駆けっこして勝ったもんね！

針葉樹林に入った少女”マリナ”は、誰もいないにも関わらず、自己主張を口にする

マリナの長所はその活発な性格と、ギアノスからも逃げ切れる優れた運動神経

大人でさえも手をやくギアノスに対し、幼いマリナは大人顔負けの動きでギアノスを相手取り、調子がいいときは逆に打ち負かす

マリナが村の外に出たがる理由はこれであり、ギアノス以外にもブランコをからかいに雪山に行く

ただ今の時期は山に行く道が雪で閉ざされているため、雪山草を探るついでに針葉樹林に入ったのだ

針葉樹林は稀にギアノスが来る時以外、草食種ばかりがいる平和な森だ

マリナは針葉樹林に来ると、ポポの群れに混じって遊ぶのだが、今日に限つてポポたちが一頭もいない

森を歩き回つてみたが、ポポの姿はおろか痕跡が見当たらぬ

しばらく歩き回つて諦めかけた時、雪面に残るポポの足跡を見つけ、マリナは期待に顔をほこりばす

足跡の数はかなりあり、また何度も踏み荒らされてどつちに向かつたか分からないので、自分の勘で辿つてみた

マリナは足跡を見下ろしながら進んでいくと、視界の端にポポの毛が映り、顔を上げた

しかしそれはポポだったもの……毛皮を喰い破られ、血で雪面を赤

く染めるポポの亡骸だった

マリナが最初に見つけた亡骸のそばに、同じく喰い荒らされたポポの死体……遠くに赤黒い物体が見えたが、それもポポの死体

突如モンスターの死体を見たマリナは腰を抜かし、雪の上に尻餅をつく

な、なんのこれ……？

なんでポポが死んで……るの？

誰がこんな……もしかして……

マリナの頭に浮かんだのは、凶暴な肉食獣

ギアノスたちにはこんなに喰い荒らせないし、ドスギアノスにも無理
ブランゴはそもそも肉食ではない

残す可能性は飛竜種……だが、ここいらで確認出来る飛竜は”フルフル”しかいない

しかしフルフルは麓に下りてまで、大きな体のポポを捕食しに来ない

だとすれば誰も知らない、未知の肉食獣……

マリナは得体の知れないモンスターを想像し、その恐怖に体を震わした

今まで相手にしてきたギアノスやブランゴとは、格が違う
ポポを襲ったモンスターが現れたら、自分ごとき簡単に捕まえ、喰つてしまふ

マリナには森の静けさが不気味に感じられ、モンスターが自分を狙っていないか周囲を見渡してみると、一つ目を引くものを見つけた
見つけたのは、ポポの亡骸の脇から地面に残る血痕

一見、ポポが引きずられて出た血に見えるが、地面の雪はえぐれて
いない……

そしてそこには、大きな足跡があり、足跡と血痕は針葉樹林の奥まで続いていた

マリナはモンスターへ恐怖を感じていたが、未知のモンスターを見たいという好奇心が強まり、ゆっくりその足跡を辿つてみた

針葉樹林を進んでいくと、一際大きな針葉樹に辿り着く
巨大な針葉樹の下には雪が積もってなく、足跡はそこを通つたらし
く足跡は消えていた

マリナがため息をつき、ふと横を見ると、大木の横には黒緑の巨大
なモンスターがいた

マリナは悲鳴をあげそうになるのを、手で口を覆つて止めた

幸いモンスターは寝ているようで、マリナに気付かず静かな寝息を
たてている

マリナは慎重に近付き、その凶暴そうなモンスターの姿を見る

牙獸種であれば体毛があつて四肢が発達しているが、このモンスター
は後ろ脚のみが発達している

飛竜種であればつがいの翼があるが、このモンスターにはそれがない

こんな特徴を持つモンスターは見たことがないし、聞いたこともな
い…

マリナが自分の知識を思い返していると、一つ思い付くものがあった

モンスターにはそれぞれ特徴があり、一本の足で歩き翼を持つ竜を飛竜種、牙があり哺乳類型の獣を牙獸種、飛竜の翼の代わりにヒレを持つ魚竜種など、自然界に生息するモンスターは、学者や研究者の決めた分類に当てはめられるが、中にはそれらに当てはめるのが難しいモンスターがいる

あらゆる生態系から逸脱し、強大な力と驚異的な生命力を持つ生物
…それらはまとめて”古龍”と呼ばれている

目の前にいる竜は、マリナが今まで見たモンスターとは異なる構造をし、また知る限りの分類には当てはまらない

さらにさらに、もしかしたらこの竜は新種の古龍で、それを見つけて自分は大発見をして有名になるのでは?

…と胸を踊らせていたが、改めてこの竜を見ると痛々しい傷が無数についていることに気付く

傷口から微量の血が流れ、雪山の寒さがこの竜に一層負担をかけているようだ

このまま放置したら、この龍は死んでしまうかもしれない……マリナはしてもたつてもいられず、目の前の龍に近づいていった

傷は最近出来たものみたいで、傷口が真新しい

マリナはから雪山草と一緒に採れた薬草を出し、それをすりつぶして龍の傷口に塗っていく

時折龍がピクリと動き、そのたびマリナはビビるが、起らなければ重に傷を癒やしていく

薬草が無くならなければ治療を終え、龍も起きることとなかった
ただ傷を癒やした後の龍は、治療する前より心地良さそうに寝息をたてており、一仕事終えたマリナは満足げだった

後はこの龍が起きてくるのを離れて見ていたが、結局起きず、日没が近づいてきたので一日帰ることにしたが……

「（ありがと）」

「……え……誰？」

突然聞こえた言葉に、マリナは声の主を探してキョロキョロと辺りを見回す

「…気のせいかな？　

ここにはマリナとこの子しかいな……。」

マリナが竜に振り返ると、竜も同じくマリナを見つめていた

緊急事態にマリナが固まっていると、竜はゆっくり口を動かした

「（怯えないでくれ…俺は君を襲いはしない。）」

今度ははつきりと、竜の口から言葉を聞いた

しかしそれは有り得ないこと……モンスターが人間の言葉を理解する」とも、人間がモンスターの言葉を聞くなど不可思議なことだ

「や…君は、人と話せるの？」

マリナが竜に問い合わせると、竜は首を振つて否定した

「（すまない…今は答えられそうもない。
少し…休ませてくれ。）」

竜は持ち上げていた首を下ろし、静かに瞼を綴じてしまった

竜がとても疲れていることは分かつており、マリナも帰らなければならぬので、聞きたいことはまた今度にしようとした

「また来るから…ちやんと休んで傷を治してね?
バイバイ。」

マリナは寝てしまつた竜に手を振り、急いで村の方角へと走つていった

手負いの竜は少女の後ろ姿を見据えていたが、やがて竜は深い眠りへと戻つていった

第十話・少女と恐暴竜の邂逅（後書き）

次も似たような……感じ？

第十ー話・俺口コハシやなこよ~(繪書モ)

150 - 805P ▽ だつて!?

この間こじんなに...感動です

第十一話・俺口リ「ン」じやないよ？

「ママー！」

今日も雪山草採つてくるー。

麓の村の元気少女は、畠仕事をする母親の後ろ姿にそう叫び、返事も待たずに針葉樹林へと走つていった

母親が娘に振り返る時には、すでに娘の姿は小さくなつており、針葉樹林に入つていいくところだった

娘のわんぱくぶりに母親は呆れてため息をつき、切り株に腰かけて休憩する

休む母親にもとに、数人の村人が軽いおつまみを持って來た

母親はありがたく村人の厚意に甘え、村人たちもまじえて小休憩する

人が集まるとき話が生まれるが、娘であるマリナの話題がほとんどだ
マリナのわんぱくぶりと親孝行は村で有名である
また、幼いながらも顔立ちはすでに良く、同年代や稀に大人たちを
メロメロにしている

もちろん大人は決して手を出さないが、同年代の少年たちはマリナ

の気をひきつて、あれやこれやアピールするも玉砕

普段マリナは、畠仕事を手伝っているためその邪魔を出来ないし、マリナの大人びた性格に少年たちはなかなか絡んでいけない。さらにマリナは暇さえあれば外界に出るが、少年たちは怖くて出れない…これらが男友達に興味を示さない理由もある

マリナは自分より劣る異性には決してなびかない、気高く孤高の存在……と、マリナ自身が言っていた

村人たちはマリナに突撃し、打ちのめされて帰つて来る少年たちを見て笑い、よく少年たちを慰めている

「あの勢いでやつたら、すぐ百人斬り達成しちゃうんじゃないかな？」

村人の一人が、マリナの愛の告白を蹴る様子をたとえると、他の村人や母親は笑った

「そつなりそうで怖いですが…機会を見逃して欲しくないです。」

母親は遠い目をする

成人を迎えていない今だから笑えるが、大人になつてもこのまま生きていけば、婚期というものを見逃してしまつかもしない

「わはははは！」

大丈夫ですよ、まだ異性を意識しないだけで、十五にもなれば立派な女の子になりますよ…」

「やうだといーですが…。

それについても、最近マリナはよく外に行きたがるわね。」

「ありや？

奥さんがマリナちゃんにお願いしてるんじゃないんですか？」

村人が意外そうな表情を浮かべたのに対し、母親は首を横に振る

「雪山草を探つてくれて助かるんですが、ただ心配で…。」

「マリナちゃんのことだから大丈夫だと思いますけど、今日は森に用事がありますんで、その時は様子を見てきますよ。」

「すみません、よろしくお願ひします…。」

『針葉樹林』

長く降っていた雪は止み、針葉樹の葉と地面は美しい雪景色に様変わりした

ただ針葉樹に降り積もった雪も、先ほどから森に起きる振動で、パラパラと地面に落ちていく

森の中心には木々の背丈と同等の体格を持ち、強靭な足で力強く大地を踏みつける竜…

数日前にこの雪山のフィールドに流れ着いた俺は、空腹を僅かに満たし、寒さを感じながら無理に睡眠をとっていた

傷と寒さで体力を消耗していく中、俺は一人の少女に出会った

俺の傷を癒やしてくれた少女を見ると、恐怖に固まっていたが、俺は穏やかな声をかけて少女を安心させた

体力が無い俺はすぐに寝てしまったが、少女はまた来ると約束し、帰つていった

翌日、少女は言つた約束した通り俺のもとにもやって来た
まだ俺に怯えていたが、昨日同様優しく声をかけると、緊張をほぐしてくれた

それから少女は、傷ついた俺のために薬草を探り、たまに調合した回復薬までくれる
動けない俺のため、かき集めた食料を持ってきてくれて、寒い日に
は辛い食べ物までくれた

少女の看病のおかげで俺の傷はあつという間に癒え、数日もすれば
もとのように動けるまでに回復した

今俺は、鈍つた体をほぐすように動かし、走つたり地面を踏みなら
したりしている

瀕死に追い込まれた後回復した俺は、以前よりも強くなつた気がし
たが、俺の考え方通りであった

足を上げて大地を踏みつけると、凄まじい地響きと亀裂が生じた他、
衝撃波で積もつていた雪までも吹き飛んだ

死に際から復活して強くなるなんて、どここのサヤ人もとい、どこ
のバダックだよとツツコミをいれる

おそらく俺を転生させてくれた神さまが、オマケで付けてくれた能
力なのだろう

俺は現状の力に満足し、次に太めの大木を見据える
近寄つて首を傾け、大木の幹を軽く噛んでみると、まるでチーズを
噛むかのように簡単に噛み千切つた

次に尻尾を振るつて大木に当ててみると、大木は簡単に折れ、その
抵抗の無さから小枝に思えた

「モンスターさん！」

自分の実力を確認中に少女の声が聞こえ、俺は声の聞こえた方角に
首を傾げ、少女の呼び声に応えるべく鳴いた

どうやら死に際からの強化は俺の肺活量までに及んだため、鳴いた
というより吠えたで、無意識に普段の咆哮くらい大きかつた

俺の大きな声のせいで森が揺れ、走ってきた少女は驚いて前のめり
に転倒する

これからは力を制御しなければ……そう思つていると、起き上がり

た少女が俺を睨んできた

「いきなり大きな声出さないでよ！
驚いて転んじゃつたじゃない！」

「（すまんすまん…人間相手には初めてだから、手加減出来なかつた。）」

俺が素直に謝ると、少女は一コツと笑い機嫌を戻した

「謝つてくれたから許してあげる！
でも、次やつたら許さないからね？」

少女は腰に手を当てて上目で見つめてくる

おや？

なんなんでしょう……この少女の仕草と上目遣い、見てるとなんか

この……胸の鼓動が高まつてくる感じだ

俺は首をブンブン振り、この感覚は単に小さくアドモと遊んで楽し
いからだ、と思い込む

「それより、もう体は動かして大丈夫なの？」

「（おひ、嬢ちゃんの看病のおかげで）の通りだ！」

元気なことを見せ付けようと地面を踏みつけると、衝撃で木に降り積もった雪が少女に落ちた

雪に半身埋もれた状態で少女は白々しご田ぐ、無言の圧力を挡してくる

泣かれたり騒がれたりしたらと、俺は慌てて全力で謝罪する

「全く…ワザとやつてるなり、本氣で怒るよっ。」

「（め、面田ない…。）」

少女は俺が謝ると快く許してくれ
優しいのか？

「（それより、嬢ちゃんは『マコナーハ』は？）」

少女は俺の話を遮ると、なにやら謎めいた無ご腕を誇張する

「ふむ……自分はこだわり持つてなかつたが、貧しいのもなかなかつて、何考えてんだ俺は？」

「私は嬢ちゃんじゃなくて、マリナってこの名前があるのー。だからマリナって呼んで！」

「（ああ分かったよ嬢ちゃん……じゃなくて、マリナちゃん。）」

俺が少女をマリナと呼ぶと、少女はやはり機嫌良さそうに笑うあと、名前の後に”ちゃん”を付けることも拒否された理由は子ども扱いされてるみたいだから……と

幼女の言ひなりになつてゐる俺つて……世間からどう見られるんでしょう？

「（続きを話しだけど、毎日俺のところに来て、マリナの家族は心配してないの？）」

「うん、大丈夫大丈夫！」

雪山草採りに来てるって言ひたのから、何の心配もなことよ。」

「（あら、そつなの？）」

心配をする俺に対し、マリナは笑いながら囁つ

話しを聞くとマリナは家の手伝いとして、特産の雪山草を探つてく
るらしい

こんな歳で親孝行なんて大した子ビもだ

そういえば俺は親孝行どころか、親父のスバルタ教育で忙しく、そ
れすら考えたこと無かつた

元の親はどうでもいいが、うちのイビルジョー親父に何かしてや
りたい、そつ切実に思う俺だった

「（親孝行なんて、今時珍しいことだな。
大した心掛けだよ。）」

「うん。

マリナがパパの代わりにママのお手伝いするんだ！」

スゴいな……父ちゃんはどうか出稼ぎにでも行つてゐるのかな？

「パパは街の方でも結構有名で、とっても強いハンターだったんだ！」

なぬ……ハンター”ですと！？

”ハンター”

言わずと知れた大自然を相手にする狩人のこと

植物を採集して魚釣りをしてるならまだしも、ハンターは俺たちの
ような、所謂大型モンスターに挑んで来るので、お互いに敵視して
いる

俺はまだハンターとは遭遇してないが、太刀やらハンマーでタコ殴
りなんてまっぴらなので、出来れば一生会いたくないと思っていた

そのハンマーさんが、田の前にいる少女の父親だと！？

「イツはマズい……もし親父さんがやつて来て、ハンターにまとめて

かかられたらボコボコされて剥ぎ取られちまつー

そんであれか！？

ヤツパリ俺の素材は装備に使われて、自分を殺した奴の身体を守るつてのか！？

が、神さま助けて！！

「アハハ！」

そんな顔しなくても大丈夫だよ！

パパはもうこの世にいないから、モンスターさんが狩られたりしないよ！」

俺はマリナの言葉を聞いて安心したが……サラッとマリナはほとんどでもないことを言った気がする

「うちのパパは何年か前、モンスターとの戦いに負けて、帰らぬ人になったの。」

マリナはまるで父親の死が何ともないかのように、笑いながら語っている

俺が笑顔で語る理由を尋ねると、マリナはこう返した

「パパが死んだって聞いた時は悲しかったけど、いつまでも悲しんでいたの。だって私にはママがいるし、パパの代わりに私がママを支えないといけないから。」

この娘はとても強い…

普通なら父親を無くせば悲しみにくれ、頼れる存在である母親に泣きつくはずだ

それがこの娘はどうだろう?
母親にすがりついて泣か、悲しみを克服し、母親を支えていたといつのだ

「それにパパは人間の領域の外…弱肉強食の世界を相手にしてたんだから、命を落としても恨み辛みは無しだよー。」

弱肉強食か……びいどその包帯姿の大悪党も言つてた気がする

弱ければ死に、強いものは生き残る
人間同士ではどうしても私怨が生まれるかもしれないが、異種族間では食うか食われるかであり、生存競争である

モンスターにやられたからといって、モンスターを恨むのは筋違い
領域を犯し自然界に入つたからには、人間も弱肉強食の世界に足を
踏み入れたことになるからだ

本当によく出来た娘だ…

俺がまだ覚悟してないようなことを、幼子のマリナは既に身に付けて
いるのだから

「（うんうん…マリナはたくましい娘だね。
お兄さん感心しちゃうよ。）」

俺はマリナの心構えを純粋に讃え、誉め上げたつもりだったが…
どす黒い殺氣と何かがブチッと切れる音が聞こえ、俺は恐る恐る顔
をあげる

目の前にいるのは可愛らしい少女のマリナなどではない！
笑顔だが頬を引きつらせ、背後に鬼の姿が浮かんできそうな夜叉だ！

「（あの…マリナさん？
なぜそんなに素敵すぎる笑顔を浮かべてるので？）」

「あんた今子ども扱いしたでしょ？」

「マリナはね……子ども扱いられるのが、『ほん盜られた次にイラつ
くのー』

「（ま、待て！

俺がいつ子ども扱いし『問答無用ーーー』

イタいいタい！

雪玉を投げないでーーー

ブツツンしたマリナは雪を力強く握り、固くなつた雪玉を俺めがけ
投げまくる

なんだか知らないが、親父のスバルタ特訓による防御力は大抵の攻
撃を弾くが、幼女の怒りの攻撃にはなすすべもないようだ

雪玉でボコボコされた俺をよそに、マリナは雪だるまを作つて遊
んでいる

全く……雪だるまを作つて遊ぶなんて、どう見たつて子どもじやないか

「ねえ……今マリナのことと馴鹿こしたでしょ？」

「（…？

イイエ…ソソナコトハ。）」

俺の心を読んだかのよつてマリナに、俺は心臓が飛び出す思いをした

竜だから冷や汗はかかないが、人間であつたのなら滝のように流れていることだらう幼児体型マリナが俺に向けてくる穢むよつな目つぞ……

これはなかなかクセに……ハツ！？

いかんいかん、何だか最近俺の中身がおかしくなつてゐるな

妙な感情を打ち消そつと首を左右に振つてゐると、マリナに小枝で刺された

「全く…みんなしてマリナのことすらも扱こするんだから…」

「（こやこや、実際まだまだ子どもでしょ~）」

俺が笑いながら穏やかに言つて、今度は十分に殺氣のこもつた睨みをくれました

ハハ…この娘がハンターにでもなつたら、古龍をソロ狩りしちゃいそうですね

「そういうアンタはどうなの！？」

モンスターだから分からぬいけど、せいぜい一歳くらいでしょう！？」

マリナの言った言葉に俺はとぼけてみせたが、本当はかなり動搖していた

前世の年齢と合わせれば二十代の俺だが、転生後は生まれてまだ二年モンスターが何年生きたかなど、動けなくして充分に調べなければ分からぬい

さらに、モンスターの専門知識を持つ学者やハンター以外には、皆田見当がつかないはずだ

そういうえば、マリナはハンターの娘だと言っていた
もしかして、父親からモンスターの年齢を読み取る方法を伝授されたのでは？

…と思い問い合わせたところ『カン』だそうだ

いやはや…この年齢で女のカンを身に付けているとは、ますますただ者ではないな

「結局のところモンスターさんは何歳なの？」

「やっぱり一歳？」

いいじで下手なこと言つと見破られるが、年下だと明かせば絶対に調

子に乗るので…

「（俺は）十年以上生きてるかな？」

詳しい年齢は忘れた。」

嘘は言つていなはずだ…

俺は転生してからの年月と、転生前の年齢を合わせた数を言つた
詳細な年齢は本当に忘れたが、年齢は二十代のはずだ…たぶん

「ふうん…二十代ねえ。

それにしては身体が若々しい気がするけど、モンスターと人間と同じ
や常識違つもんね。」

とつあえず信用してくれたみたいで、ホッと胸をなで下ろす

「マリナより年上なら…今日からモンスターさんは私の兄ちゃんんだ
ね！」

「（は？兄ちゃん？）

マリナはとびつきの笑顔を俺に向かってくる

「（こせこせ…何で俺が兄ちゃんなのー…）

「だってモンスターさんは私より年上だから、それにお兄ちゃん欲しかったし。」

「（いやそれにしたって『ダメかな？』うぐつー！？）

マリナの涙ぐんだ上目が、俺の精神に直接攻撃！

先ほどの夜叉とは打って変わって、まるで小動物のように守む

俺はつぶらな瞳で見上げてくるマリナを、今すぐ抱き締めてお持ち
帰りしたかったが、生憎イビルジョーの俺は手が短い！！

声を出さずに悶絶する俺

対してマリナは、俺に拒絶されたと思ったのか、表情がだんだん泣
き顔に変わっていく

「（俺が悪かった！！

兄ちゃんって呼んでいいから、泣かないでくれー！）

恐暴竜にしては情けない状況だが、女は泣かせるな……と、親父が
言つてたような気がしてたので、俺は慌ててマリナをあやした

あの親父のこと……黙つて守らなかつたら、感知して殴りに来そ
うだ

「グスッ……」めんな。

もつ馴れ馴れしきしない……でも、マコナの「こと嫌いにならないで？」

？」

「（もう兄ちゃんでいい！

好きに呼んで……いや、兄ちゃんって呼んでくれー！）

何かがおかしくなつてゐる気がするが、これ以上子犬のようなマリナを見ていたら、俺の理性が持たなくなる

プライドを捨てた俺の行動が功をそうじ、マコナは泣くのを止めた

俺は泣き止んでくれたマリナを見て安心する

涙を拭かずに笑顔を向けてきたため、マリナの目尻には涙が溜まり、それから綺麗な零となつて頬を伝つ

少女の放つ純真無垢な笑顔を見た直後、俺の胸は高鳴つた…

この胸の高鳴り、ときめき……これが《鯉》といつものか…！

《鯉》とは何か…

俺は前世でそれを確かめるために、雷オヤジ邸の池に忍び込んだ！
結果は惨敗！

《鯉》とやうを知る前に、雷オヤジの脅威を知つたぜ…

『鯉』とは魚であり、モンハンの世界でこうじゆの『春夜鯉』だな！！

「兄ちゃん、何一人でぶつっちゃってんの？変な風に見られるよ？」

「（ありや？

夢でも見てたのかな？）」

見れば、マリナの表情は元に戻り、さっき感じていたときめきもきれいサッパリ無くなっている

「（ん～、俺つて何言つてたんだ？）」

「兄ちゃんが知らないならマリナも知らないよ。」

俺は首を傾げていると、森の奥から雪を踏みしめる音が聞こえた
とつぞにその方角を見てみると、白い防寒着を着用した人間が数人
いた

人間は俺とマリナを見て驚き、手に持った農具を構えて叫ぶ

「マリナちゃん！！
そいつから離れるんだ！」

「（ヤバッ！！
とうとう見つかった！）」

俺の声を聞いた村人はさらに焦り、急いでマリナのそばに駆け寄った
そして村人はマリナをかばうように、俺と対峙する

「おじさん！？
なにしてるの！？」

「なにって…目の前のモンスターが見えないのか！？
それにコイツ…見たこともないモンスターだぞ！」

村人たちもいくらかモンスターを見てきたが、目の前の竜は飛竜種
とも牙獣種とも違う体つきをしている

飛竜のような翼は無いが、強靭な後ろ脚と水竜に匹敵する体躯…
して首のあたりまで裂けた大きな口と、そこに並ぶ凶悪な牙に村人
たちは戦慄する

村人たちは固まつて、俺はビリしていいか分からず動かないでいる

動いたものといえば、村人を押しのけて前に出るマリナだけだ

「全く…おじさん、兄ちゃんに迷惑かけないでよ。」

「マリナは恐れることなく俺の元に歩み寄り、首を撫でて危険でないことを見せ付ける

凶悪な竜に慣れ親しむマリナを見て、村人たちは驚きのあまり絶句する

「マ…マリナちゃん…さ、危険じゃないのかい！？」

「大丈夫だよ。

兄ちゃんはこっちから手を出さなければ、襲つてこないよ。」

マリナは俺の体を撫でながら語るが、モンスターが人間と…ましてや肉食獣と仲良くするなんて、村人たちは信じられないだろう

「え、そうなのかい？」
「つきり…マリナちゃんを食べようとしてたのかと。」

「兄ちゃんはポポ以外食べないから安心して！」

「わはははは！」

「マリナちゃんが言つなら、そつなんだろうなー！」

この村人たちはお人好しなのだろうか？

マリナが言つなら…って、どういう理由だよー？

目の前の俺に喰われるとか、ああマリナは頭がイカれてるんだ、とか思わないのか？

その他もうもあるが、マリナに睨まれてるのを止めた

そしてその後に聞いた言葉に、今度は俺が驚愕する

「マリナちゃんの友達なら、村人みんなの仲間だ！
よっしゃ、村に戻つて歓迎会だー！」

「良かったね、兄ちゃん！」

「今日から晴れてマリナのお友達だねー！」

マリナと村人は狼狽える俺を無理やり村へと引っ張っていく

「これは悪い夢だ…

モンスターがこんなに人間に受け入れられるはずがない！！

やはり俺は、村中のハンターにボコボコにされるんだ！！

クッ、なんでこうなった！？

そうだ、恐暴竜に転生させたあの偽神さまのせいだ！

神さまの大バカ野郎！！

アオアシラにやられちまえ！！

神「ブワックション！！
ちくしょう…。」

天使「ビウしたの、ちゃん。」

神「なんや知らんけど、めっちゃ腹立つわ。

ウチの噂しとるんは、誰や一体…つたぐ。」

天使「ちゃんも大変だね……あ。」

神「なんや…あ！？」
このボケアオアシラ！
なんでオドレが罠にはまんねん！
どつか行つとれや力ス！！
んなつ！？」

天使「ごめん、ジンオウガにやられちゃった。」

神「やられたって…三ノやないかい…！
どないな弱さやねん！」

天使「一回やられたのは ちゃんですよ！」

神「や、やかましい！
ウチは何回やられてもヒヒんやー！」

天使「うわっ…ズルいです！」

神「うつさい！」

オドレは隅でハチミツでも採集しとれや！」

今日も神さまと、愉快な仲間は平穏だった：

第十一話・俺ロコノハシヤナコニヨヘ（後書き）

更新遅れてしません

やつぱり主人公を適当に遊ばせとくのが、一番書きやすいですね

余談ですが……

神さまは上位ランクに上がれました

第十一話・恐暴竜の弟子？（前書き）

なんか……主人公がいい具合に変態化してゐる気が……

第十一話・恐暴竜の弟子？

「竜ちゃん、今度は「」ひちを頼むよ。」

「ギャウーー！」

麓の村から少し離れた位置にある針葉樹林

そこでは数人の村人が木を伐採し、それを手助けする巨大な竜がいた

死を覚悟して村に案内された俺だつたが、予想外に村人は俺を殺そ
うとはしなかつた

最初は俺を恐怖の眼差しで見ていたが、マリナの話を聞いて警戒
を解いてくれた

逆に俺は、そのお人好しな態度が怖かつた

俺が油断した隙に襲いかかってくるのでは…と、俺はいるはずのな
いハンターに怯えていたのだ

そんな俺の不安を一蹴してくれたのは、初めて会った人間のマリナ
だつた

マリナは俺を村に馴染ませようと、いろいろ画策してくれた

マリナの純粋さと村人たちの暖かい歓迎に、俺は少しづつ警戒を解
いていったのだ

人間に馴れた後は、ただ何もしないでいるのは癪なので、木々の伐採を手助けしている

太い木を一噛みでへし折り、何本もの木々を引っ張る俺は、村人からかなり頼られていた

ただし、いつまでもここにいるわけにはいかなかつた……

「（そろそろ潮時かな…。）」

最初は氣にとめてなかつたが、最近では深刻な事態となつていたそれは……捕食対象であるポポが激減したこと

理由は勿論、恐暴竜である俺の暴食が原因だ

俺の知性と理性が過激な捕食を防いでいるが、寒さでスタミナの減るこの地域では、否応無しに捕食回数が増えていた

1日に5頭、多い時には10頭以上も捕食する

ポポだけでなく、ガウシカやファンゴですらも捕食するが、腹を満たすには圧倒的に足りない

本来俺のような竜は、テリトリーを持たずに広い地域を移動し、同じ地域に長くいてはならなかつた

それは恐暴竜が食欲を満たすために捕食を続け、最悪の場合にはその地域の生物を絶滅させるからだ

幸いこの近くはまだ壊滅していないが、時間の問題だ

一度ふざけて村を離れ、捕食しなかつたらどうなるか試してみたが……あんな体験は一度とこめんだ

雪山の寒さが体力低下に拍車をかけ、数時間も経たないうち空腹感がおどずれる

それから全身に苦痛が襲つた

目は血走り、口からは強酸性の唾液が溢れる

半日もすれば意識朦朧の状態となつたため、俺は危険だと感じて急いで捕食した

あのまま日没まで捕食しなかつたら、理性が消え去り、田に映る全てを喰らいくつなく恐ろしい捕食者と化していただろう

これ以上止まつたら、村人ですら喰つてしまつかもしないそれに、俺の帰りを待つ猫たちのこともある……

俺の考え方通り……そろそろ潮時だつた

「ヒヒヒヒ！？」

村を出て、つちやうのーー？」

マリナは俺の言葉を聞いてとても驚いた

マリナよ、驚いたとはいえた口を開けて……その、可愛い顔が台無しだぞ？

今俺は村人の集まる広場について、対話するマリナと俺を、村人がぐるりと囲んでいる

ちなみに、俺の言葉が分かるのはマリナただけだ
ずいぶん都合のいいことだが、おそらくあの神さまが何かしたのだ
うう

「なんで！？」

せつかく仲良くなつたんだから、もつと一緒にこよひよー！」

そう言われても…ねえ？

村人たちに目を向けると、揃つて頷いてみせた

村人たちには前もって、身振り手振りで出て行きたい理由を告げていた
モンスターの身振りで理解するつて…都合の良すぎる話しだが、この際無視だ！

ポポは村人にとっても無くてはならない存在だ
ポポの毛皮・肉・牙は村人の衣食住に使われるためだ

俺がここに居座れば、どっちにしろ村に被害がくる

いくらマリナでも、そういうた事情はまだ分からない
マリナは村人たちに説得するよう頼むが、村人たちは皆難しい顔をする

村人たちも俺が出て行くことを望んでいないが、「村の存亡」とは引き換えられない

何より、これは俺が決めたことだ
誰にも止められない

村人たちで説得してもひらのを諦めたマリナは、涙眼になつて俺を見つめる

そんな田で見ないでくれ……これはマリナのためでもあるんだ

「一度と会えないわナジやないんだから心配すんなー！
ちゅうへい気ままに旅するだけだからさー。」

「ウソだ…。」

「（俺がウソついたことあるか？）」

「何回もある…。」

ガクッ　俺はずつこなそつこなるのを耐えた
マリナよ、そこは普通肯定するといふだね？

「兄ちゃんは外を旅して何をするの…？」

「（え～氣ままで、田的もなく、おもこついた行動のままに…かな
～。）

正確には観点のアイルーたちをけりながら、モモと一緒にだがな

「なら、マリナも兄ちゃんとつられて行く！」

「（なに……？）」

マリナのその言葉に、俺だけでなく村人たちも驚愕する
ただ一人、村人に混じるマリナの母親だけは、険しい表情をしていた

「（待て待て！）

なんでマリナまでついてくる話にならんの！？」

「せっかく仲良くなつた兄ちゃんと離れたくないから。」

クッ…なかなか嬉しいこと言つてくれるじゃないか

困つた俺は、村人の顔眺め回してマリナの母親を捜すが、母親の姿はなかつた

母親に何とかして言つぐるめて欲しかつたが、いなら無理だ
仕方ないな……

「（ダメだ、マリナは連れて行けない。）

「なんどよ、外を旅するくらいいいじゃない！」

「（ダメだーー）」

俺は今まで発したことがない、怒氣を含んだ声で怒鳴る
マリナは俺のただならぬ雰囲気に、開いていた口を閉じる

「（外を旅するくらい…？

外の世界は、そんな生ぬるい考えで生き残れる世界じゃないんだ。
弱ければ死に、強者のみが生きることを許される、弱肉強食の世界
だ。

この地では俺が一番強いかもしれないが、外には俺を超える強さの
化け物が腐る程いる！）」

マリナは俺を治療した時に見て、感じたはずだ
こんな強そうな、恐ろしい竜にこんな深手を負わせる存在がいるの
か…と

「（外にはお前が相手にしてきた、ギアノスやブラン）など靈むく
らい、遙かに強力なモンスターがいる。

仮にお前が無理やり付いて来たとしても、俺は自分の事で手一杯：
お前を助ける程の余裕はない。）」

俺はマリナに厳しい現実を叩きつける

幼い少女にはキツい言い方かもしけないが…

俺の目から見て、マリナが自然界に出て生き残れるとは到底思えない

強靭な体躯を持つモンスターならともかく、マリナは口クニ鍛えられていない華奢な少女だ
外に出たら真っ先に死ぬ

俺がここまで強く否定するのは、マリナに死んでほしくないからだ

マリナは何も言ひ返せず、黙つて俯く

「ここまで言えれば、マリナも考え方改めてくれるだろ？」

見てみると、やつきまでいなかつた母親も姿を見せた
後は、母親が娘に言い聞かせてくれるはずだ

母親はマリナのそばに歩み寄ると、そつと肩に手を触れる

「グスッ……ママ？」

「…あなたが外の世界に憧れるのは分かるわ。
だけど、外はマリナが思つてる以上に危険な場所なのよ？」

うさうん……むかしの昔はたれやくさん……

俺は母親の言葉に頷きながら、母親を心の中で応援する

「マリナが命を落とすのは、私も父さんも望んでいないわ。だから……」れを持つていきなさい。」

いこどもひとせ……なに?

俺が一瞬理解出来ないでいると、母親はマリナに何かを渡した
布に入つて分からぬが、それは細くとても長いものだ

「アマ・ミサ」

「父さんの形見よ。」

持つていれば、父さんも見守ってくれるわ。」

マリナは母親の顔を見上げた後、重く長いものを包む布をとる

現れたのは、身の丈を遥かに超える長さの武器

蒼い鞘に紫の帯が絡みつき、鞘から引き抜いた刃は銀色に煌めいていた

武器を見て驚く娘を満足げに見つめた後、母親は俺の方に近づいて来た

「せつかへ引き上げてくれたの……」「あなたさこね董ひやん。だけど、マリナはあなたたらもつぱりないのよ。」

「ガウッ…」

「反省するわ……だけど、無理を承知で頼みたいの。マリナを……父さんが見続けてきた世界に連れて行ってもらえないかしら？」

「いつまでもマリナのママをさせ、マリナが外に出ることを後押ししてくればいいのかなってただ

娘の後押しをする母親、感動ものだね……って違アアアーッ!!

なにせつちやつてんのママさん…?

言葉分からなくとも、今までの雰囲気で分かるでしょ!!? 俺はマリナに危険がないよ! って今まで止めたんだよ!!?

「ママ… ありがとう。

「父さんの武器があれば勇氣を持てるし、頑張れる氣がしてきた!」

いや……勇気を持たなくとも頑張らなくてもいいんだよ？
あれ……？

なにこの雰囲気？

いつの間にか村人たちは、抱き合ひ親子を囲んでいた
それはまるで、母親から旅立とうとするマリナを祝つかのような…
実際そうなのかもしない

マリナはそつと母親から離れると、なんとも晴れ晴れとした表情で
俺を見る

他の村人たちが、”頼んだぞ”とでもいいたげな視線を向けてくる

あら……？
ここにまたマリナを抱きしめたら、俺が悪者になるのは気のせいか…
…氣のせいじゃないな

さつき母親が言つた通りなら、断つてもマリナは無理やつついくて
るな

俺は盛大にため息をいじり、とつとう折れた

「（分かつたよ……選択間違えたら、寝覚めが悪くなる。
しゃあない、連れて行つてやるよ。）

途端にマリナは歓喜し、弾丸のよつて俺に抱きついてきた

抱きついてきたといつづつ体当たりで、俺の腹部を強烈に痛めつけた

「（ウググ……た、ただし条件があるぞ?
外では勝手な行動は控えること…

それから……三年間俺の元で修行し、強くなつてから自然界に出ることだー。）

腹の痛みに耐えて、何とか言葉を絞り出す

マコナを強くするところは、せはつマリナを死なせないため

自分のことで手一杯とこえ、何もしないでマリナを見捨てるほど
薄情ではない

せめて、マコナが一人でも戦えるくらいは強くしてみせる

「うんー兄ちゃんに強くしてもらえないなー、マリナはどんなハンターよりも強くなっちゃうからねー」

諦めた俺はマリナを不本意ながら引き取る

その日のうちにマリナは出立の準備を済ませる
マリナを乗せた俺は村人たちに見送られ、内心かなり後悔しながら
拠点へと旅立つ

「エヘヘ…楽しみだね、兄ちゃんー！」

マリナよ、俺はかなり鬱だぞ

背中でほしゃべマリナとは対照的に、俺は暗く沈んでいた

マリナに何かあったらどうしよう?

怪我をしたら、病気になつたら、いなくなつちやつたらいつてもつ?

マリナにむじしものことがあったらと思つと、俺の胃がキリキリ痛む

はあ……せめてハンターへりい強くなることを祈りつ

……ハンター？

悩む俺の頭に、一つひらめきがおどされた
現状を嘆くよりも、それをポジティブに考える

俺の背には幼い少女のマリナがいる

俺はロリコンじゃないが、マリナはかなり可愛いく思ひ……もう一度言つ、俺はロリコンじゃない！

三年も経てばいい女の子になるはず

そして俺が思い浮かべたハンターという存在……

俺の夢はユクモ村で美女と混浴風呂に入ること

これは俺が恐暴竜に転生したために、叶わなくなつた

もう一つはキリン装備のハンターちゃんといチャイチャヤすること

これもモンスターに転生したために挫折

人間ならまだしも、モンスターの俺がハンターちゃんの前に出たら、

十中八九戦闘開始だ

モンスターと仲良くできるハンターちゃんがいれば、と半ば挫折しかけていたが…

もひつかりのはずだ

背にいるマリナは俺に懷いてくれている

そして、マリナはハンターの素質がある…

つまり……マリナを育てて、キリン装備のハンターちゃんにすれば

いいんじゃね？

…という結論に至った

そう考えた俺は、先ほどまでの悩みが全て嘘のように消えた

夢が叶う……興奮した俺は、知らず知らず大地を疾走していた

いきなり走った俺に驚き、マリナは必死になつて俺にしがみつき、当然マリナの胸部が背にあたる

慣れ親しんだこのまな板も、数年もすれば立派なものになる

俺はこの貴重な体験を忘れないよう、堪能しながら大地を駆け抜け

ていつた……

神さま……最後にありがとう！

第十一話・恐暴竜の弟子?（後書き）

神「ふえっくしー！」

うう…なんや今度は悪寒がするわ。

そういや、あん時の青年は何してんやろな？

まさか、幼女たぶらかしてよからぬ企んでへんやろな？」

天使「あ、ちゃん！」

わたし、火竜の紅玉とれた！」

神「なんやとー?」

天使「あ、またとれた！
わたしついてるね！」

神「なんでやー?」

なんで毎回オドレばかりがとれんねん！
報酬にも無いわ！

ええい、もう一回付き合わんかいー!ー！」

無限ループ

第十二話・光陰矢の如し……？（前書き）

三年経つぢやいました（、　、　）

特訓風景書きたかつたけど、イビルジョー親父と同じになつそな
ので止めました

第十二話・光陰矢の如し……？

俺が転生してからはや五年が経つていた……

最初の一年を親父のスバルタ教育を受け、その後に強者が闊歩する大自然へと踏み出した

その後は、まあ……波に攫われるわ、見知らぬ場所に流れ着くわ、角竜にボコボコにされるわ……正直に言つて、良いことなど何一つ無かつた

そんな過酷な毎日を過ごしていた時、俺は天使に出逢つたんだ……

まだ年端もいかない少女だったが、未発達の胸が…ゲフンゲフン、整つた顔立ちと風になびく金髪が印象的な可愛らしい少女だ

少女は敵にボロボロにされた俺を健気に治療してくれた
俺は恩返しにと、少女の村で木こり仕事を手伝つていた

しかし、俺のとある事情で村にどざまることには出来なかつた

折角通り会えた少女と離れるのは辛いと思つたが、ここで思わず誤算が……

なんと、少女が村を出る俺に付いて来ると言ったのだ

少女を連れて行くか行かないかで、少々こじれがあつたがここでは割愛…

結果、少女は連れて行くことになった

…が、このまま自然界に連れて行つたら危険なので、少女が一人前になるまで育てることにしたのだ

少女が立派に育つたら一緒に風呂に… ゲフンゲフン、キリン装備にしてニヤンニヤ… ゴホンゴホン…

まあ、立派になつて欲しかつたな

住処に帰還した俺は、仲間の猫たちと再会し、新たな仲間となる少女を紹介した

人間が俺たちの住処に来たのは初めてだつたが、住人たちは少女を大歓迎した

少女も住処を気に入り、住人たちと仲良くなつたところで、俺による特訓が始まつた

少女は日頃から駆け回り、猛獣と戯れていたおかげか、類い希なる

運動能力を持っていた

瞬発力・俊敏性といったものが優れていたが、中でも持久力が最も優れていた

まるで強走薬でも飲んだかのように、どこまでも走り続ける体力を持つていた

俺は少女の才能に目を付け、素早さと豊富な体力を活かした戦闘法を教えこんだ

基礎体力がほとんど完成していたが、唯一筋力が劣っていたので、他の才能で補えるまでに成長させる

ある程度の力がついてから、武器の扱いや身のこなし方、更なる高みを目指す訓練をした

これら全ては、俺と実戦さながらに対峙しての特訓だった

世間一般のハンターが、どのように訓練をして狩人になるかは知らない

ただモンスターの俺と訓練する少女は、初心者ハンターが得られない経験を得ているはずだ

実戦に出て訓練することも可能だが、自然界のモンスターたちは、俺のように加減はしてくれない

武器を握ったばかりの初心者でも、モンスターは容赦なく襲い、殺す

俺は少女の成長力に合わせ、少しづつ力を上げていく

最初は緩やかだったのが、次第に速く、力強く、巧妙な動きへと…
…もちろん、少女がギリギリでかわせる力でだ

少女は、元々の素質に特訓による成長も相まって、メキメキと戦闘技術を上達させていったのだ…

『密林・とある湖の端』

フィールドの大部分がジャングルに覆われる密林
そして、そこにある大きな湖

湖と陸地の境界線には白い砂浜と、そこに打ち寄せる穏やかな波
砂浜には波を受けて餌を探す盾蟹の幼体、ヤオザミ

いつもの密林の風景だ

ただいつもと違うことといえば、砂浜から少し離れた位置に、桃毛
獣と物々しい人間が対峙していることだ

ピンク色の体毛と、頭にある極彩色の毛が印象的な桃毛獣は、全身傷だらけで荒々しく息をしている

対峙する人間は、橙と青の縞模様の防具に身を包み、背丈ほどの太刀を構えていた

桃毛獣とは対照的に、人間の息は乱れていなく、鋭い一つの眼光が桃毛獣を見据えていた

人間は背丈ほどもある太刀を、田横で水平に構え、右手は太刀の中腹に添えられていた

そのまま長い膠着が続いていたが、互いの間を一陣の風が吹き、人間の長い金髪がたなびいた

それと同時に、人間が地面が抉れる程の勢いで駆け出した

手負いの桃毛獣は一瞬ビクッとしたが、すぐに迎え撃つべく腕を振り上げる

それに対し人間は、背に付けていた面積の広い布を投げつけ、桃毛獣の視界を奪う

怒り状態の桃毛獣は、お構いなしに布ごと殴つたが感触はなく、人間の姿も無かつた

桃毛獣は急に消えた人間を捜そつとすると、下部から小さな笑い声が聞こえた

声を辿つて下を覗いた時、桃毛獣には銀色に輝く刃が見え、そしてそれが最期に見た光景だった

「（見事だ！なかなか良い太刀捌きだつたぞ！）」

恐暴竜こと俺は、豪快に笑いながら桃毛獣の傍らに立つ女性に近づく

「あ、兄ちゃん。
我ながらうつまくやれたと思つけど、大型モンスターはやっぱリタフ
だな。
まだまだ力不足だよ。」

「（そりか？

十分強いと思うけどな。

まあ、マリナは素早さと身のこなしを活かした方がいいのかもな。）

「

マリナはどうも腑に落ちない様子で、太刀を肩に担ぐ

雪山の村の元気娘は、この三年で見違える程の成長を遂げた

小さかつた身体は三年でスラッシュとした、無駄のない容姿へと変わった
髪も伸ばし、光沢のある金髪は背中まである

さらに俺との訓練のおかげで、戦闘技術も格段に上達した

最初は闇雲に武器を振り回していたのが、洗練された技巧的な太刀筋へと変わった
さらに力不足を素早さで補う中、マリナは我流の剣術を身に付けた
のだ

太刀の切れ味を活かした斬撃でなく、相手の弱点を的確に射抜く刺突技だ

マリナは天性の観察眼で、モンスターの甲殻の継ぎ目、骨の間などを見抜き、そこに強力な刺突技を叩き込む

無論、斬る・薙ぐといった剣技も扱えるが、一点集中の刺突技が最も強力だった

一対多には向かないが、集団で向かってくるのはほとんど小型の鳥竜種で、大抵一撃で仕留める

どこの”牙突”だよと思つかもしえないが……構えも攻撃もそれに近い

斎藤のソレに比べれば劣るかもしえないが、モンスターを相手にす

るには十分な威力だ

身体的にも技術的にも成長したマリナだが、一番変わったのは性格だと思つ

出合った時のマリナは、まだ子供っぽい所が多くあった。それが今では、一つ一つの言動がすっかり大人びている

そして何より……

「（狩りも終わったことだし、一緒に遊ぼうぜー。）」

「忙しいから無理、モモとでも遊んでなさい。」

結果を言うと……マリナはシンになりました

何時の頃からか分からぬが、マリナがシンシンし出したのだ

いやシン『テレ』とこうしゃつないよ！？

普段シンシンしてゐる、たまに『テレ』

そういうギャップがあるならまだしも……マリナはなかなか『テレ』してくれません

アイルーたちには天使のような微笑みを見せるのに、俺にはそんなものありません

あるとすれば、俺がマリナにハチミツをあげる時くらいです…

日中は特訓の日々で、それ以外の時間はエリア移動してるので会えず…

時間を見つけて会いに行けば…

「そんなに暇なの？」

たまには捕食以外に、畠仕事でもしたら？」

グスン……

遊びに行けば冷ややかな目つきでなじられる
違う意味で癖になり……とにかく、悲しいのだ！

「……兄ちゃん、なに涙浮かべてため息ついてるの?
トウガラシあげようか?」

慰めにトウガラシって……好きだから貰うけど

「最近の俺の野望は、混浴やキリン装備よりも、マリナの『テレ』を見てみたい!に変わったのだ

…ナビマリナの『テレ』を見るなど、天鱗や紅玉をとるくらいレアだ

ああ、悲しい……

重いため息をつく俺の横で、マコナは困ったように顔を歪める

「もう……そんなに落ち込まないでよ。

私がこの後色々やらないからなにこの分かるでしょ~」

マリナの村での立ち位置は、俺と同じ用心棒だが、狩り以外にも色々出来るマリナは、猫たちに混じって畠仕事を採取に行ったりする

俺がファイールドを駆け回って捕食している間、拠点の防衛をするのはマリナの役目だ

それは俺も分かっているが、たまには息抜きして遊びたいものだ：

「はあ……分かった。

やること終わつて時間があつたら、一緒に遊んであげるわよ。

「（マジで！？

ヤツタゼー！――（

俺は歓喜の叫び声をあげ、巨大な咆哮がジャングルを揺らす

「ああもつ、ウッサイ！！」

その代わり、今日こそ畠仕事を手伝いなさいよー！」

「（ア解ー！）」

ぶつちやけ、シンデレラの女の子なんて俺は見たことがない
なので、今まで何度もテレていたが、気づかなかつたのかもしれない

まあ、そんなことさせりでいいー！

マリナの仕事をせりやせりと終わらせて、心ゆくまで遊び廻らして
やるぜーー！

あ……腹減った

俺は無意識のうちに桃毛獣を喰つてしまい、マリナにひびくモモヘビも
られた……

第十二話・光陰矢の如し…？（後書き）

『マリナ・設定』

武器：鬼神斬破刀

* 通常の三分の一の長さ

* 親父さんの形見

防具：レツクス一式

* ティガは主人公と一緒に狩猟

* 防具は竜人族の翁が制作

* 下位装備

発動スキル

千里眼

食事

天賦のスキル

（防具無しでも発動）

ランナー

体術 + 2

見切り + 1

戦い方は、まんま”るろ剣”の斎藤

牙突は使わないが、突き技主体の攻撃
気刃斬りと気刃大回転斬りも使えるが、滅多に使わない

主人公が教育しなかつたら、絶対に罠と閃光玉でごり押ししてた人

異名

”無限ランナー”
”調合率0%”
”ドリンク忘れる人”
”ツンデレ?”

第十四話・軟弱者…（前書き）

マリナが絡むと、主人公がとんでもないことに…

第十四話・軟弱者ーー！

いつも、イビルジョーに転生した薄幸の青年こと”俺”です

いやほ、つちのマリナもずいぶん成長してくれましたよ
成長しちゃって、田のやつどうに困っちゃいますよ（笑）

三年で幼児体型からこんなにHロー……けしからん身体に育つち
つて

一度マリナが入浴中のスキについて胴装備を押借したら
推測だけにはあつたね、うん

俺の最終目標はキリン装備だけど、レックス装備もなかなか乙だと
感じてきた

ティガの牙とか甲殻でゴツい外観だけど、腰装備のすき間から引き
締まつた足が見えるんだ

あのちよっとだけ見えるってのが、最近は俺の感動だね……

「ハハ、兄ちゃんー！」

サボつてないで手伝いなさいよねー！」

「（あ、はこはーい。）」

マリナの一喝で俺は妄想で止めていた仕事を再開する
仕事を終わらせればすぐ遊べるため、俺は身体に縄で付けられた農
具を引っ張つていく

俺が通つたあの畠は農具で耕されていく
つゝ調子に乗つて疾走し、滅茶苦茶にしてしまつのは定番だ

今日はマリナの機嫌を損ねたらいけないので、比較的眞面目に畠仕
事をする

畠仕事を終えた俺は泥で汚れた体を洗おうと、湖へと向かつた
途中アフトノスが数匹いたので、全部仕留めて捕食する

体を洗い流し空腹を癒やした俺は、湖に半身浸かりながら空を見上
げる
日は真上に昇つてから少し傾いてるくらいなので、遊べる時間はま
だまだある

何じて遊ぼうか…俺がにやけていると、足に小さな刺激を感じた

下を覗いてみると、ちよつと蒼色の奇妙な頭部が現れる

「シャ——！」

「（お、水竜の坊主！
元気だったか？）」

人間の腰の位置くらいの水竜は、俺の声を聞いて嬉しそうに飛び跳ねる

俺の足にしがみつくコイツは、湖に棲んでいたらしい『水竜・ガノトトス』の子どもだ
物知りアイルーが言つこぼ、支流のどれから卵が運ばれ、この湖で産まれとのことだ

俺がこの水竜と出会ったのは、この拠点に来て数ヶ月くらいの時だ

水浴びしていた俺のもとにヒョ ハヒョ ハ近寄り、黙視してきたのだ
どうしていいか分からず見ていたら、何故か懐いてきた

食べても美味くなさそつなので、とりあえず面倒を見ることにした
のだ

ガノトースといつてもまだ子どもで、魚を食べていること以外、迷惑はない

俺もマリナも二年で随分成長したのに対し、この水竜は一回り大きくなつただけ

水竜の成長は遅いようだ

この水竜が大人になつたら俺よりも大きくなが、ここまで人懐っこいなら、多分問題ないだろう…

幼い水竜に軽く別れを告げ、俺は平野の小高い山へと向かっていく

「これにこれを入れて。

…あ、旦那さんニヤ！」

山の洞窟に入つていくと、なにやら巻しげな煙りを立ち上らせる鍋と、モモの元気そうな声が出迎える

「（おひ……といひで、何やつてんだ？）」

灰色の煙を出し小刻みに揺れる鍋を訝しげに見ると、モモはよくぞ聞いてくれた…とばかりに説明する

「ニヤハハハ！

この鍋は《オイラ製調合鍋》なのニヤー！

コイツがあれば、調合書・入門編だけで何でも作れるのニヤー！

”コンガ”みたいに馬鹿じやニヤければ、絶対に上手くこゝのニヤー！

ちなみに、今は”特産キノコキムチ”を調合中ニヤ。

「（良く分からぬけど、スゴい発明品なんだな？
といひで、マリナはどうだ？）」

「——ア……マツ姉はこいつもの部屋にこると毎日ニヤ。」

モモが指差したのは洞窟の一角、入り口を灰白色のカーテンで覆わ
れた場所だ

「（サンキュー。）

礼を言つと、モモは片手を挙げて答えた

「（お~い、マリナ?
準備出来たか?）」

俺はのそのそ部屋となる場所に歩いていき、のんきに呼びかける
すると、カーテンの奥からなにやら騒がしい音が聞こえる

「（マリナ！？）どうした、何かあったのか！？）」

「に、兄ちゃん！？」

今は入ってこないで！」

「（な、一体何があった！？

カンタロスでもいたのか！？）」

「と、とにかく入っちゃダメ！」

カーテンの奥からはいまだに、バタバタと駆け回る音がする
そういうえば先日、洞窟内でカンタロスが湧き出して、大騒動になった

虫嫌いのマリナは悲鳴をあげて逃げ回っていた…

カンタロスは俺と奇面族で排除したが、何匹か生き残って、それが
マリナの部屋に入りこんだのかもしれない

そう考えた俺は、急いでカーテンに頭を突っ込み、マリナの名を叫ぶ

「（マリナーー！

大丈夫k『着替え中に入つてくるな変態！..』 グヘアツー..?）

頭を突つ込んだ瞬間、鼻先にとんでもない衝撃と痛みが襲い、俺は後ろに吹つ飛び

吹つ飛んだ俺の身体は、部屋の前にいたモモの近くを転げた

「ニヤーーー？」

オイラの”特産キノコキムチ”がああー..!

旦那さん、何てことしてくれるのニヤアー..?』

モモは泣きべそかいて俺をポコポコ殴りつける

「（痛つ…一体何が？）」

ヨロヨロと立ち上がった俺は、まばたきしながら周囲を見回す

すると灰白色のカーテンが開き、マリナが現れる

……訂正、夜叉が現れた

夜叉じとマリナは、素晴らしい不機嫌そうな顔で、まるで聖帝や拳

王みたいなオーラを纏つて近づいてくる

俺の体を叩く感触が無くなつたところへ、モモは逃げたのだろう
う…

マリナさんは俺の目の前に立つと、左手で”鬼神斬破刀”を握り、
右手で俺の顎を掴む

「（ああ…マリナさん？
えと、怒った顔も綺麗ですね。
あの、お茶でもどうですか？）

「あつがとう…だけど、やの前にめぐることがあるの。」

そつと右手の力が強まり、俺の顎を力強く握りつぶすといつも

「（あのマリナさん？
とっても痛いんですけど。）
「痛くしてるもの。」「

苦悶を浮かべる俺に対し、マリナはお構いなしに力を加えていく

あれ…？

「こんなに力ありましたっけ？」

額を締め付けられるのは痛いんですが、それよりも左手の方が怖いです。」

あ、今太刀抜きました

「…何か言い残すことは？」

銀色の刃を地面と水平にし、鋭い先端で俺の額を貫くよう構えている
一度”牙突”を間近で見てみたって思つてたけど、何だろ？…
願いが叶つたのに、全然嬉しくないや！

「もう一度言いつ、言い残す言葉は？」

「（えっと……最後にマコナさんとお風呂に入りたいです。）」

「…………却下。」

「一人で…………避け。」

最後に凍てつくような声で呟き、地面を蹴つて左手の太刀を突き刺す

「それにしても……派手に壊したわね。」

俺は素直に反省し、シヨンとなる
今度からはノックをしようつ

マリナは呆れたようにため息をいじぼし、太刀を鞘におさめる

「全く……女の子の着替えを覗くなんて、信じられない。」

「（うう……）めん。

カンタロスがいるのかと思った……。（

「ふうん……許す。

けど、次はないからね。」

「冗談よ。」

「（は、はこへ。）」

俺が無理に頭を突っ込んだために、マリナの部屋はかなり荒れていた部屋を直すのに数時間かかるため、遊びの約束は吹き飛んでしまった

俺がしようぼくれてその場を立ち去りうつすると、マリナに尻尾をつかまれた

「これだけ壊されたんじゃ、部屋を直しても今日は眠れないじゃない……。

責任……とつてよね。」

ドキッとして振り返つてみたが、マリナはただ部屋を見据えているただ、少しだけ見えた頬は微かに赤みがかっていた

「猫ちゃんの寝床じゅ小さこから、兄ちゃんのところで寝るしかな
いじゃない！」

俺はその言葉に歓喜した

遊べなくなるのは残念だが、代わりにマリナと一緒に寝れる

まさにねがつたりかなつたりだ

「（やつたあ――嬉しこやマリナ――――
お前もなかなか可愛ことあるじやないか――）」

「かわい……つ――?
か、勘違いしないでよ――!

寝る場所がないから……仕方なくなんだからね――」

ああ、シントレットのは見たことがないけど、ソフアのサウスをこう
んだらうな

俺はマリナの貴重な一面を垣間見れたことを、満足していた

第十四話・軟弱者……（後書き）

主人公の変態ぶりがエスカレート中

でも次あたりからは、少しシリアスになる……かもです

第十五話・悪食の魔王（前書き）

更新するたびに皆様の「感想がどうぞ」私もついつい歓喜しています

さて、感想の中にありました《主人公がガキすゑる》ですが…
あれは主人公が、マリナを大好きに思っている描写です
ただ、やりすぎたことは反省しています

なので、今回は少し様変わりしました

気分直しに、やります…

第十五話・悪食の魔王

「……んん……。」

洞窟のすき間から差し込む朝日を顔に浴び、深い眠りから覚めるマリナ

寝ぼけ眼をこすり大きなあくびをして、じばじばのままボーッとする

「……兄ちゃん?」

いまだ醒めきらない様子で声を発する

しかし、マリナが呼び掛けた者の姿は周囲にいなかった

早朝の寒さから身を守るため、マリナは毛布をかぶりながら洞窟内を散策する

洞窟内のアイルーのほととじが就寝中で、奇面族も頭だけ出して地面に埋まっていた

ふいに地面を見てみると、割と新しい大きな足跡があり、洞窟の外まで続いていた

早起きのアイルーたちに挨拶をすまし、洞窟の外に出てみると……
昨日同様、モモが怪しげな鍋で何かしていた
脇にはトウガラシと、にが虫があつた

「おはよう、モモ。」

「……おはようつの二ーや。」

モモもまだ眠いのか、田を半開きにしてながら、棒で鍋をかき混ぜて
いる

「今朝は寒いの二ーや……。

ホットドリンクなの二ーや。

飲むといこ二ーや。」

モモは怪しい煙を出す鍋から液体をすくい、マリナ
に差し出す

差し出されたマリナを受け取り、口に含む

ホットドリンクがのどを通った途端、体がポカ。ポカと暖かくなり、
朝の寒さを感じなくなった

「兄ちゃんの姿見当たらぬいけど……ビリに行つたの?」

「今朝早くに、密林のある方角に向かつたの一ヤ。物凄い殺氣だつてたから……例の”アレ”一ヤ。」

モモは鍋をかき回すのを止め、鍋の中の液体を全て容器に流し込み、栓をした

調合の後片付けをするモモの横で、マコナはぼんやりと東に向がるジヤングルを眺めた

「…もうそんな時期か。
兄ちゃん…大丈夫かな?」

生い茂る草を踏み潰し、乱立する樹木をなぎ倒しながら駆け抜ける、

黒緑の巨大な竜

竜が通つた後にはなぎ倒された木々と、食い荒らされたモンスターの姿があつた…

今俺は、密林の木々を無惨に破壊しながら疾走している立ち止まろうに、自分の意思では止まれない

それから視界で動いたものがあれば、それがなんだろうと襲いかかり、凶悪な牙で噛み砕いて食ってきた

いくら喰つても俺の食欲はおさまらさうになく、獲物を探して広大な密林を徘徊していた

俺のこの本来の恐暴竜さながらの食欲は、今に始まったことではない最初にこの状態に陥つたのは、マリナと出会い、拠点に戻つた数ヶ月後だ

ある日俺は、今まで感じたこともない空腹感に目覚めた
おさえようもない空腹感と、肉に餓えた俺の肉体が突発的に動き、
身の回りの動物を喰いだしたのだ

幸い、その時はアイルーの住処ではなく、マリナもいなかつた
だが、雪山近くの森にいた動物たちは、全て喰い尽くしてしまった
のだ

それからといふもの、俺は年に何回かこの状態に陥り、その度にフィールドを徘徊し補食を繰り返してしまった

これは俺の推測だが、俺のこの破壊的な補食は今まで抑えてきた食欲のツケだ

人間だつた俺の理性が、恐暴竜本来の食欲は抑えられていたが、完全に消えていたわけではなく、体内に餓えが蓄積されていたのだ

それに加え、最近の俺は雪山などの寒いエリアに出掛ける
それが俺の餓えに拍車をかけ、何かの拍子に一気に解放されるのだ
と思う

貪欲な餓えに支配された俺は、日に付くもの全てを補食し、餓えが満たされるまで補食を繰り返すのだ…

どれくらい疾走しただろうか？

俺の通り道には食い散らかされた残骸があり、俺の口は喰つてきたものの血で染まっていた

だいぶ食欲はおさまってきたが、あと一つ何かを喰いたい気分だ

理性が戻ってきた俺は、もはや小型のモンスターなどには田もくれず、大きな獲物を狙つて徘徊していた

大きな獲物：つまりは、牙獣種や飛竜種といった大型で喰いがいのある獲物だ

といつても大型モンスターなど、そう簡単に見付かるものではない
最近では怪鳥や桃毛獣を補食していた
しかし、密林は他のエリアより頻繁に訪れるため、それらはほとんど逃げてしまった

大型の獲物を補食するには、密林のさらに奥にある《森丘》、《沼地》、《樹海》に赴かなければならぬ

そこまで何があるのか分からぬのと、たんに面倒くさいから行かないが…

どっちにしろ、恐暴竜の食欲な食欲が表面化してきた今は、生息範囲を広げるしかないだろう

先のことは後で考えるとして、今は食欲を満たすために大型モンスターを探すことにした…

密林を徘徊して数時間…

大型モンスターがなかなか見つからぬため、諦めて小型モンスターを補食しようとした時だつた…

突如密林の奥から竜の咆哮が響き渡る

俺はすぐさま大地を駆け抜け、声のしたエリアへと向かう

声の先には行く手を阻む大きな岩があつたが、俺はそれを体当たりで粉碎する
岩の向こうは開けた場所であり、その中央に俺が求めていたものがいた

深緑の甲殻と鱗に覆われ、皮膜のついた大きな一つの翼……恐暴竜
ほどではないが、脚力も発達している

見覚えあるその竜の名は《雌火竜・リオレイア》だ

雌火竜は岩を碎いて現れた俺を見て驚いたが、すぐに威嚇してきた

大型モンスター同士が自然界で接触する事態は、あまり多くはない
出会つたとしても、せいぜい縄張り争いになるだけ

威嚇しあい、噛みつきあい、体をぶつけ合つ
敗者は身を退き、勝者はその縄張りを獲得することができる

だが、雌火竜が対峙しているのは、縄張りを持たず広い範囲を徘徊し、動物全てを喰う恐暴竜……いわば、天敵に近い存在

本来の恐暴竜がいる地方なら、俺を見た瞬間逃げるだろうが、この地方では恐暴竜など初見の竜だ

俺なら普段は見逃すところだが、生憎今の俺には理性があまりないよつて、雌火竜を見た瞬間、俺は勢い良く突進していた

大口を開きながら突進する俺に、雌火竜は火球を放つて応戦する
何発かは外れたが、一発が開かれた口に当たり、中で激しく爆発した

雌火竜は勝機とばかりに向かってきたが、逆に大木のような尻尾に殴られ、横転した

すぐさま立ち上がって相手を睨む雌火竜だったが、異様な光景に動きを止めた

自分が相手していた竜の全身の筋肉が盛り上がっていた。何より目を引くのは、竜の身体に浮かび上がった無数の傷痕

それらは赤く光つており、傷によつては隆起した筋肉の影響で傷口が開き、鮮血が吹き出していた

そして竜は、雌火竜の何倍以上もの、木々が軋みだすほどの巨大な咆哮をあげた

自分が相手出来るような存在ではない。本能で察した雌火竜は飛び立とうとしたが、空中で脚に噛み付かれ、地面に叩き付けられた竜は地面で悶える雌火竜に対し、屈強な脚を上げ、雌火竜の翼を踏み潰す

激痛に悲鳴をあげるも、竜は容赦しない

竜は雌火竜の首に食らいつき、首をしなつて雌火竜の巨体を投げ飛ばした

雌火竜はほとんどの虫の息だつたが……竜は最後の攻撃をくわえる。飛竜自慢の翼を脚で押さえつけ、竜は大きく息を吸い込み、口内から赤黒いガス状のプレスを放つた

恐暴竜の龍属性プレスは、雌火竜を即死させた

竜は仕留めた雌火竜を、甲殻¹と噛み砕き、肉一つ残さず喰らいきつた

残つたものといえば、背と尻尾にある毒性の針だけだ

飛竜を補食して理性が戻つた俺は、自分が食い荒らした雌火竜を見る

もはや原型などなく、針のついた甲殻と、散らばつた鱗しかない

毎度この状態になると暴れまわつてしまつが、今回は今まで以上だ
つたな…

前にモモから聞いたことだが、俺のこの暴走は、近隣のアイルーや
人間たちには有名らしい

人間にもアイルーにも手を出さないから大丈夫だが、そんな俺に新
たな呼び名が出来たらしい

『悪食の魔王』

それが今の俺の呼び名だ

少しだけカツコイina、と満足しながら帰つていく俺だつた…

恐暴竜と雌火竜の闘いを見ていた者がいるともしらずに…

第十五話・悪食の恐王（後書き）

戦闘描写短い気もしますが…

現時点での主人公にとって、雌火竜は敵ではありません
対等に闘えるのは、大型の、

『ガノトトス』

『ディアブロス』

『グラビモス』

あとは『ティガレックス』と、

空を飛ぶ『リオレウス』くらいですね

『ラージャン』もいい勝負してくれそうですが、どう扱つていいか
分からないので未定…

それから、主人公の暴走っぷりですが、

食欲を理性で抑えていた反動という設定で、作者の勝手なオリジナ
ルです

恐暴竜が補食を我慢するのは若干無理があるので、時たま『暴食期
』として定期的に暴れさせたいです

第十五話・番外編（前書き）

いよいよお待ちかね、モンハンの主役の登場……ですね

それにしても、一回一話投稿キツい……

第十五話・番外編

私の名は『力ナメ』

ドンドルマの街である獵団の団長をつとめる、上位ハンターの人だ

獵団では主に後輩育成、ギルドから請ける依頼を組織的にこなしているのだ

私は今回、ハンター育成として一人の後輩を連れ、密林に来ていた

目標は怪鳥イヤンクック、後輩の腕を試すには良い相手で、私の後輩も危なつかしい場面があつたものの、なんとか勝利した

だが今……私たちはかなり危機的な状況に直面している

太刀を構えて睨む私、恐怖に体を震わせる新米の後輩……

そして目の前で対峙するのは……『陸の女王・リオレイア』

普段の私はソロでも雌火竜におくれはとらないのだが、怪鳥相手であまり物資を持って来なかつたのと、新米の後輩を守り抜くので力

を発揮できない

雌火竜の攻撃で後輩が負傷し、かくいう私もいくらか怪我をしている

雌火竜は今にも襲つてきそうな勢いで、私たちに威嚇する
緊張感による手汗で太刀の柄が滑るが、一瞬の隙も見せられない
非常用として閃光玉が一つあるが、確実に命中させなければならぬ
いため、今は使用できない

やがて痺れをきらした雌火竜が、大きな咆哮をあげる
密林の遠くまで響き渡るような咆哮だ

だがこちらとしては好都合…雌火竜が冷静さを欠いてくれれば、閃
光玉を命中させる隙が生まれる

私は太刀を背の鞘にしまつと、右手に閃光玉を持つ
後輩をいつでも連れていけるよう、左手で後輩の肩を抱いた

「イリス、私が閃光玉を投げたら直ぐに走るぞ。」

後輩は震えながらゆっくり頷いてくれた

思えばこの私も、初めてモンスターと対峙した時、同じように怯えていたものだ…

それが今では獵団の団長で、ギルド内でも上の位置にいるとはな…

こんな状況であるにも関わらず、ふと昔のことと思い出して笑みを浮かべていた

「せ…先輩？」

笑う私の顔を見たイリスが不安そうな声を出した
私は雌火竜に目を向けながら、肩を抱く力を強めた

次の瞬間、雌火竜が私たちに向けて突進してきた

私は冷静に対応し、ギリギリのところ…紙一重で突進をかわす

「イリス！！目を隠している！」

私は閃光玉の栓を抜き、雌火竜に向けて投げつけた
雌火竜が振り返った時に炸裂し、まばゆい閃光が放たれた

私は閃光玉が効いたかなど確認せず、後方に向かって走り出し、人が入れる洞穴に滑りこんだ

私はバツと背後の雌火竜を確認する

イリスも一緒になつて覗くが、私は彼女の頭を押さえる

どうやら閃光玉はしつかり命中したようで、雌火竜は足元が覚束なく、不自然な動きをしていた

雌火竜はやがて目を慣れさせていったが、私たちを完全に見失つた
いまだに安心出来ない状況ではあるが、私は窮地を脱したことで、
少し力が抜けてしまった

「…あう……すみません、先輩。
私のせいです。」

こんな状況に陥つたことを自分の所為だと思ったのか、イリスは泣きながら私に謝つてきた

雌火竜は未だ私たちを見つけていない 確認した私は、後輩に微笑みかけ、優しく撫でてやる

「お前の所為ではない……詳細を把握出来ていなかつた、私の責任だ。」

私を見上げるイリスの目は、涙で潤んでいた

それからイリスを抱き締めてやると、イリスは小さく震えながら、私の胸で泣いた

それにしてマズいな…

雌火竜はまだ私たちを捜しているようで、隠れていそうな場所を、手当たり次第に探っている

「クツ……やはり無理に頼んでも、”ヴラド”に協力を要請すべきだつたか？」

私が後悔の念にとらわれている時だった……

突如、視界の端にあつた岩が粉碎された

イリスはその大きな音に怯え、私の腕の中でビクッと震えた

私と雌火竜はほぼ同時に、異変のあつた方向に目を向ける

その先にいたのは、私がこれまで狩りをした中で、見たこともないモンスターだ

飛竜でも牙獣種でもないそのモンスターは、黒緑の巨体と裂けた大口を持っていた

私が呆気にとられていると、謎のモンスターは雌火竜を見るなり、草木を踏み潰しながら向かっていく

謎の竜が地を踏みしめることに、大地は揺れる

謎の竜は大口をこれでもかといつくらいに開き、雌火竜に食らいつくべく突進する

それに対し雌火竜はブレスで応戦し、三発放つたうちの一発が竜の大口に直撃し、大爆発を起こす

私は一瞬勝負が決まつたと思ったが、なんと雌火竜の方が、突然横に倒れた

何が起きたのか理解出来ないでいると、竜は片足をあげ、雌火竜の翼を踏み碎いた

雌火竜の悲鳴が密林にこだまするが、竜に喉笛を噛み付かれ、悲鳴は鈍い声に変わった

竜は喉笛に喰らいついたまま雌火竜を持ち上げ、後方の地面に叩きつける

私は今まで見たことがない、モンスター同士の闘いに、いつの間にか魅入ってしまった

首を噛まれ無理やり投げ飛ばされたことで、雌火竜の声帯は潰れ、首

の骨はへし折れたらしい

勝負は完全に決まつたが……竜はさらなる追撃を浴びせる

雌火竜の両翼を脚で踏み、大きく息を吸い込み……一気に吐き出した竜が吐き出した”ソレ”は一目でブレスと分かるが、そのブレスも私が初めて見るようなタイプだ

赤黒い稻妻を纏つたガス状のブレスは、雌火竜の身体に触れると、バチバチと音をたてる

そして謎の竜は、あらうつことか死んだ雌火竜に噛み付き、その肉を食い始めた

私はその光景を、息を飲んで見守つていた

大型モンスター同士が接触し、縄張り争いをするのは分かるが……喰うために襲うなんて、聞いたことがない

やがて雌火竜は残骸を残すのみとなり、謎の竜は満足げに雄叫びをあげ、密林の奥深くへと消えていった

謎の竜がいなくなつてしまはらく待つた後、私はイリスの手をひいて、洞穴から抜け出す

「えと、飛竜は一体どこへ？」

「突然他のモンスターが現れてな……この通りさ。」

私が示した先には、僅かな甲殻と鱗を残すのみとなつた、雌火竜だつたもの

雌火竜の凄惨な死体に、イリスは顔をしかめた

私たちは言葉を発さず、ただ雌火竜の残骸を眺めていた

そこで、私はあることに気が付いた

それは残された甲殻：

鱗が散らばっているのは、喰い荒らされたせいだと片付けられるが、甲殻の方は違つた：

残された甲殻には鋭く尖つた黒い棘があり、残骸にあるのは背中と尻尾の部分だ

雌火竜が有するこの棘は、猛毒を持つと知られている

棘に傷つけられれば、人間など数時間で死に至る

雌火竜は尻尾にあるこの棘を活用し、“サマーソルト”という尻尾攻撃をしてくる

雌火竜の強力な尻尾の一撃と猛毒で、直撃すれば大抵のハンターは死ぬ

雌火竜の毒針はもちろん大型モンスターにも有効で、こんな棘を喰おうものなら、たとえ巨大なモンスターでも命を落とすだろう

謎の竜は雌火竜を喰つたが、この棘の部分だけはキレイに残してあるこれは偶然などでは片付けられなく、あの謎の竜は、少なくとも

雌火竜の毒針を知っていた

そこから考えられるることは一つ

あの竜は”知能を有している”だ

私は雌火竜の残骸を残らずかき集め、持っていたレポート用紙にその時の様子を書き込む

竜の容姿、特徴、攻撃方法……そして、凶暴性を

私の名は”カナメ”：

ドンドルマのとある獵団の団長だ

広大な密林の奥深くで見たこの竜の存在を、一刻も早くギルドに伝えなければ：

第十五話・番外編（後書き）

なかなか良い描写が出来ない

力不足で分かり難かつたら、ごめんなさい…。

では、久々に神様ほのぼのモンハンプレイをどうぞ

神「ふう……やつと雷狼龍の碧玉とれた…。

一体…何頭めや？」

天使「15頭だね！」

ちゃん、よく頑張ったね！

碧玉とれるのはとっても珍しいよ！」

神「うつさいわボケ！」

碧玉8個もとつたオドレに言わると、むつちや腹立つわ…。

もつええ、お前なんか貼れやー！」

天使「はいはーい！
じゃあ、これでどう？」

神「どれどれ…………ん?
こんなクエスト、ウチは知らんでも？」

天使「実はこれ、ダウンロードクエストって言つのだ！」

神「だうんろーどくえすと?
何やねんソレ?」

天使「これは、カクカクシカジカ……なんだよー！」

神「へえ、おもうそやな！
よっしゃ、ウチもダウンロードしたるでー！」

後日…

神「お……アクセスポイント発見！－！」

早速やるか！

……なんや？

：パスワード？

知るかいな－！」

ええい、次や次－！」

移動
……

神「な、何でや！？
ど」もかしこも、パスワードだらけやん－！」

別に悪をするわけやないんやから、アクセスするべうこええやん（
泣）－！」

結局、神さまは天使ちゃんのお宅でダウンロードしましたとこ（笑）

第十六話：ニューフロンティア・その壱（前書き）

途中、主人公非道いかも

第十六話・「コーフロントニア・ヤの毒

どうも… マコナです

私の村での役目は、主に畠仕事と見回り、そして外敵への対処です。普段は兄ちゃんが外敵を返り討ちにするんですが、今朝起きたらいなかつたので、私が外敵に対処します

昨日は『暴食期』…とかいう、年に何回か暴れる畠でしたので、今畠は普通の捕食でしょう

今日の私の仕事は、盆地の湖に棲み着いたヤオザミの駆除です。湖は私たちも使うんですが、ヤオザミが巣くつて危ないため、私が出て向きました

ぶつちやけ、ヤオザミを湖に棲ませたのは兄ちゃんです

兄ちゃんが『蟹は美味しい!』とか言うから済々許可したんですが、いつの間にか増えてとんでもないことになりました

あのバカ兄のせいで、私が無駄な時間を過ごすんです(怒)

今日は數十匹ヤオザミを倒しました

その途中、湖にガノトトスに会つたんですが…

この子、私に懐かないんです！

私を見た瞬間、鳴くわ暴れるわ、水吐いてくるわ… 酷い田に会います

それが兄ちゃんには懐いてるんですから、腹が立ちます
いいんです… 私にはアイルーたちがいますから（泣）

時刻は昼前、そろそろ兄ちゃんも帰つてきつい頃です
そういうえば、兄ちゃんの相方のモモもいません

痺れをきらした私は、近くを通りかかったアイルーに聞いてみました…すると

「聞いてなかつたニヤ？

用心棒さんとモモは、新しい土地に行くとか言つて、東の方角に行つたのニヤ。

あ、それから伝言があるニヤ。」

マリナよ、俺はとある諸事情でモモと密林の奥、《沼地》と《樹海》をしてくる

最近のお前は俺を邪険にしていたが、しばらく離れれば…俺がいる
ありがたみが分かるだろう

つてなわけで、モモと小旅行行ってくるわ！
ワハハハハハ！！

「つむなわけ…」ヤー！？』

伝言を伝えたアイルーは、恐ろしい殺氣にあてられ、気絶した

「あの……腐れエエ 野郎！！！」

帰つてきたら××をハツ裂きにして、ヤオザミの餌にしてやる…！

ああー！

もう、あのF* k野郎！帰つたら、地獄が生ぬるく感じるくらい、
酷い目見させてやる…！」

マリナの口から放たれる、形容し難い罵声の数々：

普段では想像出来ない程汚れた言葉からは、マリナの激昂ぶりが
伺える……

主人公の運命やいかに！？

「(…………)」

「田那セカニ、ビリしたニヤー。」

「(なんか……凄まじい悪寒が。)」

モモを背にに乗せた俺は、何処からか届く恐ろしい殺意に、拳動不審になる

「氣のせこーやー！』

それよりも……田的めに着いたニヤー。』

モモの元氣過ぎる顔に、俺は思案する」とを止める

俺たちの前には陰気な湿気に覆われる、広大な沼地
降り続く雨により、空氣はじめじめしている
さうにタチの悪い」とこ、雨が止んだ夜には、毒沼が姿を現す

食料事情が切迫していなければ、決して訪れない場所だ

密林ほど獲物は多くないが、雪山や火山などよりは幾分マシだ

火山に行くのは極めて稀で、強力なモンスターも多い
砂漠については言わずもがな……雪山は体力消耗の方が多い
そのため消去法で密林にばかり行つていたが、獲物の減りが激しう
ぎた

そしてモモと話しあつた結果、密林の東の《沼地》、南東の《樹海》
、南の《森丘》を活動範囲とすることを決めた

沼地は下見程度で済まして、サッサと次の場所に行こうとしたのだが……

「ニヤーーー！」

ノヴァクリスタル、とれたのニヤーーー！」

「（俺は田水晶の原石がこんなに発掘したぞーーー）」

たまたま訪れた洞窟で大当たりしていた…

沼地を下見して次の場所へ向かうはずだったのだが、帰り道でモモ
がまだ見ていない洞窟を発見したのだ

洞窟に入つてみたら、採掘出来そうな場所を見つけ……モモがピッケル、俺が体当たりで採掘…後は見ての通りだ

ねじり鉢巻きをして一心不乱にピッケルを振るモモと、体当たりするたびに洞窟を揺らす俺……

周囲のイーオスたちは、面白そうに俺たちを眺めていた

俺とモモの前に置かれた、ゴツゴツとした出っ張りのある大きな袋中に入っているのは勿論、洞窟で採掘した鉱石の数々だ

俺とモモは洞窟にある採掘場所から…それこそ本来あつた鉱石を涸渴させるくらい、大量に採掘してやつた

後に来たハンターがいれば、根こそぎ鉱石を持つてかれた洞窟を見て嘆くはずだ

「こんだけあれば、村も活性化するのニヤー！
女の子にモテるのニヤー！」

俺は下心まる出しのモモは捨て置き、俺は足下に置かれた透き通るよつな鉱石を見つめる

ピュアクリスタル：

最後に渾身の一撃で壁を粉碎した時に、たまたま見つけた鉱石だ
感傷に浸る俺ではないが、このクリスタルはあまりにも美しかった
ので、マリナにプレゼントすることにした

鉱石に魅入っていると、俺の腹の虫が騒ぎ出した
採掘に夢中で捕食していなかつたので、かなりの飢餓感が襲つてきた
このままだとモモでさえも喰つてしまいそうだったので、俺は急いで洞窟を出て行つた

「ガアアアアアー！」
「…………ブヒィー！？」

きのこを探るモスの悲鳴が沼地に響き渡る
もちろん、恐暴竜である俺に襲われたためだ

最初のモスをくわえたまま、一匹、一匹と餌食にしていく。最終的には五匹のモスをくわえる形となる

モスたちはもがいて抜け出そうとするが、鋭い牙と強力な顎の力の

前では徒労にすぎない

モスの一匹が噛まれたことは別の刺激に、ひときわ大きな悲鳴をあげた

おそらく口の中で強酸性の唾液に触れたためだが、結果的にそれが自分たちの寿命を縮めることになった

捕食時で、一種の興奮状態になってる俺は、その叫びに刺激されるモスの柔らかい肉質は容易に牙を通す

そして鮮血を吹き出した後に丸飲みにされる

僅かではあるが、丸飲みにした方が腹持ちがいいので、俺は小さい獲物は丸飲みにしている

モス五匹を捕食しただけでは、俺の空腹は満たされない舌なめずりに周囲を見回すと、哀れなコンガが数体：

俺の視線を受けてビクッとしたが、すでに遅し
全て俺の糧となつた

腹を満たして戻った俺を迎えたのは、田を回してダウンしているモモだった

外傷は無さうなので、近くの水溜まりから水を汲み、浴びせかける

俺の唾液を含んだ……弱酸性の水を浴びて、モモは一発で飛び起きる

そして、騒ぎ出す……

「あの変な頭のデカいやツはなんなのニヤ！？」

ギヤーギヤー騒いで走り回って、変な液体吐いてたのニヤー！

それから

「

らちがあかないので、一回モモを落ち着かせ、改めて話しを聞く
まとめると…

俺の留守中に変な頭におかしな尻尾を持ち、ばかみたいに走り回つ
て毒液を吐く怪鳥…

力チカチ鳴らしたと思つたら光つて、そこから意識が無いらしい…

うん…十中八九アイツだね

モモが襲われて氣絶せられただけならまだ許せるが…

「ニヤ！？」

旦那さんが採掘したクリスタルが無いニヤ！！
きっとあのバカ鳥が盗んだに違いないのニヤー！！」

俺の抹殺リストに一匹追加された

逃亡者∨S追跡者

沼地を舞台にした、史上稀に見る逃走劇と追跡劇の始まりだ

第十六話・「コーフロンティア・ゼの壱（後編）」

次回、

狂走V/S恐暴

* 1Jの小説での怪鳥は、おふざけキャラになりつつ…

第十七話・熾烈苛烈激烈――毒沼狂走連盟――（前編）

ちよつとグダグダ？

第十七話・熾烈苛烈激烈！－毒沼狂走連盟！－

「（ハハ）あーーー！」

クリスタル返せ、この盗つ人野郎！…」

「グギヤーギヤー！」

日が落ちて雨が止み、沼地には新たに毒の沼氣を放つ毒沼が現れた
その毒沼に足を踏み入れるのも構いなしに、巨大な竜とそれより
小さな怪鳥が走り回っている

歩幅で負ける怪鳥だったが、それ以上に逃げ足は速く、疲れを知らない走りを見せる

大事な物を奪われて激昂した俺は、沼地のエリアを隈無く探し回った
相方のモモも、”ヤツ”にやられて大変ご立腹のご様子で、目をぎらつかせている

俺たちは沼地を駆け回り、エリアの境界をぶち壊しながら、怨敵を

探し求めた

そして沼地から離れた、俺の膝丈まである草が一面にあるエリアに、
”ヤツ”はいたのだ

体の表皮は灰色で、今まで見てきた表皮とは質感が違つて見える
何より、ヤツのへんなくちばしとおかしなトサカが目を引く

俺たちが探し回っていたお騒がせ者は”ゲリヨス”

驚異的な持久力を利用し、毒を吐き散らしながら走り回る怪鳥
そして光る鉱石を盗んでいく、迷惑極まりないバカ鳥だ

普通、ゲリヨスは他のモンスターに比べて臆病な個体で、自分より
格上が現れたら真っ先に逃げるはずだ

だが、俺たちが相対するゲリヨスは、怯えるどころかふてぶてしい
態度で挑発している

ゲリヨスのくちばしの間には、貢ぎ物のピュアクリスタルが輝いて
いた

そしてゲリヨスは、そのピュアクリスタルを飲み込んでしまった
正確には、喉の奥にしまったのだが、それを理解出来ない俺はブチ
切れて突撃した

「（死にやがれバカ鳥！）」

スカツ…ズドン…！

俺の渾身の一撃はいとも簡単にかわされ、勢いあまつた俺は、正面の岩に頭を激突させた

ゲリヨスはとても臆病であり、とても狡猾な怪鳥だ
閃光、窮地には逃げる、死んだふりからの騙し討ち……そして今や
つたような、相手をわざと突っ込ませて倒す方法だ

毒怪鳥は悠々と背後を振り返るが、一瞬にして余裕が消えた

「（やつてくれるじゃねえかバカ鳥めが！

ゴム皮剥いで、焼き鳥にして喰つてやる！…）」

ぶつかり合つて粉碎したのは岩、俺は額の薄皮が切れただけだ

ゲリヨスは焦つているのか、飛び跳ねながら後ずさつしていく

じわりじわりと、ゲリヨスを壁際に追い詰めていくと…

突然その場で暴れ出し、両翼を広げてくちばしとトーサ力を強く打ちつけて……俺の目の前で強烈な閃光を発した

至近距離で閃光を浴びて目が眩んだが、俺はひるまず攻撃するしかし目が見えないために闇雲になり、攻撃が当たった感触はない

そんな中で聞き取れたのは、俺のマヌケな姿を見て、楽しそうにはしゃぐゲリヨスの声だった

目がなおつたので、憎たらしい毒怪鳥を探す
毒怪鳥はすぐに見つかって、間合いから遠く離れた場所で、挑発するように飛び跳ねていた

毒怪鳥の行動に苛ついた俺は、大きく吠えて走り出す
ゲリヨスは再び楽しそうにはしゃぎだし、首を大袈裟に振り乱しながら、俺に負けない速さで逃げ出し……今に至るのだ

毒怪鳥が誇る”狂走エキス”

無限に等しい持久力を生み出すそのエキスのおかげで、ヤツは全速力で走り抜けていく

俺と毒怪鳥の速さは互角だが、スタミナの面ではヤツに劣る

全速力で走ることで距離を維持していたが、無限のスタミナの前では、徐々に距離を離れていく

そして距離が開くと毒怪鳥は立ち止まり、俺の方を向いて……挑発する

距離が縮まれば再び走り出す

そう、ヤツは俺相手に楽しんでいるのだ

毒怪鳥の苛立たしい行動に、俺の脳の血管がブチ切れそうだ
おまけに、怒りで膨張し過ぎた筋肉もブチ切れそうだ

それでも切れないのは、少しばかりの冷静さがあるためだ

ただ追いかけているだけではなく、さり気なく、慎重にヤツを狭い場所に追い詰めているのだ

沼地の地形は、昼間に練り歩いた敵に鮮明に記憶した

普通なら誘導されてくること気に付きそうだが、ヤツは俺をからかって楽しんでるため、全く気付いてないようだ

それにしても、ゼノまでヤツは走るのだらうか？

ふと疑問に思つてゐると、ゲリヨスがまた立ち止まつた
今度のは挑発のためではなく、角を曲がつたところで岩壁に遭遇したからだ

追い詰められて焦るかと思つたが、意外に、ヤツは冷静だった

じわりじわりと距離を縮める俺と、改造ピッケルを片手に黒い笑みを浮かべるモモ

「今こそ復讐の時——！」

「（観念しやがれ！）」

「ギョア——！」

いきり立つて襲い掛かる俺とモモ、しかし……

ズドーン——！

俺たちの攻撃はむなしく空振り、逆に俺たちが岩壁にぶつかるはめになつた

さつも当たつた岩と違い、しっかりとした岩壁はとても堅く、痛かつた

「（くそつ、あのバカ鳥どこに消えたんだ！？）」

「（グウウ…その手があつたか…。）」

「（グリョスはといづと……俺たちの頭上を羽ばたきながら、楽しそうにわめいていた

冷静さを欠いていたのは俺のほうだった
ヤツが飛べることなど容易く考えられる」とだ
しかも、ヤツは俺の企みにのつた上で、それを利用したのだ
「（うやうやしく、ヤツと俺とでは、ヤツの方が策士らしい）

ゲリョスは俺の後方に降り立つと、挑発してから再び逃げ出した
モモは脳天をぶつけて失神、目を回していく
最初から期待はしていなかつたが、ここからは俺だけでヤツを捕まえるようだ

開けた場所に出てから、ゲリヨスを見失ってしまった

足跡を探して見つけたいところだが、再び降り出した雨により、怪鳥の足跡など消えて無くなつた

ゲリヨスが隠れていそうな場所を探していると、カチカチと、あの忌々しい音が雨の中から聞こえた

音を辿つて振り返つた矢先に閃光が放たれたが、幸い離れていたために効果は無かつた

もしかしたら、わざと閃光を発して居場所を教えたのかもしれない
ゲリヨスいるのは高台の上、俺ではなかなか登れない位置にいた
絶対的優位な位置にいるのが嬉しいようで、勝ち誇つたようなたたずまいだ

それからまた挑発が始まるのだが、はつきりいつて慣れた

冷静さが戻つた俺の頭に、ゲリヨスを叩き落とす戦法が浮かぶ
単純な実力行使だが…

俺は口を大きく開き、何もかも吹き飛ばすような雄叫びをあげる

ヤツはビクつや、一瞬のスキが生じる

俺は下顎を地面に突き刺してえぐり、首を振りかぶって巨大な石を投げ飛ばす

えぐり取った岩石はきれいな放物線を描き、毒怪鳥に直撃した

強力な攻撃を受けた毒怪鳥は転倒し、そのまま氣絶したようだ

俺は勝利の余韻にひたった後、迂回してゲリヨスのいる高台へと回る
小柄なモモなら簡単に高台を登れるが、氣絶していく戦線離脱中の道しかない

迂回して通っている道も決して楽ではないが、団体のデカい俺には

「（まあ……まあ……こんな荒れた道、歩かせやがって！
ぶちのめしてやる……あれ？）」

苦労して登った高台には、毒怪鳥の灰色の姿は無い
違う高台に登ったのか　と不安に思つたが、その高台こなせつを投げた岩石の破片があつたので、ここでも立つてこらえつた

「ギャギャー…」

「（……あ…）」

あの憎たらしい金切り声が沼地に響く
高台の下、岩石も届かない安全圏にヤツはいやがつた

「（一休何だつてんだ！？
確かに仕留めたはずだぞ！）」

苛立ちのあまり声に出してしまつ
言つたことを理解したのか、ゲリヨスはうなずく

すると、ゲリヨスはさつきの場面を再現する
岩石にぶつかつてよろける様子、少し大袈裟な演技で倒れる

しばらくした後、ゲリヨスは何食わぬ顔で起き上がり、一声鳴く

なるほど、その手があつたか……つて、ふざけんなーーー！
絶妙な場面で”死んだふり”してんじゃねえよ！
もう、ぶっ殺す！！

激怒した俺は高台から一気に飛び降りる

超重量の巨体が着地した瞬間、大きな振動と風圧が生じる

怒りの赴くままに突撃するが、ゲリヨスは飽きたのか翼をはためか

せて飛翔する

距離は絶望的で、俺が半ばあきらめかけた時だつた…

ゲリョスの体が空中で不自然に止まり、いきなり地面に墜落した無理な体勢で落ちたために、ゲリョスは翼を痛めてしまい、じばらくは飛べない

何が起きたのか知らないが、俺はこの好奇を見逃さない
しかしゲリョスも負けてなく、すぐさま起き上がりて大量の毒液を吐き散らす

毒液は着弾した場所で噴水のように吹き出し、無数の毒の噴水が俺の接近を拒む

毒液が当たれば死ぬ危険があるため、岩石をえぐり出して砲弾のように放つ
一発だけでなく、連続して岩石を投げ飛ばす

さつきの岩石弾と違い、水平に放つために威力は比にならない
その岩石を、ゲリョスはなんとか横に跳んでかわしている

その膠着状態が続くかに思われた時、俺の頼れる相棒が現れた

「…オイラがここまで怒ったのは初めてニヤ…！」

旦那さん、頼んだニヤ…！」

ゲリヨスを倒す大役を託したモモは、ゲリヨスに向かって何かを投げつけた

キラキラと光るそれは”ライトクリスタル”
毒怪鳥は光るものを集める習性があるため、視界に映った鉱石に反応し、注意を逸らしてしまった

次の瞬間、高速で放たれた岩石弾が頭に直撃する
ゲリヨスはふらふらとよろめき、派手に転倒した
ピクピクと痙攣し、目を回してゐる様子から、今度こそ倒せたようだ
ゲリヨスの口から、盗まれたピュアクリスタルがこぼれ落ち、モモはそれを回収して俺の元にやってくる

「（良いアシストだつたぜ、相棒。）」

「ニヤハハハ！」

田那さんも良い攻撃してたのニヤーー！」

実際、モモのとつた行動は素晴らしいものだ
ゲリヨスの習性を見抜き、それを利用したのだから
もしかしたら、モモは洞察力が優れてるのかもしれない

「（バカ鳥叩き落としたのもお前の仕業だろ？

「一本ビツヒツしたんだ?」

「…」
「ヤ?」

「一体なんの?」
「ヤ?」

「オイラは那さんがあれ石投げ飛ばしてた時に避けつけたの?」
「」

「(え…ウソつくなよ。

「お前以外に誰がアイシを叩き落としたってんだ?」

しかしモモは首を横に振る
ビツヒツ本當に知らなにようだ

ビツも腑に落ちないが、ゲリョス追跡の疲労がビツと来たので、考
えるのを止めた

「(…疲れたから、今田のところは帰るか。)」

「やつした方がいい。」
「ヤ。

「運ぶ鉱石もたくさんある。」
「」

予定では森丘にも足を運ぶはずだったが、大量に採掘した鉱石があ
るので、今日のところは帰還だ
俺とモモは、走り回っていたびれた体に鞭を打ち、その場をあとに
したのだった……

竜と猫の消えた沼地の一角には、時折呻く毒怪鳥以外に何者の姿もない

しかし、毒怪鳥の呻き声に混じって、水をはじく音が沼地に小さくこだまする
地面の水溜まりに大きな波紋が広がるが、奇妙なことにそれを生み出す者の姿は見えない

やがて水をはじく音は止むが、水面に浮かぶ波紋はまだ存在した
しばらくすると、何も無かつたはずの場所に、謎の輪郭が浮かび上がる
次第に鮮明になっていき、その姿が露わになる

目を、ギョロ、ギョロと動かすが、目は左右別々の動きを見せる
その目は、竜と猫が消えた場所に向けられた

しばらく見つめた後、長い舌で眼球を舐め、視線を戻した

そして体を揺らしながら歩き出し、現れた時と同じように、徐々に風景に溶け込んでいった…

第十七話・熾烈苛烈激烈！－毒沼狂走連盟－－（後書き）

天使「ねえ、ちゃん。
ちょっと手伝ってくれないかな？」

神「なんや、自分からお願ひなんて珍しいやないか。
よつしゃ、手伝つたるわ。

ほんて、クエストはなんやねん？」

天使「えへへ、火山の素材ツア－なんだけどね。
お守りとりに行きたいの。」

神「はあ？
お守りなんぞどうでもええやないかい。
んなことより、ハチミツ集めてた方がええわ。」

天使「ちゃん、お守りバカにしちゃいけないよ？
お守りの質が強さを左右すると言つても過言ではないのだ！
見たまえ、これが私がとつたお守りだよ。」

神「どれどれ……。
剣術 + 5 に罠師 + 8 ……しかもストックが一つやと…?
待て待て、ウチこんな高性能なお守り持つてへんで…?」

天使「ちゃんあまり採掘行かないもんね。
だから、一緒に行こ?」

神「よっしゃ!!

なんや燃えてきたで!!
待つてうやお守り!!」

天使（…単純。）

第十八話：マリナ街を行く N o . i (前書き)

バトル無し

これからしばらく主人公は空氣と化します

ただマリナが暴走します W W

第十八話：マリナ街を行く N.O.・I

沼地で一騒動やらかした俺たちは、深夜遅くに住処へと帰ってきた
久しぶりに激走したのと、帰り道に補食したことで猛烈な睡魔に襲
われたので、俺はサッサとあなぐらにこもって横たわる
マリナにプレゼントを渡しておきたかったが、睡眠欲に負けたので、
明日渡すことにした

俺の睡眠時間は短い

どれだけ疲労がたまつていようが、眠りについてから数時間で起床
する

理由はよく分からぬが、危機管理と異常な食欲がそつさせている
のだろう

今日は深夜遅くに寝たために、明け方に起床した

といつても、他の者と時間を合わせるために、いつも深夜に就寝し
ているので、いつもと変わらない

習慣化した朝の水浴びをするため、俺はあなぐらを抜ける
そして……地面が抜けて、俺の半身が埋もれた

突然の出来事にパニック状態になつていると、首筋に冷たいものが
触れる

恐る恐る田をそちらに向けてみると……なんといか、無表情の能面のよひなマリナがいた

手にしているのは”鬼神斬破刀”、切れ味は良いし付加した属性は俺が苦手とするもの

手が滑つて首を斬られでもしたら、笑い事では済まない事態になる

「冗談だとしても許し難い行いだが、マリナのあまりにも怖すぎる無表情を前にして、俺の怒りの炎も小さな火種と化す

「兄ちゃんが勝手に連れて来た蟹を片付けて戻つたら…ふざけた伝言残してくれただじゃない。」

声にまでその様子が現れていたが、その奥には身も凍り付くような憤怒と憎悪が感じられる

恐怖で声を発せられずにはいると、首にあたる太刀の力が強まる

「（ま、待て！）プレゼントだ！

マリナにあげる贈り物を探すために、ちょっと出掛けたんだ！

伝言は…ちょっとした冗談だ！

たちのわるい冗談だと思つて、笑い飛ばしてやつてくれよー（・）

すると、マリナはニッコリと笑ってくれた

マリナの表情がほこりんだのを見て安堵するが

「笑ったよ…気がすんだ?

もひ思ひ残すことはないよね?」

「（ストップ！…待て、待てだ！…

プレゼントがあるんだ、死んだら渡せないだろ！…）「

俺の最後の弁明を聞き、マリナは首にあてる太刀を離す

「（モモが持つてゐるから、アイツのとこに行かなきや…）

穴から抜け出そうとする、太刀を向けられ制される
どうやら、逃がしてはくれないようだ

マリナはたまたま近くを通ったアイルーに、モモを呼んでくるよう
に頼む

しばらくして、上機嫌のモモが堂々とやって来る

モモが上機嫌なのはいつものことだが、この状況で見るとかなりイ
ラつく

そればかりか、モモは俺のこの姿を見て、腹を抱えて笑い転げた

うん…死刑確定だ

落ち着いたモモに、プレゼントの”ピュアクリスタル”のことを話すと、とんでもないことを言つた

「鉱石は竜人のじいさんに全部あげたのニヤ。
ピュアクリスタルは特にスゴいと言つて、すぐ使つた氣がしたニヤ。

」

「（なにやつてんだお前…！

アレはプレゼント用だぞバカ野郎……）」

「プレゼント用なんて、一言も聞いてないニヤ。

オイラは悪くないニヤ。

そういうわけで……バイバイなのニヤ。」

モモはまるで逃げるように立ち去つていった

ヤツは火山の火口に縛り付けて放置する刑に決まりだ

だが、失態を犯した相棒の処遇よりも、この怒れる夜叉の方が大事だ

なんとか弁明しようとするが、マリナは呆れたような、可哀想なヤツを見る目で俺を見下ろす

少し喜ばしいことに、下から見上げる形となるために、マリナのきわどい部分が見えてしまつた

おもてに出れないよう興奮していると、マリナは大きなため息をつく

それから踵を返し、なにやら荷物の入ったポーチを手にする

「（ど、どこか行くのか？）」

「リリを出で、ドンドルマの街に行く。」

マリナはなんでもなきひに言つたが、俺には大きな衝撃だった

「（んなつ！？家出か！？

ダメだぞ、街にはお前に手を出す不貞な輩が大勢いるぞ！）」

「家出じゃないよ…猫ちゃんたちに頼まれたから、私が買い出した
行つてくるの。」

なるほどそれなら安心…じゃない！

街に行くまでには、危険なモンスターが大勢だ！

怪鳥や桃毛獣なんか比ではない、恐ろしい飛竜がいるぞ！

俺はマリナに、外界に行く危険性を話してみせる

ここいら一帯は俺のテリトリーなので、あまりにも危険といつモンスターはない

しかし、街に行く道はおそらく縄張りの外、どんなモンスターがい

るか分かったものではない

「「」」

だけど移動手段は馬車だから問題ないわ。」

マリナは実家の村に戻り、そこからポツケ村に向かつて、そこから街に向かつたための馬車に乗るとのこと

「少し離れれば、私のありがたみも分かる……でしょ？
ところ」と、さよなら。

「（ま、待てえ！）

せめて……せめて穴から出してくれえ……（）」

立ち去るマリナの背に向かつて叫ぶが、俺の声は聞き入れられなかつた

「はあ……なんか無駄に疲れたわ。」

後ろで兄ちゃんが何かわめき散らしてゐる氣があるナビ、たぶん氣のせいよね

荷物の入ったポーチを肩にさげた私は、ため息をしきつこぼしながら洞窟の外に出る

毎度恒例ながら、洞窟の入り口には鍋で何かを調合するモモがいる
”私も調合上手くなりたいな”と思つていると、モモが私に気付く

「田那さんには悪いことしてしまったのニヤ。
プレゼント用だと分からなくて、じこさんにおあげてしまつたニヤ。」

言葉とは裏腹に、全く反省している素振りは無い
それから、兄ちゃんが私にあげるはずだつたプレゼントについて話
してくれた

沼地で体を張つてクリスタルを見つけたこと
毒怪鳥に盗まれたクリスタルを、私のために必死で取り返したこと

モモの話しを聞いた私は、自然と笑みを浮かべていた

あの急け者で馬鹿で間抜けで、後先考えないで行動する阿呆が、そ
んなにも真面目になれるんだ…

モモの愚痴、兄ちゃんの一連の行動も許したくなつてしまつ

「…似合わないことして。

ねえモモ…兄ちゃんに、伝えといいてくれない?

わっさは怒つて「めんなさいって。

帰つてきたら、疲れて動けなくなるへりこ、たくさん遊んであがる
し、一緒に寝てあげる……ってね。」

「分かつたニヤー！

早速伝えてくるのニヤー！」

モモはわいつぱうと、鍋を放り投げて洞窟に走つて行った

別に今までなくてここの元…

「（トメハ、モモー！

何じに来やがつたー！）

「マリナ姉から伝わったニヤ。

怒つて「めんなさいって」と。ちで

「（はは…マリナが許してくれたのか。）

「それと、帰つてきたら…。

一緒に寝てあげるって言つてたのニヤ。

疲れて動けなくなるまで遊んであげるってニヤ。」

「（んなつー？
マリナが…そんなことをー？
一緒に…寝る？

疲れ果てるまで……遊ぶ……グハアッ！－（ ）

「……なんか、ものすごいことになつてゐる気が……。

フウ……氣のせいよね。」

嫌な感じがするが、私はそれを氣のせいだと片付け、実家のある雪山へと向かう
歩いていつても構わないが、鍛錬代わりに村まで走つて行くことにした

村を出て三年経つが、実は年に数回帰郷している
帰郷するたびに私の成長過程が分かるため、村人たちは自分のこと
のようにはしゃぐのだ

あと同年代の男たちが寄つてくるが、外の土産でも期待してるので
らうか？

休まず走りつけたおかげで、昼前には村へと到着
前もつて来ることを伝えていたので、村人たちは驚くことなく迎え
てくれた

それからママにお昼ごはんを誘われたので、「馳走になつた
久しぶりのママの料理はとても美味しかつた

ポツケ村からドンドルマに向かう馬車の時間は正午
時間に余裕はあるが、慌てて駆け込むのはイヤなので、村を発つこととした

村を発つことを聞いた男たちは残念そうな顔をした

ついて来られても面倒なので、私は青年の一人の手をとり、燃えないゴミを渡す

燃えないゴミを受け取った青年は歓喜したが、すぐに他の男たちにボコボコにされた

みんな燃えないゴミが欲しかったのだろうか？

不思議に思いながらも、関わり合いになりたくないので、サッサとポツケ村への道を進む

ポツケ村には、幼少期の頃一度訪れたことがある

訪れた時には大きな印象も無かつたが、当時珍しい存在だった”轟竜・ティガレックス”雪山に現れ、それを討伐したのがポツケ村のハンターということで、はつきりと覚えている

それからポツケ村にハンターが集まり、結果として私の村も安全圏に入っているというわけだ

ポツケ村と私の村は似たような雰囲気なので、特に驚くようなことは無い

露天や工房を横目で眺めながら、私は馬車のある所へと向かう

雪山の村では異彩を放つ黒い馬車に近付き、操縦するアイルーに挨拶を済ませて馬車に乗り込む

しばらく馬車の中から外を眺めていると、二人のハンター風の女性が乗車し、ゆっくりと馬車が動き出した
どうやら、ポツケ村からドンドルマに行くのは、この三人だけのようだ……

「ま、待ってくれえ～！！」

訂正、遅刻者一名

停車した馬車に、息を乱れさせた一人の若者が乗車してきた
年齢はたぶん私に近い、身なりを見るかぎりハンターのようだ
といつてもこの若さなら、新米ハンターだろう

先に乗車していた女性の一人が、若者に”大丈夫か”と声をかけて
いる
もう一人の大人びた女性は、私と同じく若者に興味を示さず、手に持つ資料を眺めていた

ここに三についての身なりを紹介したい

遅れて乗車した青年は”チエーン一式”に片手剣の”ハンターカリングガ”という装備で、損傷の無いあたり実戦はまだ経験してなさそ

うだ

次に青年と話す少女

彼女は”ハンター一式”で、青年と同じく片手剣の”ボーンククリ”だ

装備にいくつか損傷が見受けられるが、傷は少ないために実戦経験は浅い

最後に大人びた女性についてだが、彼女の装備は私が知らない防具だ

防具は綺麗な蒼色で額に鉢金を付けている

武器は私と同じ太刀だが、それも初めて見るものだ

防具の損傷は少女よりも少なかつたが、実戦経験の少なさのためにはない

無意味に攻撃を受けずモンスターを倒してきた、本当の強者なのだ
るう

他一人はどうでもいいが、彼女には興味が湧く

それと同性の私が言うのもどうかとは思うが、彼女のその裏とした佇まいはとても美しく、魅力的だった

「どうか…いたしましたかな？」

無意識に彼女を直視してしまっていたようで、彼女は資料を見るのを止め、私に声をかけてきた

「あ……いえ、アナタがとても綺麗でしたので……って、私は何を！？」

「いきなり声をかけられたために、焦つてどんなでもない」と言つてしまつた

恥ずかしさに顔を赤らめていると、彼女は私に優しく微笑みかける

彼女の優しげな笑顔に魅入つてしまい、私は恥じらい以外の理由で赤面した

「ふふ……お褒めいただき、光栄に思います。
そうおっしゃる貴女も、とてもお美しいですよ。」

「は……はわわ……美しいだなんて、そんな！」

彼女の褒め言葉と凜々しい口調に、私は頬に手を当て身悶える

いけない！！

彼女は女性……ときめくなんていけないわ！！

で、でも……愛に性別は……

ああ、兄ちゃん！

私はどうしたらいいのよ…

私が危険な妄想しているとは知らず、彼女はクスクスと楽しそうに笑う

「貴女はなかなか面白い御方ですね。

名を名乗らせてもらつてもよろしいですか？」

「は……ひゃいーー！」

あつら……噛んじゃつたよ

言葉を噛んだ私に対し、彼女はやはりクスクスと小さく笑う

「本当に面白い御方ですね。

私はドンドルマである獵団の団長を務める”カナメ”と申します。

「は、はいーー！
あの……えと、わ私はーー！」

「ハハ、落ち着いてお話しなされ。」

「はーー！
えと……私は、マリナと申します！
よ、よろしくお願いしますー！」

緊張で半ばパニックにおちいりながら、私は彼女に自己紹介を済ま

せる

彼女が微笑みながら手を差し出してきたので、私は慌てて握り返す
カナメさんのすべすべした肌に感嘆の声をこぼすと、彼女は再び微笑む

「これも何かの縁、以後お見知りおきを…マリナ殿。」

「は…はい！
よろしくお願ひします！
カナメ様！」

「うむ……ですが、様とはどういふことですかな？」
「カナメ様は運命のお方です！
ですので、カナメ様と呼ばせてください！」

期待に胸を輝かせる私に、カナメさん…カナメ様は困ったように苦笑する

美人は喜怒哀楽全ての表情が美しい
カナメ様の困った表情も、私にはとても美しく見えました！

恋は盲目とはよく言ったものだ

人生において初のときめきを抱いた相手は、まさかの同性

それから私は、ドンドルマへと到着するまで、カナメ様にベッタリでした

他二人は啞然としてたけど、カナメ様に愛でてもらえるなら構いません

はう……カナメ様のお肌、すべすべでとっても柔らかいです

第十八話：マリナ街を行く N.O.・I (後書き)

『力ナメ・設定』

武器

龍刀【朧火】

防具

稟・皇一式

発動スキル

？？？

知る人ぞ知る、ドンドルマの大きな猟団を率いるかなりの実力者

街でのハンターでは上位に位置する実力を持つが、決してかなわないというハンターが一人いる

面倒見の良い頼れる姉御

マリナは執心だが、同性愛者ではない

第十九話：マリナ街を行く N.O.・2（前書き）

相変わらずバトル無し…
しまじく無し…

ドンドルマ編が長くなつたうなので、サブタイトル変わりました

スミマセン…

自分の無計画さに呆れています

第十九話：マリナ街を行く N o . 2

カナメ s.i.d.e

はて…この状況は如何なるものか？

私の右腕を抱き締め、うつとつとした表情で甘い喘ぎを零す少女がいる
かれこれ数時間、このなんとも言えない状態が続いている
別に悪い気はしないのだが……この娘の…私を見る目が、何やら危
ない気がするのだ

「…………私は一体どうすればよいのだ？」

カナメ s.i.d.e out

馬車に揺られる」と数日…

ドンドルマに向かう馬車は、途中ある村に何度も停車して休憩、新
たな乗客を乗せて出発を繰り返していた
もっとも、馬車内のマリナの様子を見て、大抵の乗客はひきつった
顔で立ち去っていく

ドンドルマの街にはもうすぐ着く

「マリナは下車する準備を済ませた後、愛しのカナメに抱き付くのだった……

「ところでマリナ殿は……街で何をなさるおつもりで？」

「市場で色々お買い物したいと思つてます。

村に配達してもう必要がありますから……時間がかかりそうです。」

「ほう……マリナ殿は村のために都市部まで来られるのですか。感心いたしますな。」

そう言つと、カナメ様は私の髪を優しく撫でてくれました

私は彼女の包容力のある、優しげな愛撫……コホン

彼女に撫でられると、ビニカ落ち着きます

「カナメ様は、街に帰つたら向をするんですか？」

私はちよつといたゞらっぽく上田で見つめましたが、逆にカナメ様の真つ直ぐな瞳に見つめ返されてしまい、恥ずかしくなつて顔を背けてしまいました

カナメ様反則です……そしてとても美しいです

「私はギルドに向かい、いろいろと報告しなければなりません。おそらくその後に何かしらあるでしょうから、休みはあまりとれないとでしょうね。」

苦笑いを浮かべながら窓の外を眺めるカナメ
その顔には、これから街で行わなければならぬ、数々の仕事への
憂いをおびていた

彼女も苦労人なのだろう

「お時間がありましたら、一緒に街を歩きたいと思ってましたが…仕事なら仕方ありませんね。」

「最近では外界に出てハンター業に勤しむ者ばかりでしてね…いや、元気があつてよろしいのですが…執務をこなす者がいない分、私の方に回ってくるのですよ。」

一人有能な方がいますが、諸事情で手を貸してくれません。」

「む…ならその者を私がぶつ飛ばしてきます…!
カナメ様の助けなら、喜んでやりやがれ!
…ハ、すみません!」

興奮し過ぎたマリナは、自分の口から出た乱暴な言葉に気付き、慌てて陳謝した
幸い、カナメは特に気にしてはいなかつた

「マリナ殿も元気があつて良いですな。
ですが、彼に手を出すのは止めておきなさい。
街のハンター全てが認める、歴戦の狩人ですから。」

「歴戦の狩人……そんなに強い人なのですか？」

「ええ……私など小さくみえるくらいです。

ギルドでも手に負えないモンスターが現れれば、ギルドが彼に直接依頼するくらいですから。

十年前に古龍が襲来してきましたが、事実上、彼が一人で撃退させました。」

古龍がいかに強大な存在かは、遭遇したことのないマリナでも熟知している

それを一人で撃退するなど、にわかに信じられない

カナメの話しへは他にもハンターがいたそうだが、強大な古龍に対してもなすすべもなかつたらしい

人々が諦めていく中、その英雄が現れて、死闘の末撃退したらしい最後にはお互い満身創痍だったが、カナメが言つには撃退させた英雄の勝利だという

「その……その人の名前はなんですか？」

珍しく真剣そうな表情で尋ねるマリナ
カナメもその真剣さを認め、ゆっくり頷いた

「彼の名は”ヴラード・ウルバヌス”…。

又の名を”異名殺しの英雄”…。
モンスターに付けられた二つの名が、靈む程の勇猛さを誇るが由縁です。」

「異名殺し…ですか。」

マリナはまだ見ぬ狩人の姿を想像し、身震いする

兄ちゃんと呼び慕う恐暴竜の元では、一番目に強いと自負していた
しかし外界に出てみれば、自分よりも遙かに強いカナメに出会った
そしてそれとも超えるハンターがいるということではないか

マリナは「」に来て、自分が井の中の蛙の一匹だったということを
知った

しかしまりなが震えたのは畏怖のためでなく、強者を前にする武者
震いだつた

今の自分は未熟だった、それを知れただけでも大きな収穫だ自然界
で生き抜くためには今以上に強くならなければならない

それがひいては、兄ちゃんのためである

自分が自然界に出て「」まで成長出来たのは兄ちゃんのおかげであ
り、彼のために自分が一人前になつた姿を見せたい
兄ちゃんの足手まといにならないためにも、自分はもっと強くなり
たい

ではどうあるか？

簡単だ

目の前にこんなにも、経験豊かな先輩がいるのだから、教えを乞えればいい

勝利を得るために手段を選ばず、強くなりたければ教えを乞え…

…兄ちゃんの教える一つだ

悪い兄ちゃん…帰つてくるの、時間がかかりそうだよ
だけど我慢してね？

立派に一人前になれたら、真っ先に兄ちゃんに会いにいくから…

私はかたく決心した

兄ちゃんの力になれるよう、強くなることを…

窓からは見える先には、ドンドルマの街が見える

新米ハンター一人がはしゃぎ声を発する

道中やかましい彼らだが、この時ばかりは彼らに同調する

ただの買い物に来たわけだったが、こんな決心をする」とになる
とは…

人生何があるか分かったものではない

第十九話：マリナ街を行く N.O.・2（後書き）

次話、作中最強となるハンターが登場します…するはずです

グラード・ウルバヌスの由来ですが、

ルーマニアの”串刺し公””ドラキュラ公”と言われた、グラード・ツェペシュからと

第一回十字軍遠征の必要性を演説した、ウルバヌス二世からもじりました

作者は名前を考えられないで、歴史上の人たちから引用させていただきます

第一十話・マツナ街を行へ N.O.・3 (前書き)

いまだにバトルは無し、次の次くらいかな？

ドンダルマの旅長引きやつ

第一十話・マリナ街を行く N.O.・3

ドンドルマの街に到着したマリナは、長く座っていたために鈍ってしまった体をならしながら、馬車から降り立った

それから、驚嘆の声を発する

今まで村や自然界を飛び回っていたマリナには、このドンドルマの街がとても雄大で圧巻に思えた

連なる建造物と整えられた道路、そこを行き交う人々、露天の賑わい…

マリナの瞳に映るのは全て真新しく、感動的なものだった

マリナは急務があるとするカナメと名残惜しそうに別れる
後の二人とは一言で済ませ、マリナも当初の目的だった必要物資の
買い出しに、市場へと向かつた

市場にやつて来たマリナは、早々に物資を買い上げ、街の配達業者
にポツケ村を経由して自分の村に送るよう依頼した
村に送られた物資は、引き取りに来た兄ちゃんかアイルーの手に渡
り、住処へと運搬される手はずだ

マリナが街に来るにあたって、アイルーの村長から余分にお金を貰

つていた

それは、自分たちを助けてくれるマリナに対する純粋なお礼の気持ちであり、街に着いた時にマリナが好きなものを買えるよつこはからつたものだ

マリナもこの時は素直にその気持ちがあづかった

街ではレックス装備がゴツくて違ひの意味で目立つ

ちょうど田先に衣服を扱う店があるので、マリナはその店に入つていく

目を輝かせて衣服を眺めるその姿は、まさに年頃の女の子の様子だつた

今は服のセンスが分からなつマリナの変わりに、店主に選んでもらつていて
だが……

「な、なら……この服は……？」

「絶つっつ対にイヤ……」

そんな丈の短いスカートはけるか……。

「じゃあこの服は……？」

「さつきのよりお断りよ……！」

つていうか、なんでおわざから露出が多いやつばかりなのよ……。」

もつ向回のよつなやり取りが続けられたか分からない
マリナと店主の周りには、脚下された衣服が散乱している
中には衣服と呼べないよつな、異常な露出度の服もある
マリナと店主の騒ぎを聞きつけ、店の前には大勢の見物客が集まつ
てきている

今ではその見物客も店主に味方し…

『いいぞいいぞ…』

『けしからん、もつとやれ』

『はあはあ…あんな服きたら彼女の肌が露わに…』

などといった…まるで兄ちゃんみたいなやつが騒いでいる

田舎者で無知な私をいいこと、彼らはせりに由熱する
野次馬の一人が『街ではみんなやつてる』と叫んでから、他のヤツ
らも口々にそう言つのだ

右も左も分からぬ私は、皆が言つことを馬鹿正直に信じてしまい、
やがて言われるままに様々な服を着せられた

「うう…なんでこんな田に…」

「とってもお似合いですよ。」

マリナは泣く泣く試着室にて、渡された衣服に袖を通す
流石に試着を手伝ひのは、女性の店員だ

最初店主が入ってきたから、怒りの鉄拳で退場させたからでもある
が…

出来るだけ試着の時間を長くしようとていたが、店員の慣れた手
つきであつて、いつ間に着替えさせられる

マリナが観念すると、店員は笑顔で試着室のカーテンを開く

途端にマリナの姿を見た野次馬が、大きな歓声をあげる

「おおうーーめっちゃ 可愛いーー！」

「絶世の美女たる受付嬢が降臨したーー！」

マリナが試着させられたのは、ギルドの受付嬢が着用するといつ
“メイド服”なるものの、店主改良型だ
オリジナルのスカートを、ギリギリまで短くしたもので、野次馬たち
はしゃがんでアレを見ようとしている

不快感を露わにして睨んだが、逆効果…

涙目で睨んだことにより、かえつて興奮を助長をせてしまつた

熱狂した野次馬が次に提案してきたのが、これまで一番露出が多いもの

店主が言うにはハンター装備のレプリカらしいが、露出度が高くてマリナが必死で避けていたものだつた…

「最後はこの店主自慢の”ノワール”装備でどうだーー。」

「いや待て、この”キリン・X”をかたどった装備を着せるべきだーー！」

野次馬たちの熱狂ぶりに、マリナはおろか女性店員まで表情をひきしづらせる
しばらく口論を続けてきた野次馬たちだが、何か納得したような表情でマリナに迫る

「話し合いで解決した！

君にまじめに着てもいいことになつたーー。」

「いや解決しないよー。

私の意思の尊重つてものはないのかよー。」

マリナが抗議したが、興奮が最高潮に達した野次馬たちは止まらない
マリナは怖くなつて女性店員に抱き付き、助けを求めた…

『すまないが、どいてくれないかな？』

この喧騒の中心にいるマリナにまで聞き取れるような、存在感のある声が響く

その刹那、先ほどまでの熱狂ぶりが嘘のように、野次馬たちが静まり返る

マリナが分けも分からずにいると、奥の方から野次馬たちが左右に別れていき、一人の人物が近付いてくる

最後の一人が退いたとき、その人物の姿がマリナの目に映る

身長は高く筋骨隆々とした肉体に、丈の長い黒色の布を纏う
何より目をひくのは、布の下の白い包帯…よく見れば頭部や指先まで白い包帯に巻かれ、あるはずの素肌は見えない
おそらくは、全身を包帯に覆われている

「頼んでいたものを取りに来たのだが…大丈夫かな?」

包帯の男から発せられたのは、常人とはかけ離れた、あまりにも枯れた声だった

男の声を聞いて少しした後、女性店員がハツとして立ち上がり、男に頭を下げる

「し、少々お待ち下さい。」

そつと店員は店の奥に駆け出していく

店員がいなくなると、店の中を重い沈黙が包む
いつの間にか大勢いた野次馬たちも消え、今はマリナとその男のみ
男は店員を待つ間、赤いカバーに金色の刺繡が入った本を開き、それを読んでいる

店員はすぐに戻つて来て、男は本を大事そうに胸ポケットにしまつ

「\」注文の品です。」

「ふむ…。」

男は頷くと、店員から渡された品と引き換えて、代金を支払った

「どうで… 店主の姿は見えんが、何処に？」

すると店員は恐る恐る、マリナの脇に転がる店主を見る
男がつられて視線を移すと、偶然マリナと目が合つ
男はそこで初めてマリナの存在に気付いたようで、少し驚いていた

「……ふむ、店主の悪い癖が出たようだな。」

男はゆっくり歩を進め、倒れる店主の元に近寄る

男が店主を立たせ後頭部をつぶして店主はよりより四を醒ました

「は……私は何を！？」

「じ、これはこれは”ヴラード”様！」

二つの間にぬ越しに！？

「つこせつあだ…。

それより…店主のせいで、一人の娘が面倒事に合つたらしい。

何かしら、詫びをすべきだろ？」

男はマリナに一度視線を落とした後、店主にマリナへの謝罪を促す
店主が頷くと男はロープを翻し、店の外に向かう

その折に男から何かが落ち、マリナはそれを拾い、男の背に向かつて声をかけた

声を聞いた男が振り返り、マリナは近寄つて落とし物を手渡す

それは何かのカードのようで、光を反射して煌めく水色の表面上に、何やらたくさん文字が書いてあった

「すまないな…ギルドカードを落とすとは。」

男は謝礼の言葉と共にカードを受け取ると、マリナの顔をマジマジと見つめる

「街に来るのは初めてのようだな。」

名を聞いても……つと、名を聞く時は先に名乗るのが礼儀だな。
私の名は”ヴラド”、街の一角でハンター業をする男だ。」

「……は、はい。

私はマリナと申します。

あの……あなたのことはカナメ様よりうかがっておりました。」

「カナメ?

ああ……あの腕の立つハンターのことか。
しばらく会っていないから、忘れていた。」

「はい……カナメ様から、アナタが街で尊敬を集めるお方だと聞いて
おります。」

間近で話しをしていて気付いたことがある
ヴラドの包帯から微かに覗かせる肌は、火傷に覆われていたのだ
赤黒く焼け爛れた素肌は、まるで最近になつて出来たような火傷に
見えた

マリナの視線に気付いたヴラドだったが、特に隠そつともしない

「気になるか？」

昔……古龍につけられた火傷でな、ほぼ全身が醜い火傷で覆われている。

「カナメは他に何か言つてなかつたか？」

例えば……街の人々からの噂とかな。」

「いえ、それ以外は特に……。」

カナメが言つていた、グラードへの評価は、主にハンターのものだ
街の人々からの評価は、特に聞いてはいなかつた

「そうか……。」

といひで、その”斬波刀”はどうで手に入れたのだ？」

グラードが尋ねてきたのは、マリナの背にある”鬼神斬破刀”
マリナは斬破刀をとると、グラードに見せながら説明する

自分が雪山のある村の娘であり、父がハンターだったこと
そして父の形見である斬破刀を、自分が譲り受けたことを……

マリナの話を聞いたグラードは、納得したように頷く

「名を聞いてもしやとは思つたが……。」

君はメルヴィスの娘か？」

「 つ！？」

「 パ、パパを知つてゐるんですか！？」

マリナが急に食いつくと、ヴラードは少し驚いてたじろぐ

「この活潰さ、やはりアーヴィングの血を引いているだけはあるな。
私は君の父、メルヴィイスのハンター仲間であり、友だつた。

君とは前に一度会つたが……あの時は幼かつたから、覚えていない
だらうな。

それに…今ほどハンサムではなかつたからな。」

ヴラードは火傷のある顔を撫でながら笑う

事情を知つたマリナから見れば、笑えない冗談だ
皮肉つた冗談を聞いて苦笑していたマリナだったが、父の遺品と聞
いて表情を変える

「 父の遺したものですか？」

「 ああ……メルヴィイスの家を片付けてゐる時に出て來たもので、今
まで渡せなかつたものだ。」

「やうですか。

ありがとうございます、父の遺したものはこの斬破刀だけかと思つてましたが、ガラドさんがあついてくれたんですね。

お願ひします、父の遺したものを見せて下せこー。」

「フツ……やうと思つていてたよ。

その前に……そのよく分からぬ服装を直した方がいいんじゃないか？」

「あ……。」

途端にマリナは羞恥し、顔を赤らめて俯く

ヴィラドは一つ頷くと、やり取りを眺めていた店の店主に向かって

「店主、何かくれてやれ。」

店主は身震いすると、先ほどの店員以上の速さで店の奥に消え、すぐさま戻ってくる

「あこにく……マシなのは」の”アスール装備”しかありません…へ。

レプリカではなく本物ですが、詫びに貰つとこでくださいせえ。」

「うう……なんか嫌な予感するけど、仕方ないか。」

ガックリとうなだれながらも、マリナは試着室に向かつていったの
だった…

「あら……なんでこんなに胸元開いてんだよお……。」

「こ、似合つてこますぞーー！」

「店主よ……お主も真面目にしていれば、完璧な人間性なのにな……。」

マリナは街で、骨董品のアスールトを手に入れたのだった…

第一十話・マリナ街を行く N o . 3 (後書き)

なんか試着会みたいな雰囲気になつた…

動画見てたらアスール発見したので、マリナの装備にさせていただきました（笑）

主人公の夢は潰えそうでせね、マリナの好き嫌いでww

第一十一話・マコナ街を行く N.O.・4 (前書き)

ちよこシリアルス?

マリナ side

私は自分の役目である仕事を済ませた後、前々から欲しかった新しい服を見に、たまたま見つけた服屋に入つていったの
だけど、雪山育ちで俗世間に乏しい私でも、この服屋が異常なのには気付いたよ…

だって、展示されるほとんどの服が、マニアックな服か露出の多い服ばかりだつたんだもん…！

そればかりか店主や他の客も変だつたよ！

反抗しないことをいいことに、恥ずかしい格好をせて… ローハロウ…

そんなイカれた試着会を助けてくれたのが、前にカナメ様が教えてくれた最強のハンター”、グラド”さんだつたのだ

グラドさんを見た時は、黒装束で包帯姿だつたからとても怖かったんだけど、予想外に気さくに話しかけてくれた

それになんと、グラドさんは私のパパの友人だつたんだつて！
それを聞いて私ははしゃぎだすと、グラドさんは少し驚いたみたいだつた

さらに会話をすると、グラドさんはパパの遺品を所持しているから、家に誘われたの

家に行く前に気をきかせて服を貰つよつ働きかけたのだけど、正直
貰つた服も…危ない気がする

店を出たら案の定、街の人たちの視線が集まつたけど、ヴラドさん
と話しているのを見ていきなり顔を背けた

カナメ様の話しでは凄い人らしいけど、過ぎて目を合わせられないのかな？

最初はそう思つていたけど、賑やかだつた場所を、ヴラドさんが通る
と、ヒヤッとするくらい静寂につつまれる
人々はひそひそと何かを囁き合い、ヴラドさんを指差していた

流石に不審に思った私が、ヴラドさんに尋ねたけど、”黙して語らう
”つていう感じだった

結局その異様な光景が街の外に出るまで続いていた

つていうか、ヴラドさん街の外に住んでるの？

マリナ side out

街の門から出て數十分ほど移動した先、草原にポツンと建つ農場に、

マリナは連れて来られた

農場の周辺には、家畜化されたらしい“アプトノス”があり、和やかに草を食べている

マリナは少々呆気にとられた

街を救つた英雄とは思えない、あまりにも質素な家だからだ

普段洞窟で暮らすマリナから見たら幾分マシだが、それでも嵐が来たら軽く倒れそうな、悪く言えば廃屋にしか見えない

煙突から出る煙と、飼われた家畜がなければ、人が住んでるなどとは考えられないだろう

ヴラドが農場に近付いていくと、数匹の犬が出迎える
ヴラドは後ろ足で立つてすり着く、犬を一撫ですると、その鋭い目を農場の玄関へと向けた

「また君らか……何度来ても答えは同じだ。」

「いいえ、今日こじて満足のいく返事をいただきますわ!」

玄関の前にいたのは、学者風の衣服を着た二人
片方は男性、もう一人は眼鏡をつけた女性だ

眼鏡の女性はヴラドの前まで詰め寄ると、威張るように腕を組む

「もう今までのよつよつ回答ばげめんですわー！」

アナタはまだ自分の立場を理解されていないよつですよだから、話して付き合ってもらこますわー！」

「何度も言つよつて…来るだけ無駄だ。

あいにく先客がいるのでな、今口はお引き取り願う。」

眼鏡の女性は絶句すると、グラードの背後にいるマリナを見つける女性はマリナに向か言おうとするが、グラードに遮られ、はぶかれた女性は背後でヒステリックを起したよつて呟くが、グラードは無視、マリナもそれにならつて続く

玄関の前にはもう一人の男性があり、近付いてきたグラードたちに一元化する

眼鏡の女性よりは、幾分マシなよつだ

礼する

「アナタが来てくれれば、組織の内部もまとまり、アナタのカリスマ性が組織を強くしてくれます。

「グラードさん、どうしても考えは変わらないのでしょうか？」

「変わらないな。

君が私を評価する理由も分からぬでもないが、君が思つよつて優秀ではない。

それに、組織の重役には興味が無いし…私が上に立つべき人間だと
も思わん。

はるばる訪ねて来て申し訳ないが、私を説得するのは時間の無駄だ。

「

グラードは男にそう告げると、マリナを先に入らせ、一人に黙礼して
戸を開めた

家屋の中は、予想外に良く整っていた

必要最低限の家具と飾り付けの無い室内は、やや殺風景だったが、
定期的な整理整頓・掃除がされているようで、小綺麗な内装だった

そんな殺風景の中でも目立つのが、唯一飾り気のある小さな祭壇

「へえ…グラードさんは、神さまを信じているんですか?」

振り返って尋ねてみると、ちょうどグラードが黒装束を脱いだところだ
黒装束の下にも衣服は着ていたが、痛々しく巻かれた包帯がさうに
露わになつた

「私の生まれ故郷で信仰されていてな…幼い頃から信仰心は持ち続けている。この地域では、私のような者は珍しいようだがな。」

小さく笑いながら言つと、ヴラードは隣室へと入つていった

マリナは脇にひかえる子犬を撫で、もう一度祭壇へと目を向ける
蠅燭に灯る炎が、窓の隙間から入る風に揺られ、金細工の祭壇を煌々と照らしている

祭壇の隣には、ヴラードが持つていたのと同じ、赤い刺繡の入つた本が置かれていた

興味本位で本を眺めてみたマリナだったが、難しそうな文字の並びに顔をしかめ、読むのを諦める

祭壇を眺めて待つてみると、隣室から木箱を抱えたヴラードが来た
木箱をテーブルに置き、中身を丁寧に並べていく

それが父の遺品だとこいつことが分かったマリナは、そつとテーブルに近寄つていった

「メルヴィスの遺品を見るのは久しぶりだ。」

「ヴラードは懐かしそうに遺品を並べていくと、一つ取り出して、それをマリナに手渡した

それはマリナの父、メルヴィスの日記帳だった

田記帳には狩りの様子やその日の出来事が記され、随所に家族への言葉が書き残されていた

日記帳の始まりはマリナの誕生日、そこから毎日欠かさず日記を書き続けていた

自分でも詳しく知らない父のことを知れて、マリナは嬉しそうに頁を捲つていく

田記には時折グラードのことが書いてあり、どれも仲の良さが伝わってくるような内容だった

そして父の、自分に対する言葉を見つけた時には、自然と涙が浮かんでいた

そして頁を捲つていくと、何も書かれていない空白の頁が続く…

最後の田記の田付は、父の訃報が届いた1ヶ月前だった…

先ほどまでの歡喜は沈み、マリナは酷い喪失感を覚えた

田記帳をテーブルにゆっくり置くと、グラードの手で並べられた遺品の数々に目を向ける

父の衣服・財布・食器など、ほとんどが日常品だった

その中で、マリナは小さな御守りに手がついた

手に取つてみると、まるで何か特別な力が働くような、不思議な感覚を感じた

「それは力の護符…メルヴィイスが最期まで身に付けていたものだ。持つているだけで、力を得られる事のできる、神秘的な護符だ。」

「父が最期まで所持していたもの…

持つているだけで、父が見守ってくれるような気がする

「ヴラドさんはパパの…父さんの最期を知っていますか？」

日記はおそらく、帰宅してから書いていたものだ

なので日記には父がこの世を去る前にについては書かれていな

ヴラドは知っているかと思ったが、彼は首を横に振った

「残念ながら…詳細は知らない。

分かつているのは、考古学者から護衛の依頼を請けたこと。
そして”シユレイド地方”にある、とある古城で…メルヴィイスは命を落としたということだけだ。

すまないな…。」

「……」

落胆してないといえば嘘になるが、ヴラードが謝る理由は無い同行していなかつたのなら、仕方のないことだ…

そこから会話が無くなり、室内に重い空気がのしかかる

しかし意外にも、その空氣を打ち破つたのはマリナだつた

「父ちゃんのことはだいたい理解出来ました！」

なので、今度はヴラードさんのことを教えてもらつてもいいですか！

？」

「……ああ、構わんぞ。」

最初こそヴラードは困惑つてはいたが、やがて優しげな笑みを見せた
(目元しか見えないが)

「ワラードがさつて、いつからハンターに？」

「ふむ……最初からハンターだったわけではない。
元は第三王女付きの王国騎士だったのだよ。

まあ……二十歳の時に辞めて、依頼ハンター生活だな。」

あつさりとんでもない経歴をこぼした「グラード」
王国騎士といえば、エリート中のエリートで、知識にぞじこマリナ
でも分かることだ

辞めた理由を尋ねてみると、グラードは苦笑しながら答える

「第三王女のわがままっぷりは、私の手には負えなくてね…。
せめて第一王女様のような、聰明な御方に仕えておれば、もう少し
長続きしていたかもな…。」

まあ、本当の理由はたくさんの人々を助けたいと思ったからだがな。

」

「エリートへの道を捨てて、人助けに生きるですか…なんだかカッ
コイいですね！
そういえば、さつきの学者さんみたいな入たちは、グラードさんに何
て？」

「あれは……ハンターズギルドの職員だよ。
私にギルドで重役を担つてほしいらしいが、権力渦巻くような所に
は行きたくないのにな。
こづやつて…悠長に暮らしていた方が、遙かにいい。」

のんびりとしたその口振りから、本当に権力や金といったものには
興味が無いらし

狩りで得た報酬は、日々を暮らしていけるだけのお金を探し、後は寄付をするひとこと

本当に欲の無い英雄だ…

最後に気になっていた、愛用の装備を尋ねてみると、ガーフィードは頷いて地下室へと案内する

薄暗い地下室の松明に火を灯すと、明かりに照らされ壁に立て掛けられた武具の数々が浮かび上がる

自分の鬼神斬破刀と同等の武器の数々を眺め、マリナは感嘆の声をこぼす

大剣、片手剣、双剣、弓・ボウガンなど、数多くの武器が並ぶ

ヴラドが手に取ったのは、マリナが見たことがない形状の武器

「とある任務を帯びてユクモ村という場所に行つててな、この“スラッシュアックス”というものを作つてもらつた。
扱いは難しいが、なれば強力だ…。」

興味深くその武器を見つめた後、もう一度壁を見回してみる

多様な武器が並ぶ中で、圧倒的な存在者を放つ防具が一式あった…

漆黒の装甲で出来、赤い模様がある

防具の各所に見受けられる鋭い棘や牙らしきものからは、素材となつたモンスターの獰猛さが伺える

マリナは防具を見て、あまりの威圧感にブルッと体を震わせた

「それは”黒き神”と謳われし霸龍を討伐した折に、街の有名な工房で加工させた防具だ。

その防具は妙に馴染むのでな… それしか防具は無い。

ふう……炎王龍と対峙した時にコレがあつたならば、結果は幾分変わっていたのかもな…。」

防具を眺めてシニジリと語る、アラドアリ、ビコか後悔と自責の念が感じられる

「ふむ…マリナよ、君はこの後何か予定があるかね?」

「いえ…特にあつません。」

街には数週間ほど居残る予定ですが？」

「なら、狩りに行ってみないか？
メルヴィスの娘がどこまで成長したのか、見てみたいのでな。」

マリナは少し思案したが、返事はすぐに決まる

「ゼひー！
できれば、強くなれるよひ御指導お願いします！」

マリナの快い返事に満足するアリヤード

「良い返事だ。

指導となると…ヤツを連れていいくといにな。」

「はいー…

「…えと、誰ですか！？」

「まあ、そのうちヤツの方から来るだろひ。」

アリヤードの言つ人物が気になるが、地下室を出て行くので、マリナは

慌ててついて行つた…

ドンドルマの”悲哀の英雄”：
最強と最凶がぶつかり合つ日は、着々と迫つてきている
そのことを知るのは、誰一人としていない

第一十一話・マコナ街を行く N・4（後書き）

次話で、グラードがどんでもない戦闘力を発揮する予定です

伏線つぽいのはつすぎましたね

第一十一話・マコナ街を行く N.O.・5 (前書き)

久しぶり?に長い話になりました

戦闘描写良く分からないんで、このくらいです

第一十一話・マリナ街を行く 20・5

マリナが街に来てから数日…

滞在している間、街の宿とグラードの農場を、何度も行き来していた農場に来るのは優秀なハンターであるグラードで、狩りをするための訓練を受けるのが目的だ

訓練といっても、マリナは身体能力や戦闘技術が出来上がっているので、その他ハンターに必要な知識や立ち回り方を学ぶだけだ

モンスターの生態や素材の有用性、そしてマリナの唯一の欠点…“調合”だ

知識を覚えるのは良かつたが、調合については…適性が皆無なのでは、と思えるくらい下手くそだ

グラードは課題としてマリナに、初級中の初級の回復薬の調合をさせましたが、燃えないゴミが出来上がり

試しに難しい調合をさせてみたところ、怪しい煙を立ち上らせ、爆発が起きたのだった…

間近で指導を受けながら調合するが、マリナがやると何故か失敗…爆発する要素も無いのに、爆発する…

どうやらマリナには、調合の才に悪霊の加護がついてるらしい

「まあ……練習を積み重ねれば、いつか上手くなる。」

今日も調合の練習をしたのだが、やはり失敗。回復薬に蜂蜜を混ぜただけなのに、毒々しい色に変色……ゲリヨスの毒液みたいな色になつた

「大丈夫だ。

むしろ毒液を調合出来たんだから、素晴らしい才能じゃないか？」

「グスツ……フォローになつてません。」

毒液？を怨めしげに見つめ、マリナは肩を落としている
ツツコミをいれられるぶん、まだ元気はあるようだ

マリナとグラードとは、天と地の差があつた

マリナが調合書とにらめっこしながらするのに対し、グラードは調合書も見ずに手際良く調合していく

先ほどからグラードが調合しているのは、暑さ対策のクーラードリンクと、治癒力を高める活力剤だ

古龍に付けられた火傷の後遺症により、グラードの体は今でも炎熱に侵されているようで、苦痛を和らげるためにその一つを常用しているのだところ……

マリナは、ヴラードの達人並みの調合術を、羨ましげに見つめる
回復薬すら満足に作れない自分に腹が立ち、何度も悔しい思いをした

今までに成功した調合は無かつたが、負けん気の強いマリナは諦めず、再び調合の訓練を再開しようとした

「今日はここまでだ。

その代わり、今日は狩りにいくぞ……。」

行動を遮られてムツとしたマリナだったが、狩りという言葉を聞いて、表情を明るくする

狩りは、ヴラードと出会った日以来行つてなかつたのだから

ヴラードは、いつの間にか防具に着替えていたので、マリナも急いで狩りに行く準備をするといつても、常にアスール装備のために、斬破刀を手にするだけで用意は済む

太刀を手にしたマリナを確認すると、ヴラードは玄関に手をかける
生身の姿でも威圧感はあつたが、防具を着用したその後ろ姿はさら
に威圧感が増している

前回は軽い狩りなのに、ヴラードの本気の武装は見れなかつたが、

今回は、ヴラードの完全武装を目に出来た

背に差す大剣は”封龍剣・真滅一門”

マリナにはそれがどれだけ価値あるかは知らなかつたが、防具同様それからも強い力を感じていた

ヴラドは大剣だけではなく、腰に重量のある片手剣を差し、自作の皮ベルトでライトボウガンを左肩にさげている
一度に三種類の武器を装備するなんて、ずいぶん欲張りなハンターだと思ったが、見た目がカツコイいので気にしないことにした

ガチャッ ウワッ！？

ヴラドが玄関を勢い良く開くと、何かがぶつかる音と小さな悲鳴が聞こえた

「……何をしているんだ貴様は。」

「玄関を叩こうとした時に勢い良く開けられたら、誰だつて転ぶと思うが？」

玄関の向こうにいたのは、蒼い防具姿の女性・カナメだ
扉を開いた時に弾き飛ばされたようで、草の上に尻餅をついて、ヴラドを睨んでいる

「あっ、カナメ様！？
お久しぶりです！！」

「え、マリナ殿 わわっ！？」

立ち上がろうと地面に手をついた時に、マリナが弾丸のよろづに体当たりしてきて、今度は草村に押し倒される形となつた

「カナメ様あ、クンクン……はあ、やつぱりカナメ様だ！！」

「うう……頭が……。」

「えつー？どこか怪我をしているのですか！？
誰ですか、カナメ様に手を出す不届き者は！！」

「キヨロだあーー！」

マリナの天然ボケに激しくつっこむカナメ
それでもマリナが周囲をキョロキョロ見回していたので、諦めた

「そういうえば、お前ら知り合になんだってな？
どういう関係だ？」

「はい！乙女と乙女の関係ですーー！」

「そうだ……って違うーー！」

マリナ殿、少しの間お静かに願いたいーー！」

「はあ～い。」

マリナの気の抜けるような声に、ついついカナメの厳しい表情も綻んでしまつハツとして表情を締まらせ、カナメは用件を伝えようとしたのだが…

「丁度良い…貴様もついでに来い。」

「…一体何のことだ？
それより大事な案件が。」

「その案件は断る。

これで貴様の用件は済んだ、よつて一緒に来い。」

「私の意思は無視なのか！？」

ええい、そのような勝手な真似はさせんぞ！」

「…いいから来い。」

抵抗しようとしたカナメだったが、マリナに抱きつかれて上手く動けないもがいているうちに捕まり、ヴラドの手で一人まとめて引きずられていった…

さすがに街中を引きずられるのは嫌なので、諦めてグラードの言葉に従つ

カナメは呆れ、疲れ果てたようにため息をこぼす

右腕に可憐な少女がしつかり抱きついているせいで、カナメは歩きにくそうだ

そして街の人々は、その異様な光景に目を奪っていた

美女が美女に抱きついてれば嫌でも立つが、主な原因はグラードだ
黒い防具にたくさんの武器で武装した姿は、街の景観の中ではかな
り浮いている

まるで戦争か、大掛かりな狩りに挑むような雰囲気だ

人々のそういう視線を感じたカナメは、途端に不機嫌そうな表情
に変わる

マリナがキヨトンとしているが、カナメはグラードに一言何かを告げる

グラードは黙つて頷くと、歩く速度を上げ、街の集会所へと向かつた
集会所に着く頃には、グラードに集中していたイヤな視線が消え、代
わりに好奇心と尊敬の眼差しが増えた

街の人々と違う反応を見せるのは、全てハンター及びギルドの職員だ
皆が皆グラードに憧れの目を向け、中には手を振つたり名を呼んだり
している

「ヴラドさん、人気者なんですね。」

ヴラドが手を振り返すと、ハンターたちは嬉しそうに騒ぎ出す
街を救つた英雄に反応され、よほど嬉しいのだらう

「同業者にはな…。

街の住人からは、忌み嫌われている。
まあ、当然だろ？な。私の力が及ばないばかりに、街は古龍に破壊
されたのだから。」「

「何を言つのだ！

アナタがいたからこそ、炎龍を最小限の被害で退けられたのだぞ！
霸龍だつて、アナタが討伐したではないか！！」

「多くの犠牲のもとにな…。

この話しさは終いだ……それより、お前の獵団のヤツらが見ているぞ。

「

大きな声を出したために、ハンターたちの注目はさらに増えた
何より、普段冷静で物腰の柔らかいカナメが、珍しく取り乱すのだから
カナメが少し目を離していると、ヴラドはいつの間にか受付嬢の所
に行き、クエストを受注していた

「カナメ様、一体どうしたことなのでしょうか？」

街の人々がヴラドさんをあんな目で見てたのは、何か理由が？」

「…………うむ。」

カナメの歯切れは悪く、やはり難しい表情をする
カナメだけでなく、マリナの言葉をまたま聞いた他のハンターも、
同様に暗い表情を浮かべる

「我々ハンターは、彼が街を救った英雄と認めています。
ですが……街の人々は……彼を。」

「疫病神、死神と呼ぶ……か？」

そこへちょうど戻ってきたヴラドが、言葉を詰まらした先を言つ

「ここにはもう戻れ。」

私の評価など考へる意味は無い……。」

それ以上何も言つな

そう付け加えた後、ヴラドは態度を一変させて、受注した依頼書を
二人に見せた

カナメは見せられた依頼書に注目し、それまでの憤りも消えた

「黒狼鳥の討伐…場所は森丘か。

なるほど、アナタとマリナ殿とで行くには、ちょうど良いクエストでは？」

カナメが笑みを浮かべると、一人は何を言っているんだ？

…というような表情をする

何かおかしなことを言つてしまつたかと、微妙に焦るカナメに対し、

ヴラードは一言言つ

「お前も行くんだよ。
付いて来い。」

自分を連れて来た意味をようやく知ったカナメだったが、既に手遅れで、マリナの緩みかけた抱き締めが強くなつた

「待ってくれヴラード…！」

いくらアナタの言葉でも、私にだつて予定というものが！」

「貴様は書類の上で死にたいってのか？

貴様もハンターなら、死に場所は自然の中では思わんのか？」「

「ちょっと…危うく肯定しそうになつたではないか！
それに死ぬのが前提つて、何かおかしくないか！？」

「人はいずれ死ぬんだ、その中でやりたくもないことをするのは、
時間の浪費だ。」

もちろんカナメとしては、書類整理などよりは、狩りに行きたいと思っている
それでも返事を済らせるカナメは、良くも悪くも真面目な苦労人なのだ

唸るだけのカナメに対し、ヴラードは抱き付くマリナに視線を向ける

後は任せた

マリナはウインクして返すと、早速カナメの顔を覗き込む
その時マリナが火照ったような表情を浮かべたのを、ヴラードは無視
しておいた

「カナメ様、ヴラードさんもそう言つているんですし、一緒に行きましょう?」

「……しかし私にはやるべき事が。」

「ダメ……ですか?」

「うう……! ?」

少女の涙で潤んだ上目を受け、カナメは明らかにたじろいだ
同性で”その気”が無いカナメでも、マリナの小動物のよつたソレ
には、耐性が無かつた

おまけに周囲には、獵団のメンバーも何人かいて、少女を泣かせようとするカナメに、非難の目が向けられている

一つの選択肢に葛藤したカナメは、恨めしげにグラードを見る

明らかに、楽しんでいた

「グラード……帰つてきたら、仕事を手伝えよ?」

「お安い御用だ。」

結局は、グラードの手の中で、カナメは弄ばれていたため息をこぼして、自分に非難を浴びせたハンターを見ると、冷や汗を流して目を背けた

全員を訓練の名目でシバキ倒すことを決めたのだった…

《森丘》

「それで……コイツをどうやって討伐する?」

呆れ声で呟くカナメ

「貴様うに任せよう。」

投げやりな言葉のヴラード

「ハイ、私がやります！」

元気に名乗りをあげるマリナ…

黒狼鳥を討伐するために、三人は森丘にやって来た
黒狼鳥を探すため、ヴラードの勘とやらで移動し、見事黒狼鳥を発見
出来たのだが…

その黒狼鳥が何故か、段差にしゃくれた嘴が刺さった状態でもがいていたのだ

氣付かないよう、三人は背後から接近していく
一番槍は誰にするか、マリナは自分がやりたいと言っていたので、
カナメとマリナの二人でかかることにした

ヴラードは岩場に登り、胡座をかけて高みの見物だ

「…私はあの毒を持つ尻尾を狙う。

マリナはそれ以外を、効率的に攻めて欲しい。」

「分かりました。

ですが、一撃目は私にお任せ下さい。」

そう言つとマリナは斬破刀を抜き、地面と水平に構える刺突技の構えをとる

マリナの珍しい太刀の構えに、カナメは興味をひかせるが、すぐに自分の龍刀を構える

「マリナ、任せたよ。」

マリナは頷くと、一気に地面を蹴る

地面に転倒してしまうのではないかといふくらい、駆け出した時の体勢に不安があつたが、それが黒狼鳥の目に止まらない速度を生む

狙うは、黒狼鳥の頭を支える首

攻撃の動作に入った瞬間、予想外の動作が起きる

黒狼鳥は突き刺さつていた嘴を引き抜く、つまり首があるべき位置が変わった

対象の一点を狙うマリナの剣術にとって、それは一大事だった
だがマリナは瞬時に目標を変え、嘴を引き抜いたために浮き上がつた下あごに、鋭い刺突を突き刺した

斬破刀の切つ先は黒狼鳥の嘴を貫き、深いヒビをつくり、大量の出

血を起させた

黒狼鳥は嘴を碎かれた痛みに叫ぶが、すぐに持ち直し、襲撃してきたマリナを睨む

黒狼鳥が目の前の標的に釘付けになつてゐる時、カナメが動き出す無防備な尻尾を龍刀の鋭い太刀筋が襲う
一撃必殺の一閃だつたが、流石黒狼鳥といつたところで、堅い甲殻が尻尾の切断を防いだ

それでも尻尾は切断寸前で、あと一太刀いれば、完全に切れる

襲撃者が一人いることを知つた黒狼鳥は、激痛と不意打ちによつて激怒する

マリナとカナメを遠ざけるために、切れかけた尻尾を闇雲に振る
その際に赤い鮮血の他に、色の違う液体も飛び

その正体に気付いたカナメとマリナは、飛んでくる体液をかわす

「誤算だな。」

毒腺のある場所を斬つてしまつとはな。」

カナメが斬つた尻尾の位置に、運悪く毒腺があつたのだ
切断面から毒液が流れ、尻尾を振る度に毒液が飛び散る
となると、もつと根元の位置で尻尾を切断しない限り、毒液が飛び散ることになる

カナメが思案する中、マリナは果敢に敵を攻めていた

危険をかえりみず、黒狼鳥の懷に潜り込み、平突きで攻撃
刺突技が堅い甲殻の間を貫き、かわされても平突きを横に振り抜き、
微々たるものながら確実なダメージを与えていた

カナメも負けじと、黒狼鳥に突撃する

振り返った黒狼鳥の顔面を斬り、そのまま股をくぐつて尻尾の位置
に行き、斬り上げる

根元に近い尻尾はやはり固かつたが、龍刀の切れ味が勝る

最初の一撃ほどではないが、血液が流れ出し、毒液も流出していない

立て続けに攻撃を浴びた黒狼鳥は、距離を保つ意味で、背後に羽ば
たく

その時の風圧が、二人の体勢を崩した

間髪入れずに、黒狼鳥がマリナに突進する
マリナは横に大きく飛んで、突進を回避する

「危ない危な…やばつ…！」

マリナが振り返った先から、黒狼鳥が再び突進してきた

黒狼鳥は走り抜けず、かわされた位置で立ち止まり、体勢を崩したマリナに攻撃してきたのだ

迫り来る衝撃に身構え、目をつむつていると、横から引っ張られた

「うう…ありがとうございます、カナメ様。」

「構わん、次が来るぞ！」

黒狼鳥はまた立ち止まり、再びこちらに突進する
ただし、同じ手はくらわない

突進間近で左右に分かれた一人は、黒狼鳥の脚を左右から斬りつけた

脚へのダメージによつて転倒し、大きな隙が生まれる

倒れ込んだ黒狼鳥に容赦ない剣撃を浴びせると、深追いせずに離れる

その行動は正しく、黒狼鳥は立ち上がりそのままに尻尾を振り乱した

お互いに距離をとつて見据えるが、黒狼鳥はお構いなしに突進

同じ動作には慣れていたが、黒狼鳥は立ち止まつて再び突進ではなく、金属音のような咆哮をあげた

耳を裂くような痛烈な咆哮に、マリナの動きは泊まり、黒狼鳥はそこへ必殺の一撃を浴びせようとする

尻尾はまだ切れていない、鋭い甲殻と猛毒は健在
全力の力と憤怒のこもった、最強最悪のサマーソルト

逃げようにも、予備動作に入った黒狼鳥からは、逃げられない

「やう来ると思つたぞ？」

黒狼鳥の凶悪な尻尾が迫つたと思った時に、カナメの不敵な声が聞こえ、次の瞬間には尻尾があらぬ方向に吹っ飛んでいった

尻尾を失つた黒狼鳥は体勢を崩し、地面に墜落する

「危ないところだつたな。

半分賭けみたいなところだつたが、うまくいって良かつた。」

「い、一体何をしたんですか！？」

マリナの疑問に頷くと、どこか誇りしげに語る

黒狼鳥の咆哮には自分も怯んだが、前もつて耳を防いだために、大した被害は無し

狙いをマリナに定め、サマーソルトを敢行した時に、最高の一太刀を尻尾に合わせたそうだ
皮肉にも、黒狼鳥の強力な力が尻尾を切断させることになったそうだ

説明をしていると、黒狼鳥に動きがあつたために、気を引き締める
しかし、黒狼鳥の目を見たカナメは、静かに武器を下ろした
マリナも同じく、構えを解いた

黒狼鳥の目は先ほどまでのよつたな獣猛さは無く、幼童のよつたな弱気
な目だ

二人は今まで、このよつたな目をするモンスターを、何度も見てきた
かなわないと悟り、逃げ出そうとするモンスターの目だ

中には最期まで諦めず、大きな怒りを持つて反撃する者もいたが、
それは稀少な存在だ

だが依頼を請けた以上、弱つたモンスターであるうと、命乞いをする
ようなモンスターであろうと、仕留めなければならない

武器を構え直した一人を見て、黒狼は脚を引きずりながら、反対の
方向に振り返る

「黒狼鳥の呼び名も形無しだな。

弱さを知った貴様は、デカいだけのただの雛鳥だ。」

『ギャー！？』

突然黒狼鳥の前に立ちはだかつたヴラードは、驚愕する黒狼鳥の顔面を、大剣で殴り倒す

嘴は完全に砕け散り、殴りつけられた顔面は、大きく陥没した

瀕死とはいえ、一撃で死に至らせたヴラードに、マリナは心の中で賞賛した

「どうだヴラード、初めてとはいへ我々の連携はなかなかのものだつたろう？」

カナメはマリナの肩を抱き、誇らしげに言つ
マリナも彼女に認められたようで、とても嬉しそうだ

「確かに”連携”だけはな…。

高台で見物していたが、お前たちの欠点はだいたい分かつた。」

大剣わ地面に刺し、ヴラードは腕を組む

「マリナ、貴様は無闇やたらに攻めすぎだ。
持久力と俊敏性を持つて戦うのはいいが、その荒削りな攻め方は見直していった方がいい。

多少の傷は覚悟しているつもりだらうが、黒狼鳥のよつた、毒のあるモンスターには気をつけろ。」

「あう…す、すみません。」

「グラードの厳しい言葉に落ち込むマリナ

「だが、自分に合った戦い方をしているのは良いことだ。
突きを主体とした攻撃は威力に欠けるが、敵の弱点を的確に攻撃するには賞賛にあたีする。

「ごり押し気味を解消すれば、ずいぶんと良くなるはずだ。」

最後に頭を撫でてもう一、マリナはぱっと表情を明るくする

「なかなか良い指摘だな。

私は何か指導することはないか?」

カナメも期待したような表情をし、グラードに教えを請おうとしている

「…貴様には何も無い。
自分で考える。」

「えええ！？な、何故だ！？」

マリナにも教えたんだから、私にもアドバイスしてくれてもいいじゃないか！」

「お前はハンター歴が長いんだから、一人で考える。」

「グスツ……マリナと私の差、酷くないか？」

「こんなにも可憐な少女が泣いて頼んだりるというの?」

カナメは以前、マリナにくらつたような、涙目+上目を試してみる

そんな嘆泣を見たところで、私の心は少しも緩まん。

ヴラドに容赦なく一蹴させられ、カナメは怒つて涙を吹き飛ばす

「私たちはやる!!

よつてまだ少女と呼ばれる権利は持つてゐるはずだ！

「心靈耕種」

私には妻がいるし、子どもたちも世に送り出した。

「ウググ……。」

「ヴラードの整然とした態度に何も言えなくなり、カナメはワナワナと震える

もはや最初のアドバイスをもらえたかったことより、女性として扱ってくれないヴラードへの怒りだけだ

「 もう、ヴラードさん…！」

あまりカナメ様をからかってはいけませんよ、アドバイスくらいあげて下さいよ。」

「 ふむ…貴様がそう言つならな。」

「 おい、なんだその私との差は…！
酷すぎないか…？」

ヴラードはカナメの抗議を無視し、腕を組んで思案する
真面目に考えてくれてるのが分かつたので、黙つている

「貴様は…難しいんだよ。
ほぼ完璧だからな…。

自分に合つた戦いもするし、的確な行動もするし…。

お前は、自分の何が悪いか分かるか？」

「完璧といつて、欠点などあるのか？」「

「質問に質問で返すな。」

やはり突き放されるような口調で言われ、カナメはたじろぐ

自分の欠点は何か？

カナメは必死に考えるが、欠点という欠点が見当たらない
それでも、何かしらあるはずだと悩み考える

それに対し、グラードはため息をこぼし、自分の頭を指差す

「貴様は何事も真面目に考え、物事の表面だけを捉えすぎなんだよ。
言つなれば、人に右を向いてろと言われたら、一生右を向いてるよ
うなヤツだ。

だから、もし不測の事態に陥つた時、貴様は焦つて使いものになら
なくなる。

だからお前は、もっと馬鹿らしくなれ。」

「ば、馬鹿？」

カナメは面食らつたようになり、横のマリナはもはや話しが分から
ず、虫を追いかけて遊んでいる

「お前はマリナと一緒に、しばらく訓練を共にしろ。
そつすれば、お互に足りないものが何か…自ずと分かるはずだ。」

そう最後にまとめるに、地面に刺さった大剣を肩に担ぐ

「さて、ここからは私の出番だな。
マリナを連れて、少し離れている。」

「何故だ？」

力ナメの問いかけに、ヴラドは大剣の切つ先を、森丘の中心にそびえる山に向ける

「お前ら……騒ぎすぎだ。

飛竜のつがいが、私たちに気付いたじゃないか。」

不敵なその言葉のすぐ後に、山の方角から大きな雄叫びが響き渡った

山から赤い竜と緑の竜が、一直線にやつて來た

「な、火竜のつがいだと！？」

依頼書にはそんなことは書いてなかつたぞ！？」

「だからお前はダメなんだ。

敵が黒狼鳥だけなど、誰も言つてはいない。
さあ、貴様らは邪魔だから隠れていろ！！」

カナメは混乱しながらも、マリナの手を引いて草村に飛び込む

「まずは、雌火竜に死んでもらおう。」

皮ベルトで下げられたライトボウガンを左手で掴み、銃口を空中の雌火竜へと向ける
引き金を引くと銃口が火を吹き、弾丸が雌火竜の顔面に直撃し、時
間を置いて弾丸が爆発した

爆発に驚いて雌火竜は墜落した

リオレウスは空中から火球を放ちまくるが、グラードはそれらを無視
し、雌火竜に接近
立ち上がった雌火竜の脚を、一撃で切断した

脚の支えを失つた雌火竜は再び倒れ、グラードはその頭に封龍剣を根
深く突き刺した

しばらくもがいていた雌火竜だったが、大量の出血と強力な龍属性
により、絶命する

グラードは雌火竜を仕留めたことに慢心せず、次なる火竜へと目を向
ける

リオレウスは地上に降り立ち、雌火竜が殺されたことに激怒していた

火竜は怒りのままに、ヴラドに向かつて突進する
先ほどの黒狼鳥などとは比べ物にならない、直撃したら即死するよ
うな勢いだ

それに対しヴラドは、腰に差してあつた片手剣を抜き、火竜に向か
つて投げた

片手剣は回転しながら飛んでいき、火竜の右目へと突き刺さる

右目を奪われながらも、火竜はそのまま突進
しかし、ヴラドは動じない

封龍剣を両手で持ち、肩に担いで最大限にまで力を溜める

火竜が範囲に踏み込んだ時、ヴラドの封龍剣が溜められた力から解
放され、空を斬る音と共に振り下ろされた

しかし、肉が斬れるような音ではなく、鈍い音がエリアにこだました

目の前の火竜は斬れていなく、代わりに大剣の威力を受けた地面が
割れていた

「怖じ氣づきやがつて…。

貴様ももはや、空の王者などという、大層な存在などではない！…」

火竜は封龍剣が振り下ろされる瞬間、立ち止まっていたのだ

ヴラードは地面を割った封龍剣を持ち、身を捻つて火竜の側頭部を殴りつける

火竜は脳震とうを起こしてよろめき、雌火竜の亡骸近くに倒れる
ヴラードは火竜の片翼を封龍剣で刺し貫き、身動きが出来なくした
それから火竜の右目に突き刺さったままの片手剣を引き抜き、ボウ
ガンの銃口を頭部に向けた

「汝がため、安寧なる死後を迎えるよう神に祈る。」

安らかに眠りたまえ。

今までの激情を感じさせない、穏やかで透き通るような声で呟く
そして、ボウガンの引き金を引き、弾丸が火竜を苦痛から解き放つ
た。

「あの……なんだか分からぬいけど、凄かつたですーー。」

マリナがはしゃぎながら飛び出してこくと、ヴラードもひみつひ、火竜の開いた口を閉じさせてしまつてゐるところだった

「優しいんですね…。」

「神を信仰する私が勝手にやつてゐることだ…。」

火竜の口を開じると、ヴラードはゆづくつと立ち上がった

「飛竜のつがいか…もうそんな時期か。

私も今より忙しくなりそうだな。」

「そうだな…。」

「え? どんな時期がくるんですか?」

自分が知らない話題で置いて行かれないよう、カナメに尋ねる

「モンスターの繁殖期がやつて来るのだよ。」

納得したような顔で頷くと、頬に指を当てる空を仰ぐ

(「ここは、兄ちゃんも繁殖期なのかな?
いーお嫁さんでも見つけるといいのにね。」)

「なあ、ヴァード…。

時間が空いた今だから言つが…。

密林地帯で、外来種と思われるモンスターを発見した。
ギルドにそれを報告したところ、私が再び調査に向かうことになつた。

出来れば、協力してくれないか?」

封龍剣を肩に担ぐヴァードは、高台から草原を見下ろしながら聞いていた

それからため息をついて、背後のカナメに振り返る

「残念ながら、私はまた古龍観測局と行動を共にする。
街にはしばらく帰らない。」

「そつか…残念だな。

ではアナタがいない間、犬や家畜たちの面倒を見よ。」

良き回答を得られず肩を落としたが、すぐに立ち直る

「すまん、助かる。

報告ではシュレイド地方で、老山龍が動きだしたらしい。
私もそれに参加しなければならない。」

「いえ、大丈夫です。

ただ外来種が自然界にどう影響を与えるか、少し不安でしてな。」

「心配するな…。

そのモンスターが自然の秩序を乱すようなら、私が神の名の下に裁きを下す。」

カナメにそう約束すると、マリナに視線を向け、話題を変える

「アーツは優秀なハンターになるだろう。

私がいない間、あの娘を鍛えてやるといい。」

「フツ、元よりそのつもりだ。

そういうえば、アナタが珍しく彼女に目を止めているのは、どういった理由ですかな？」

「なに……友との約束を守っているだけだ。
火竜の素材は全てやる…私は一足先に帰る。」

そう言つと、グラードは火竜の亡骸を横目に、その場から立ち去つて
いった

「あ、カナメ様！」

「グラードさん、どこ行つたんですか？」

「彼なら、用事があると言つて先に帰つたよ。」

「へえ……。」

ポーッとグラードが消えていつた方を見た後、マリナは満面の笑みを
浮かべて振り返る

「なら……カナメ様と二人きりですね。」

「そうだ、疲れたことですし……キャンプでお休みしませんか？」

「うむ……そうだな。」

いろいろあつて、私も疲れたな。」

マリナはニッコリ笑つと、カナメの手を引いてキャンプへと帰つて
いった…

第一十一話・マリナ街を行く N.O.・5（後書き）

ヴラド・ウルバヌス 設定

武器

- ・封龍剣【真滅一門】
- ・マスター・バング
- ・クロノス・パンツァー

防具

アカム一式

発動スキル

- ・見切り + 3
- ・切れ味レベル + 1

天賦のスキル

- ・心眼
- ・業物
- ・風圧【大】無効
- ・火事場力 + 2
- ・装填速度 + 3

e t c . . .

本作最強のハンター

主人公はチートじゃないけど、コイツはチート

大剣を軽々と振り回し、片手剣を投げナイフのように投擲し、ライトボウガンを片手で撃ちまくる剛腕を持つ

昔、炎王龍の火炎を身に浴び、以来ずっと火傷の後遺症に苦しめられている

カナメはヴラドといふと、いじられ役になる…

第一二三話・再戦（前書き）

サブタイトルの通り、ヤツと再戦です

主人公の隠れた力が開花？します

第一二三話・再戦

マリナが街に行つてから、一週間が経とつとしていた

獣人たちの村は、相変わらず和やかでのんびりとしていて、いかにも平和を満喫しているような雰囲気だ

ただ忘れてはいけないのが、その平和を維持していられるのは、一匹の竜がいるおかげだということだ…

モモ side

マリ姉が帰つてこないと知つた旦那さんは、それはもう、何て言つていいか分からニヤいくらい暴れたニヤ

まあ、暴食期の時よりは幾分マシだったニヤ…

でも二、三日暴れたと思ったら、急に大人しくなつたニヤ

旦那さんが壊れたのニヤ

今日旦那さんは、西の方角を眺めてるのニヤ

砂漠しかない景色を見て、旦那さんは何が楽しいニヤ？

オイラの旦那さんは、痴呆症なのニヤ

「（やで、そろそろ行くか。）」

ん？ 旦那さんどこか行く気かい？

まあ、オイラの知ったことじやないのニヤ

旦那さんの言葉を無視して居眠りしてたら、頭に物凄い衝撃が来た

ニヤ

痛かったニヤ

「（あたし、もう少しあげて）」

ニヤ？ 旦那さんがまた同じこと言つたニヤ
いよいよ認知症になつたのニヤ！

ゴジンツー！

ブニヤー！ ？

「（おこにやら、何か言つて）あんだろ。」

旦那さん何か言つて欲しそうに見てるけど、痛くてそれどいじやないのニヤ！！

でも無視してまたやられるのは嫌だから、聞いてやるニヤー。

「えと… 旦那さんまだ起きていや？」

「（昔、あるやつと決闘してな… お前覚えてるか？）

「んなもん知らない二ヤ、そんな下らない話し…。」

決闘なんてバカバカしい二ヤ、そんな暑苦しこ」とは御免だ二ヤ
それに、オイラは覚えが悪いから、昔のことなんて忘れた二ヤ

「（よし、お前の部屋のマタタビは全部燃やしてやるよ。）

「一ヤ―――！」めんなさい二ヤ――！
もつぱわないから、許して二ヤ――！」

オイラは慌てて地面に額をこすりつけて謝ったの二ヤ
プライド？

そんなもん、旦那さん相手にはアマクズでしかない二ヤ
なんたって、言つたこと本當にやるから二ヤ――！

「分かった二ヤ、話しきを真面に聞こへやる二ヤ――！」

「（オイ、なんだその態度は？）」

「（ひつ……それで、旦那さんさびに何をして行くべ二ヤ――？）

「（ひむ……だがこれはヤツと俺との因縁、他人が知るじではない。）

「

うん……とりあえず言わせてなのニヤ

最初から話す気ないなら、オイラに話をふるな——なのニヤ！—！

モモ side out

『砂漠』

「（相変わらず…バカみたいな暑さだな、こには。）」

今俺は、獣人の村から西に広がる砂漠に来ている
ギラギラとした太陽と、どこまでも広がる熱砂の海…数年前来た時
と一緒にだ

壮大で過酷な大自然は、今も昔も変わらない

だけど、俺はだいぶ変わった…

数年前の俺とは比べ物にならないくらい、俺の戦闘力は上昇したし、
過酷な気候に対する適応力も身に付いた
俺の身体は、親父並みに大きくなり、今では水竜や鎧竜に匹敵する
巨大にまで成長した

喰えれば喰つ程に、闘えれば闘つ程に俺は最強に近付き、連戦連勝の毎
日…

ただし、無敗ではない

俺は数年前に、砂漠の暴君と謳われる角竜に、完膚無きまでに叩き
のめされた

当時は未熟だったとはいえ、負けは負け…

だが、やられっぱなしの俺ではない

今日はヤツに再戦を挑み、汚名を返上する時だ…

「（じこじこでも、じこじこするのかねえ？）」

俺の周囲には砂丘しかなく、小型のモンスターも、砂竜の姿も無い

俺はその理由を知っている

ここを繩張りとする角竜が、その絶対的な暴力をもって、ありゆる
肉食獣を寄せ付けないからだ

数年前に訪れた時には、群れの首領を失ったゲネボスや、餓死寸前の砂竜がいたが、今はそれもない

どこまで広がる砂漠しかない、殺風景な景観だ

砂漠をしらみつぶしに探すのもいいが、俺には食料事情があるので、

却下

ヤツと闘うとしたら、村の位置に近いこの場所で闘いたい

そこで俺は一つ、角竜についてのことを思い出す

確か…プライドが高かつたはずだ…

モモとは大違いだな

俺は空気を大量に肺に吸い込み、大きく口を開けた

「（オラ出てこい…！

脳筋片角猪突野郎…！）」

「（誰が脳筋じゃあ…！）」

「（ひねつ…？）」

こんなにひまくいくとは思わなかつた

俺が罵声を飛ばした瞬間、目の前の岩場付近から、大量の砂塵が巻き上がつた

砂塵から姿を現したのは、朱色の甲殻に覆われた角竜、角は一本し

かない

前回、俺が最後の最後でつけてやった、唯一の傷痕だ

角竜の希少種？っぽいやつは、派手な登場とは裏腹に、穏やかに近付いてきた

「（ほつ…）力くなつたな、小僧…」

「（お前はどこの聖帝だ…）

とこづか、お前脳筋のくせに話せるのか！？）

「（脳筋言つんじゃねえ！

話す程度のことなら、我輩には朝飯前だボケ…）

「（テメ…だいぶキャラ崩れでんじやねえか…）」
「（ええいやかましい…）

元はといえば、貴様が全部悪いんだ…」

「（責任転嫁か…？）

「（黙れ、とにかく死ねえ…）

コイツの怒りの理由はまったく分からぬが、行動が早くて助かる俺はコイツと話すためではなく、闘うために来たのだから

角竜のあの重厚な尻尾が、勢い良く振られた

速度・角度・威力、それら全てが合わさつてい

怒りで冷静さに欠けているというのに、こんなにも最高の一撃を繰

り出せるとは、賞賛に値する

だが今の俺には、かわせない攻撃ではない

俺は後方に素早く退き、姿勢を低くする

俺の頭上を尻尾が通り過ぎたのを感じ、俺も同じように、尻尾をな

ぎ払つ

角竜は俺の攻撃に驚いていたが、そのまま回転し、俺の尻尾に自分の尻尾を叩き付け、威力を相殺させた

「（どうやら、見かけ倒しの雑魚とは違つただな。）」

「（ああ、油断してると大怪我するぜ～）」

俺の攻撃をかわした角竜の雰囲気が一気に変わった

先ほどまではどこか余裕感が感じられたが、今の角竜からは、油断を廃した鋭い殺氣が放たれている

「（ほざくな！貴様如きにおくれを取る我輩ではないわ！！）」

凄まじい怒気に突き動かされ、角竜十八番の突進が迫る

俺が横に回避すると角竜が側面をかすり、勢いのままにそのまま突進、数十メートル先でブレーキをかける

徐々に速度を緩めていったが、角竜は突如反転、勢いが消されないうちに再び突進

虚をつかれた俺は完全に反応が遅れ、角竜の堅い肉体が激突する角竜は激突する寸前に、頭を下げて俺の体に潜り込ませ、一気に突き上げた

激突の威力と角竜の筋肉が合わさって、重量級の俺を宙に浮き、口クに受け身もとれぬまま地面に墜落した

「（フハハハハ！）

その程度の力で我輩に勝とうなど、夢のまた夢よー）」

「（まだまだ、テメエの遅い動きが可哀想だから、ワザとくらつてやつたんだよ！

さあ来い、脳筋野郎！－！）」

「（だから脳筋言つな－－－）」

角竜は再び高威力の突進をする

バ力の一つ覚えと言いたいところだが、コイツのは磨き上げられた、最高の突進だ

だが、真っ直ぐに走る突進の欠点は、改善されていない

俺は角竜の激突を前に、素早く横に跳んで回避する

巨体で重量のある恐暴竜には、本来無理な動作だが、俺は鍛錬と日々の戦闘である程度の身軽さを覚えた

素早い動きのモンスターには劣るが、コイツ相手には十分だった

横に跳んですぐ、俺は跳んだ先の地面を再度踏みしめ、横の角竜に渾身の体当たりをぶつけた

砂漠の砂に足をとられ若干威力が下がったが、側面からの攻撃を受けた角竜は、見事なまでに吹き飛んだ

すかさず追い討ちをかけようと接近したが、素早く立ち上がりて角を振り回す角竜の動きに、追撃は失敗する

「（おのれ…やつてくれるじゃないか貴様…！）

我輩を地面に伏させたこと、後悔させてやる…」

プライドが高い角竜は、案の定激怒した

怒りで身体能力が上昇したために、今度は上手くはいかない

俺は突進を連発される前に、至近距離にまで接近する

近距離でも角竜は強力だが、俺は近距離なら力を発揮出来る

立ち上がつたばかりで安定していない角竜は、俺の一発巨の体当たりで、大きくよろめく
よろめく角竜に、尻尾の一撃を浴びせるが、かわしつじて角竜は踏みとどまる

攻撃を受け続けた角竜は、もはや言葉を発せず、血走った巨で俺を見ていた

その怒りに満ちた巨を直視した俺は、一瞬動きが鈍ってしまった

俺に出来た一瞬の隙を見逃さず、角竜は身を捻つて角を振り上げる
角の先端が俺の巨の上を切り裂き、血が血飛沫となつて噴き出す

攻撃でひるんだ隙に、角竜はそのまま角で砂を搔き分け、その巨体は砂中に姿を消した

突如静けさに包まれる砂漠

俺は次に来る攻撃に備え、周囲を警戒した

付近に砂塵が巻き起こることも、砂中を移動する振動もないため、

どこから襲つてくるか分からぬ

周囲を警戒していると、前方の砂原で動作があつた
砂塵が舞うそれは、次の瞬間に弾丸のように飛び出してくるものだ
特攻に備える俺だったが、飛び出して来たのは角竜ではなく、大量
の岩弾

岩石は空高く吹き飛んでいき、俺の近くに降り注ぐ
意表を突かれた俺は混乱し、その俺に対し角竜は砂中から一気に飛
び出し、全重量をのせた体当たりをぶつけてきた

俺の巨体は砂の上に転倒し、大きな衝撃音が響く

「（やはり本気の鬪争は心躍るものがある…
さあ立ち上がり！

立つて怒りのままに、我輩に全力を出し切つてみそろ…）」

「（IJの…戦闘狂が…!
調子に乗るなよ…）」

肉体に感じる激痛に意識を持つていくと、沸々と俺の感情が煮えた

ぎつていく

それに伴い、全身の筋肉が隆起していく、一回り強くなる

「（ハハハハ！もつとだ、もつと怒れ！！

激情を力に変え、我輩に全てを見せ付ける！－）」

「（テメエ、ぶち殺す！）」

怒りはまだ浅く、身体の傷痕は開いていない
だが、怒りによって力は上昇している

角竜は初めて見る俺の異様な変異ぶりを見て、ひるみもせずむしろ、
心底楽しそうに狂喜した

俺と角竜はほぼ同時に走り出し、勢い良く衝突する

爆発音にも近いよつた、形容し難い凄まじい衝撃音が響き、俺と角
竜は後ずさる

それから、至近距离で互いの乱撃が起ころ

角竜が自慢の角を突き、俺はそれを首の動きでかわして噛みつく
俺が大口を開けて噛み付こうとすれば、角竜は角で俺の動きをいな
して、角を突き上げる

激しい乱撃をいなし合いながらも、たまに攻撃が抜けて血肉が飛び
散る

お互に傷が増えれば増えるほど、闘いの激しさはましていき、ま
た、怒りの絶頂に近付いていく

そしてソレは、同時に達した

俺は傷の痛みと苛立ちにより、角竜は戦闘の興奮により全力を發揮する

「（素晴らしい、最高の気分だ！！

貴様と闘うに小細工は不要！

真っ向勝負の誇り高き死闘をしてみたくなったわ！！」

「（御託はいいからかかってきやがれ！！

お望み通り、本氣の力でテメエをボコボコにしてやる……）

闘いに酔いしれる角竜が狂ったように叫び、俺は身も竦むような唸り声をあげて再び激突する

俺は大口を開けて突進して角竜の肩に喰らい付き、角竜は片角を俺の肩に深々と突き刺した

極度の興奮状態が互いの痛覚を鈍くしているが、傷からは大量の血が流れ出ている

俺が頸の力を強めれば角竜は負けじと、首を動かして角をねじ込んでくる

お互に膠着状態が続き、どちらの体力が死せるかの勝負になる

互いのサイズ的に体力は互角だったが、ジワジワときた激痛に対し、

俺の怒りは限界点を超えたようとしていた…

シュー……シュー……

膠着状態で何の動作音もない中、液体が蒸発するよつた音が鳴り出す

(ム?この音は一体?)

その不思議な音に角竜の興奮が鎮まり、冷静になつた角竜はその音の原因を探る

そして、ソレが何なのかをすぐに理解した

自分が相対する恐暴竜の体に流れる血が蒸発し、赤黒く凝固していったのだ

それだけでなく、恐暴竜に突き刺さつた角から伝わる熱は、生きている生物が持つものとは思えないくらい熱かった

角竜は驚愕のあまり角を引き抜いてしまつ

そして次の瞬間、恐暴竜の筋肉が更に隆起し、凝固していた血液の塊が弾け飛ぶ

隆起した筋肉は多数の古傷を開くが、それだけでなく、古傷が開きすぎておびただしい血が流れ出た

血は高熱の体温により凝固し、すぐさま傷は塞がる

その際、水の中に焼け石を入れたような、大量の蒸気が生まれた

今の恐暴竜は定期的に来る暴食期など比にならない、凶悪な状態と化している

限界を超えた怒りが理性と知性を無くし、目に映る敵を抹殺する“恐王”となつた

恐王と暴君の死闘…

苛烈を極める第二戦が勃発しようとしていた

角を外してしまった角竜だが、恐暴竜は恐るべき力で肩に噛み付いたまま

角竜は外しにかかるうとしたが、恐暴竜は単純な力のみで角竜を投げ飛ばした

「（ヌウウウ！なんという力だ！）」

投げ飛ばされた角竜は、からつじて受け身をとつて威力を軽減させていた

顔を上げて恐暴竜を見れば、堅い何かを噛み砕いて喰つていたそれは角竜の肩の甲殻、及びその下の肉だった

自分の肉体を喰われた角竜は怒り、必殺の突進の構えをとる

肉を飲み込んだ恐暴竜は、次に大きく息を吸い込み出した

その動作からブレスが来ることを予感した角竜は、突進を停止させ、回避行動を取る

恐暴竜は極限まで吸い込んだ後、一瞬動作を止め、次の瞬間前方に向かつて赤黒いガス状のブレスを吐いた

既に回避行動をとっていた角竜は、恐暴竜のブレスを見て戦慄した
恐暴竜の口から放たれたブレスは、前方に扇状に広がる
ブレスは広範囲でいて、放たれたブレス自体の長さも尋常ではない
それで恐暴竜はブレスをなぎ払うのだから、前方180。全てが射程に入っている

ブレスを吐き終えた恐暴竜は、再び息を吸い込む

今度は角竜を正面に見据えているため、回避行動は無意味だ

一か八かで角竜は恐暴竜に向かつて、突進を敢行する
この距離なら、ガス状のブレスすらも突き破り、強力な一撃を与えるはずだった。

もう少しで角が恐暴竜の顔面を刺し貫くところで、角竜は耳をつんざく程の大咆哮が襲う

それと同時に、凄まじい衝撃をくらって角竜は後方に吹き飛ばされた

予想外の攻撃を受けた角竜は、信じられないといった表情を浮かべる

（我輩は何をされたのだ！？
プレス？体当たり？

否…あれは正しく轟竜の、もしくは…。
いや有り得ん、ヤツ以外にアレをなせる者はおらんはずだ…！）

角竜の頭は混乱していたが、前方の恐暴竜が動き、直ぐさま戦闘体制を取る

しかし、先ほどの強力な攻撃により、意識もつひとつとなっていた

恐暴竜と角竜は睨み合いつゝように視線を交わしていたが、やがて…
恐暴竜が大地に沈んだ

そして…スースーと、気が抜けるような呼吸音が聞こえてきた

かくいう角竜もまた、体力消耗によつて砂原に崩れ落ち、恐暴竜と
同様に意識を失つた…

熱砂の闘争ここに終結

この死闘は引き分けという形で幕を閉じた

しかし、この死闘を見つめていた一部のモンスターたちによつて、

悪食の恐王と片角の暴君の闘いは永久に語り継がれることになる…

第一二三話・再戦（後書き）

主人公が途中圧倒的に強くなつたのは、とてつもない怒りのため…

激しい憤怒が体内のエネルギーを熱に変え、圧倒的な力を生み出す高熱の体温は、体外の血液を一瞬で蒸発させる

身体能力、恐暴性、肺活量などが上昇

その力は角竜の巨体をも投げ飛ばし、ブレスを広範囲に放つという尋常でない戦闘力を發揮する

反動として怒りが過ぎれば深い休眠状態になり、休眠でエネルギーが回復しなかつたら、高確率で暴食状態となつて目覚める

この小説内では、この状態を第一段階目の怒り状態と設定しますWW

これを考へついたのは、ラージヤンみたいになつたらいいなあと思つたからです

この怒り状態になる前動作としては、咆哮をあげて一瞬で古傷が開き、血が蒸発する姿を想像してもらえば…

あと主人公の最後の一撃ですが、

轟竜の咆哮 +

霸竜のソニックブラストの小型版を併せ持つたものであります

ちなみに予定では、もう一段階の怒り状態を計画しております

第一十四話・義兄弟の誓い（前書き）

主人公と角竜は仲良くなつちゃいます

第一十四話・義兄弟の誓い

スピ～スースー・パチンッ！
フガッ！

何かがはじける音と呼吸が苦しかったことで、俺は突然深い眠りから醒めた

起き上がるうとしたが、ものすごい力で、俺はそのまま全身に力が入らない心なしか、空腹感もある

無理して動くのも面倒なので、俺はそのままの姿勢でジッとする

だんだんと意識がはつきりし、今までの経緯を思い出していく

自分は確かにあの憎たらしい角龍をぶつ飛ばすために、砂漠に来た闘いの途中に意識が無くなつたが、自分がこつして倒れていふといふことは、リベンジならずに負けたのだろうか？

そつ思つと、虚しくなつて大きなため息がこぼれる

「（オイ……なにため息なんかついてんだバカ者。）」

はて……おかしな声が聞こえるぞ？

俺は声のした方向を向いてみると、あら不思議…
自分と同じよつて、傷だらけで倒れている角竜がいた
俺が驚いたような表情をしてみると、あからさまに不機嫌になつた

「（ジロジロ見てんじゃねえぞ）」

「（なんだこの野郎。）

テメエがぶつ倒れてるつてこと、俺がボロボロにしてやつたって
ことか…）

「（寝言は寝て言いやがれバカ野郎。）

俺が倒れてるのは、足が滑つたからだボケ。）

目が合つた瞬間に、お互に罵声を浴びせ始める
しかしじぢぢも倒れていて、その状態で罵り合つ姿はおかしな光景
だった

「（いいか、貴様は我輩に勝つたわけではないぞ。
貴様の方が最初に倒れたのだから、勝者は我輩だ。）

「（ケツ…小せえ野郎だなテメエは。）

そんな下らぬこと言つてゐるから、俺でせうわざつさだよ。）

「（何だと）ラーメン一度呑ってみや　ガツ！？）」

「（上等だー何度でも呑つて　アガツ！？）」

お互にいきり立つて無理やり立ち上がつたが、体に残る激痛が響いてまた崩れ落ちた
しばらく悶絶した後、また睨み合いが再開される

「（彭々しい…）の痛みが無かつたら、お前をハツ裂きにしてやるのにな。」

「（貴様に我輩を超えるなど、一生涯かけても不可能だ。
そうやつて言い訳をしてるのが、いい証拠だ。）」

「（負け犬が偉そつに講釈垂れでんじやねえよ、この脳筋野郎！。）

「

「（脳筋つて言つとじやねえ！）」

やはり脳筋といつ言葉には、過剰に反応してきた
そんなあからさまに否定したのでは、自分でもそれを認識している
のが分かる

脳筋といつ言葉を始まりに、またまた罵り合いが再開された

やがて罵声のネタが尽きたのと、闘いの疲労とでお互いの口数は減

つていや、最後はただの睨み合いになる

その睨み合にも、やがては飽きて止めてしまった

「（はあ…貴様とのやり取りは疲れる。）」

「（全くだ……だけど全力でぶつかり合った後に、ついでにこるのもなんか心地良い気がするな。）」

今俺には闘いに勝てなかつたことへの悔しさなどなく、むしろ全力を出せた清々しい気分でいっぱいだった

「（フツ…同感だ。）

我輩がここまで本気になつたのは、貴様が初めてかもしれないな。）

暴言・誹謗を飛ばしながらも、俺たちはお互いの健闘を讃え合つていたそれを素直に口にする事は無いが、言わなくても通じるもののが俺たちにはあった…

「（全く…貴様に噛まれた肩が未だに痛むではないか。）」「（それを言ひながら、お前が角をねじ込んでいたせいで、肩の感覚が全くねえよ。）

俺たちは互いの傷を見比べ、苦笑した
怒りと興奮で我を忘れていた俺たちは、まさかこんな大きな傷を互
いにつけたのかと驚いた

それから俺たちは、同じタイミングで大笑いした
もはや俺たちに私怨や確執などなく、互いに傷を付け合い、力を認
め合つた好敵手となつた

「（お前となんか闘つてたら、命がいくつあっても足りないな。）」

「（貴様とはよく考えが合ひのつ。
……なあ、貴様さえよければ我輩と兄弟分にならないか？）」

「（は…辛氣くせこ面して、何言つてやがる。）」

「（我輩は真面目に言つてゐるのだぞ？）」

俺は角竜の真剣な面もちと声色に、浮かべていた笑みを引っ込めた

「（いいぜ…ただし、上下のない五分の兄弟分だぞ？）」

「（最初からそのつもりだ。）」

俺たちは不敵な笑みを浮かべると、痛む体を無理やり起こす
まだ癒えていない傷から出血するが、真剣な場面に俺たちは激痛を

無視する

「（我輩たちには互いに付け合つた傷痕がある。以後、これが我輩らの兄弟としての証となる。貴様が危機に陥つたり、助けを必要とした場合、地の果てであつても駆けつけよう。絶対にだ…。）」

「（へッ、地獄の果てでも…だらう？ 地獄から来た兄弟、ここに誕生つてな。）」

「（地獄から来た兄弟か…どこかで聞いたことがある気がするが、良い呼び名だ。）

「！？」

角竜は突然体勢を崩して砂の上に倒れる

傷だらけの体で無理をしたせいで、体が動かなくなつたのだろう

もつとも、俺の傷はあらかた癒えているおかげで無事だが

「（勘違いするなよ！！ 砂に足を取られて滑つただけであつて、耐えられずに転倒したわけではないぞーー。）」

「（はいはい分かつてるよ。俺は腹減つたから補食しに行くが、しつかり休んで体癒やしな… 兄弟”。）」

俺は不敵な笑みを残し、岩場の方角へと走つていった
後には傷だらけで砂上に伏せる朱色の角竜だけ

「（ケツ…化け物めが。

貴様の攻撃痛すぎるんだよ。）」

角竜は一言ボヤくと、目を閉じて再び深い眠りについたのだった…

翌朝…

「（ふう～腹一杯だぜこのやうつ…。

にしても、最近喰う量が多いな… そろそろハンターか何かに狙わ
れそうだな。

ム？あの野郎、まだ寝てるのかよ。）」

朝日が昇ると共に、角竜のもとに戻ると、なんとも気持ち良さそう
に寝ていた
近付いて起き起しあうとしたが、悪戯する前に起きてしまった

警戒心の強いヤツだ…

角竜は寝ぼけ眼で起き上がつたが、欠伸一つかいたら眠そうな様子
が消えた

その後、角竜の朝食とやらに付き合わされる

角竜は飛竜の中では珍しく、草食のモンスターだ

砂漠での食料となると限られるが、角竜は乾燥に強いサボテンなど
を食べる

鋭い針をモノともせず角竜に俺はヒヤヒヤするが、本当に何ともな
いみたいだ

それにしても、殺風景な砂漠だ…

俺が向かつた岩場に草食獣はいたが、やはり肉食獣の姿は無い
前に訪れたことのあるゲネポスの巣にも足を運んだが、生物の痕跡
は無く、地面上には無数の白骨化した骸があつた

ある意味、角竜は俺なんかよりも生態系を破壊しまくっている
肉食獣がいなければ草食獣は安泰だが、エサとなる植物は涸渇して
しまう

この砂漠では食物連鎖の頂点である、肉食獣が存在していなかつた
俺が深刻に考えていると、食事を終えた角竜が振り返ってきた
俺は考えるのを止めたが、角竜が口にしたのは俺が危惧していたこ

とに関わる話しだつた…

「（さて…貴様に一つ頼みたいことがある。
一人でも出来るが、貴様も連れていきたいのでな。）」

「（まさか人間の村を襲うなんて言うなよ？）」

「（ワハハハハ…！心配するな！

人間の村など、との昔に全て壊滅させてやったわー！）」

〔冗談で言つた俺に対し、角竜はとんでもないことを笑いながら告白
する

「（お、おい…お前本当にそんなことを…。）」

「（我輩の領を何度も侵すから、ハンターーー」と村を滅ぼしてやつた。
下郎共が泣き叫んで逃げ惑う姿は、正に圧巻であつたな！

おっと、話しが逸れたな。

我輩が遠出していた時、身の程をわきまえぬ下郎が巢くいおつた。
我輩と兄弟とで愚かな愚物を抹殺しようつた。）

人間を抹殺したことをサラッと流す角竜

少しの罪悪感も後悔もしない口振りに、俺は言によつもない不安に

驅られる

とんでもないヤツと兄弟分になつたものだ…

「（モンスターの一匹、一匹くらいいいじゃないか。
それに…自然界では自分一人で生きてるわけじゃないんだし、上手
く共生しないと。）」

「（兄弟…本気で言つてるのか？）」

角竜は意外といった感じで見つめ返してくる
当然だ、転生してきた俺には未だに人間としての知性があるのでから

「（人間らしい考え方だな…確かに共生していくことも大事かもし
れん。
だが…そんなものはやりたいヤツが勝手にやればよいのだ。）」

兄弟から返ってきたのは、予想通り否定の応え

「（人間の営みはどうだか知らんが、は闘争に勝ち続けた猛者こそそ
が絶対…それが我輩の持論だ。
我輩は力をもつて外敵を駆除し、砂漠の支配を絶対的なものとした
のだ。

自然の営みなど知ったことか…我輩がいる限り害獸共にこの地は踏
ませぬ…）」

「（ですが、暴君と謳われるだけはあるが…兄弟は草食獣は追い払わないのか？）」

「（彼らは特別だ！！
彼らは孤児だつた我輩を育ててくれたのだからな！
昨夜は特別許したが、彼らを標的とするなら兄弟であつても承知せぬぞ！）」

急に声を荒げてきた角竜を、俺は困惑しながらなだめる

なるほど、そういう過去があつたのか…
自分を育ててくれた草食獣たちに恩返しをすべく、天敵である肉食獣を退けてきたとは…
それが本当だとするなら、まだこいつを見限るのも早いかもしけない…

「（それと群れる雑魚共を駆逐するのは気分が良いぞ！
逃げ惑う輩を追い詰めるあの感覚は素晴らしい！）」

訂正する…

やはりコイツはサテイスト・バトルジャンキー・タイラントだ…

結局、あの後俺は砂漠に棲み着いた外敵とやらの討伐を強制された。腹が減るが、兄弟が草食獣を喰うことを許さないので、俺もソイツを喰うといつ名目で向かつことにした。

どうでもいいが、コイツが草食獣を食べることを許可しないなら、砂漠に進出するのは不可能になる。

俺たちは標的がいるという場所まで、雑談しながら向かつている。その中で俺の暮らす拠点の話をしたら、えらく興味を持つてきた。どうやら、砂漠にある自分の繩張り以外では暴君つぶりは發揮しないようだ。

こいつやって話している分にはいい奴なのだが、敵を見つけるとすぐに突進するから困ったものだ…

たつた今、標的がいる場所に近付いたところで角竜が突っ走りだした

あとに続いていくと角竜は岩場に入つていった
岩場の奥にいたのは、轟竜だった

傍らには草食獣の子どもがいて、轟竜に襲われそうになつてゐるところ

ろだつた

轟竜は突然現れた俺たちに注意が向き、そのスキに子どもは逃げていった

隣を見れば、草食獣を手に掛けられたからか、凄い殺氣を放つ角竜がいる

「（下郎めが…一瞬で慘たらしく殺してやるー）」

『ガアアアアア…！』

突進した角竜に対しても轟竜は大咆哮を放つが、角竜は無視して轟竜を吹き飛ばした

モンスターが空高く吹き飛ぶシユールな光景に、俺は愉快な気分になつた

「（まだまだあ…！）

我輩の制裁はまだ終わっておらぬわあ…！」

怒れる角竜に吹き飛ばされ、踏み潰され、叩き潰される轟竜は、どんどんボロ雑巾のようになつていく

そんな微笑ましい光景の場所に、逃げたはずの子どもが戻ってきて
しまった

轟竜はスキをついて抜け出し、子どもに襲いかからうとしたが、そ
こは俺が阻止しておいた

「（でかしたぞ兄弟！！

この卑怯者めが、死に絶えろ！－）」

「（そうだそうだ！－

幼児虐待未遂で、お前は集団リンチの刑だ！－）」

『ギャアアアアアアア－！－』

屈強な足を持つ二体に蹴られ、さすがの轟竜もあつという間に虫の
息になつた

轟竜が動かなくなつても暴行は続き、何度も叩きのめされて、最後
は俺の腹にしつかりとおためられた

後には、角竜と恐暴竜の大きな大きな雄叫びが砂漠に響き渡つたと
いづ...

第一十四話・義兄弟の誓い（後書き）

ディアブロス・希少種？

通称：片角の暴君

砂漠に広範囲な縄張りを持つ、朱色の甲殻を持つ角竜の突然変異種
主人公にも匹敵する実力を持ち、主人公並みにしぶとい
脳筋と言われると激しく怒る
その通りで、頭はかなり残念なヤツ

強者至上主義のために、弱い存在には興味を示さず、どうでもいい
と思っている

ただし、草食獣は命を懸けて守護するダークヒーロー

この角竜のモチーフは、もちろん片角のマオウ

戦闘時の性格は、聖帝サウードみたいになります（笑）

れて…

この後の展開で少し悩んでいます

あと一体恐暴龍を登場させるのですが…

ソイツを主人公の実の妹としてか、ちゃんとした嫁として出すか迷つてます…

どっちの方がよろしいでしょうか？

感想、お待ちしております

第一十五話・リア充してんじゃねえやテメエー！（前書き）

タイトル通りです…

第一十五話・リア充してんじゃねえぞテメエ――

モグモグ…ムシャムシャ

「（どうでもいいが兄弟……貴様はいつまで喰つておるのだ？）」

「（喰い終わるまで…ハムハム。）」

「（それはそうだろうが…まあいいか。）」

不届き者の轟竜を一人でボコボコにしたあげく、それをうまそうに喰つている俺

人間社会だったら、獵奇的殺人事件で捜査されるくらい、轟竜の亡骸は酷かつた

ちなみに今、轟竜をくわえながら砂漠を移動している

いつもならサッサと喰うが、兄弟が草食獣の捕食を認めないので、こうやって少しづつ喰つているのだ

どうでもいいけど、轟竜の肉美味いな…

俺たちがどこに向かっているかといつと、角竜の寝床だ
理由は、義兄弟となつた俺を信頼して寝床とある者を見せたいとの
こと

乱暴者だが、ここまで俺を信頼してくれるのなら、俺も家に招待し
なければならぬ…

移動している最中、ふと砂漠に似つかわしくない光景が見え、俺は
それに視線を向けた

「（兄弟… あればもしかして？）」

「（ああ… 我輩が滅ぼした村だな。
勘違いするな：人間が先に手を出した。
やられたらやり返す、人間の自業自得だ。）」

「（イツなら、肩ぶつかっただけでも因縁つきそつだ
それにして、この廃村は土台がある以外、村だった面影はない

角竜が襲撃してきたことを想像すると、俺は恐ろしさに身震いした

俺たちが砂漠を移動して数時間経つ
いいかげん移動に飽きてきたところで、角竜は石場の方に入つてい
つた

入つていつた先には、湧き水が溜まつて出来た小さな湖があり、そ
こにはたくさんの草食獣がいた

草食獣は俺たちを見ても逃げなく、のんびりと散歩などをしている

角竜に守られてこるおかげで、ずいぶんと警戒心が無くなつたらし
やうつと思えば、この場の全ての草食獣を仕留められるへういだ

「（うれだけじると、肉食獣も頻繁にやつて来るだらう…）」

「（ああ…だが不屈き者共は我輩によつて砂漠の塵と化す。）」

「（納得だ……そうだ。）

肉食獣を殺すだけなら、死体はとつとこしてくれよ。

飛竜はなかなか美味しいからさ。）」

「（構わんが…あまり長くは置いておけぬぞ…）」

これで砂漠における食料調達は、これとか楽になる
他人が倒した生物を喰うのは少し悪いかもしけないが、ライオンや
ハイエナも普通にやつてると聞く

ただしハイエナのように「腐肉食ではないので、腐った肉は遠慮する雑談をしていくと、角竜は岩場にあるほら穴の前で立ち止まつた穴は俺でも入れる大きさで、中はよく見えないがけつこう広く感じられる

ほら穴の奥には何かがいるらしく、足音が聞こえてくる足音の大きさからして、草食獣などではない

俺はくわえていた轟竜を地面に置き、角竜に尋ねてみる

「（奥には何がいるんだ？）
この足音からして、大型の生き物だろ？」

「（ふむ…家内だ。）」

「（いややうじやなくて……って、なんだと？）」

俺が情けない声を出すと、角竜は意味が分からなく首を傾げる

「（だから我輩の家内だ。
別の言い方なら、妻もしくは嫁だ。）」

「（なに？――？）」

俺が大声を出して叫ぶと、ほら穴の奥からガタッと音がした
角竜は俺に静かにするよつ戒める

「（大声を出すな……家内は体調が優れないのだ。）」

「（うひ……すまん。）」

俺が素直に謝ると、角竜はほら穴へと俺を招いた

ほら穴の奥にいたのは、もう一匹の角竜

体の大きさは兄弟を一回り小さくした感じで、体の色は黒……亞種だ

「（お帰りなさい、あなた。）

さつもの大声は……あの……そちらの方は?」

雌の角竜は俺を見て、少し怯えたような声で尋ねる
恐暴竜を初めて見れば誰だって怯えるが、怖がられるとへこむ…

「（我輩の義兄弟だ。
心配するな……強面だが根はいいヤツだ。）」

角竜がそう説明すると、雌の角竜は警戒心を解いた
よほどコイツを信頼しているのだな…

「（あの…はじめまして、私はこの方の妻です。
主人の御兄弟に対し、失礼なことを…。）」

「（い、いえいえ…お気になさらず。）」

ペコリと頭を下げてきた角竜の嫁さんに、俺は慌てふためく
とりあえず頭を上げると、嫁さんは首を傾げて見てきた

なにこの子…メツチャ可愛らしこやん…

兄弟には勿体ないくらいよく出来た子じゃないか…！

と思つたが、他人の嫁に手を出すゲスじやないし、まず兄弟がおっ
かなくてやれるか…！

「（無理はあるな、しつかり休んでおけ…。
やつこひ」とで、兄弟とは仲良くなってくれ。）」

「（はい…主人に仕える愚妻でござりますが、どうぞよろしくお
願いします。）」

「（えっと…）ちりこね、ようじくです。）」

俺が挨拶を終えると、嫁さんと視線が合つ
困惑している俺に対し、嫁さんは一コツと微笑む

めひや良い子じやねえか！

兄弟の嫁さんじゃなかつたら、確実にお持ち帰りしてたわ！

俺は意味不明な言葉を叫びながら六を飛び出し、田の前の湖に
飛び込んでいった…

「（暖まつたか？）」

「（だいぶな…もう一つくれ。）」

飛び込んでいった湖の水は、かなり冷たかった
実際はさほど冷たくないのだろうが、砂漠の気候になれた俺にはか
なり冷たく感じた

今は兄弟に看病され、体を温めるためトウガラシをかじっている

「（それにしても、良く出来た嫁さんじやないか。
お前には勿体ないくらいだ。）」

「（自慢の家内だ。

兄弟…手を出しあがつたら殺すぞ？）」

「（おーおー、他人の嫁に手を出す鬼畜じやないぞ俺は。）」「

「（どうだかな。）」

兄弟は俺をどんなヤツだと思ってるのだろうか?
と突いてやろうかと思つたが、トウガラシを取り上げられたので謝
罪した

「（黒い角竜か…亞種の娘にしては、やたら大人しかったな。）」

「（知らないのか？

角竜のおなごは繁殖期が近付くと、ああこうふうに変色するのだ。）

「（ソイツは初耳だな…。

カプコンめ…追加要素でもいれたのか?」

「(かぶこん?なんだそれは?
強いのか?)」

「(いやいやいつかの話...)」

危ない危ない…あやうくメタ発言?的ないと言いつだつたぞ
あれ?なんかこんがらがつてきたぞ?

兄弟が何コイツ?みたいな目で見てきたので、残りの質問を聞いた

「(ふむ…確かに変色した角竜は凶暴性が増すが...)」

家内は元々体が弱くてな、普段も変色後もさほど変化はないのだ。」

「

話しによると嫁さんと出合つた時、嫁さんはハンターに追われてい
たそうだ

体が弱い嫁さんはいい獲物だつたらしく、たまたま通りかかった兄
弟がいなかつたら、確實に死んでいたらしい

どうやら肉食獣を追い払つたのも、人間の村を破壊したのも、実は
嫁さんのためでもあつたらし

それからなんやかんやあって、今の仲睦まじい夫婦となつたようだ

「（どうあえず言わせり。）のコア充野郎。」

「（つあじゅうへ貴様はさつきから何を分けのわからん」とを言つておるのだ？」

「（うるせーうるせー！

なんだその…よく出来た出合には「ノノヤロウチクショウ…俺だつてなあ、俺にだつてマリナがいるんだバカ野郎！
お前なんて死んでしまえー。」

泣きじやくつて騒ぎ出す俺を、兄弟はポカーンと見つめる
やがて何かひらめいたらしく、俺の腹下に角を突っ込み…

冷たく寒い湖へと放り込んだ。

「（落ち着いたか？）

「（おかげ様で…。

トウガラシくれ。）

第一十五話・リア充してんじやねえやテメH---(後書き)

アンケート調査!!協力ありがとついでれますー。

新たに登場する恐暴竜を、
嫁にするか…
妹にするか…

今のところ、ほぼ互角であります

新しい恐暴竜が出るのはもう少し先ですが、読者様の希望をお聞かせ下さい！

読者様に質問

いつも私の小説をお読みいただき、本当にありがとうございます
PVや感想が増えるたびに元気が湧きでてまいります

さてこの回では一つ、読者様にお聞きしたいことがござります

只今嫁か妹かで、アンケートをいただいていますが、それとは別件
です

ちなみに、嫁か妹かは互角の票となつております

お聞きしたいというのは、モンスターの名前のことです

今まで人間のキャラ以外、主人公を含めたモンスターたちには名
前がついていませんでした

名前をつけなかつたのは、モンスターに名前をつける習慣などある
か？

…と考えてわざとつけなかつたのですが、これからモンスターを増
やすにあたつて「ゴチャゴチャしそうです

そこで読者様に質問です

?これまで通り
?名前をつける

どちらがいいでしょうか？

ちなみに名前を付けるなら、そういう習慣を知ってる主人公とマリナが名前を考案することになります

後書きに書いつと思つてたのですが、毎回忘れしてしまつてたので…

「嫁か妹か」と一緒に、皆様の「希望をお待ちしております

この回は誤をある程度いたしました消去しますので、しおりを挟む方は前話にお願いいたします

急にアンケート調査など、ドタバタしてしまい申し訳ございません
このような不祥が起らぬよう、これからは気を付けていきたいと思ひます

長々とすみませんでした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9674v/>

生まれ変わって恐暴竜？

2011年10月9日19時04分発行